Oracle® Identity Manager

管理およびユーザー・コンソール・ガイド

リリース 9.0.3

部品番号 : E05087-01

2007 年 3 月

ORACLE®

Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソール・ガイド , リリース 9.0.3

部品番号 : E05087-01

原本名 : Oracle Identity Manager Administrative and User Console Guide, Release 9.0.3

原本部品番号 : B32450-01

原本著者 : Don Gosselin

Copyright © 1991, 2007 Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性があります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに ix

対象読者 x
ドキュメントのアクセシビリティについて x
関連ドキュメント x
ドキュメントの更新 xi
表記規則 xi
サポートおよびサービス xi

1 管理およびユーザー・コンソールの概要

ユーザー・ロールと機能 1-2
リソース・モデルの概要 1-2
承認プロセス 1-3
プロビジョニング・プロセス 1-3

2 自己登録

Oracle Identity Manager アカウントの作成 2-2
パスワードの変更 2-3
自己登録リクエストのトラッキング 2-3
管理およびユーザー・コンソールへのログイン 2-4
管理およびユーザー・コンソールのログアウト 2-4

3 Oracle Identity Manager の使用

Oracle Identity Manager の検索機能 3-2
検索（問合せ）の作成 3-2
ワイルドカードの使用 3-2
検索の動作 3-3
特別なユーザー・インタフェース 3-3
テキスト・エントリの切捨て 3-3
プロセス・フォームでの子表の表示 3-4

4 マイ・アカウント

アカウント・プロファイルの表示と変更 4-2
パスワードの変更 4-2
パスワードの変更および取得のための質問と回答の指定 4-3
代行者への担当業務の委任 4-3

5 マイ・リソース

マイ・リソースの表示 5-2
リソース・リクエストの表示 5-3
新しいリソースのリクエスト 5-4

6 リクエスト

リクエストの作成と管理 6-2
リソースの許可 6-3
リソースの無効化 6-5
リソースの再有効化 6-7
リソースの失効 6-9
リクエストのトラッキング 6-11
リクエストの検索 6-11
承認の詳細の表示 6-13
プロビジョニングの詳細の表示 6-13
ユーザーまたは組織ごとの表示 6-14
リソースごとの表示 6-14
リクエストのコメントの表示 6-15
リクエスト・ステータス履歴の表示 6-15

7 To-Do リスト

保留中の承認の確認 7-2
オープン・タスクの管理 7-3
オープン・タスクの表示 7-3
オープン・タスクの再割当て 7-4
オープン・タスクへのレスポンスの設定 7-4
アテステーション・リクエストの管理 7-5
アテステーション・リクエストの表示 7-5
アテステーション・アクションの保存 7-6
コメントと委任の更新 7-7
アテステーションの送信 7-7

8 ユーザー

ユーザーの作成 8-2
ユーザー・プロファイルの編集 8-3
ユーザーの無効化 8-3
ユーザーのパスワードの変更 8-4
ユーザーの管理 8-4

9 組織

組織の作成 9-2
組織の管理 9-2
組織の検索と表示 9-2
組織の有効化 9-3
組織の無効化 9-3
組織の削除 9-3

組織詳細の管理 9-3

10 ユーザー・グループ

グループの作成 10-2
グループの管理 10-3
ユーザー・グループの検索 10-3
ユーザー・グループの削除 10-3
ユーザー・グループの表示と管理 10-4
メンバーとサブグループ 10-4
メニュー項目 10-5
管理グループ 10-5
アクセス・ポリシー 10-7
メンバーシップ・ルール 10-8
権限 10-8
許可されたレポート 10-9

11 アクセス・ポリシー

アクセス・ポリシーの作成 11-2
アクセス・ポリシーの管理 11-4

12 リソース管理

リソースの管理 12-2
リソースに関連付けられている組織に関する作業 12-2
「リソース管理者」オプションの使用 12-3
リソースの管理者としてのユーザー・グループの割当て 12-3
新しい管理者グループの作成 12-3
管理グループの権限の更新 12-4
「リソース認可者」オプションの使用 12-5
「リソース・ワークフロー」オプションの使用 12-5
ワークフロー・ビジュアライザの起動 12-6
ワークフロー・ビジュアライザの使用 12-6
ユーザー・インタフェース 12-8
ドラッグ・アンド・ドロップの使用 12-9
「表示オプション」の使用（メニュー項目） 12-9
タスク・ノードの使用（右クリック・メニュー） 12-10
展開ノードの使用（レスポンス・サブツリー） 12-11
ワークフロー定義の「プロビジョニング」イベント・タブの使用 12-12
「プロビジョニング」タブ 12-12
「リコンシリエーション」タブ 12-12
「サービス・アカウント」タブ 12-12
「ユーザー・イベント」タブ 12-12
「組織イベント」タブ 12-12
「リソース・イベント」タブ 12-12
「フォーム・イベント」タブ 12-12
「アテステーション」タブ 12-13
タスク詳細へのアクセス 12-13
「一般」タブ 12-13
「自動化」タブ 12-14

「タスクの割当て」タブ 12-14
「依存先」タブ 12-14
「リソース・ステータス管理」タブ 12-14

13 デプロイメント・マネージャ

デプロイメント 13-2
デプロイメントのインポート 13-4
スケジュール済タスクの再インポート時のデプロイメント・マネージャの動作 13-4
XML ファイルのインポート 13-5
ベスト・プラクティス 13-6

14 レポート

操作レポートの概要 14-2
履歴レポートの概要 14-3
レポートの実行 14-3
レポートの表示 14-4
フィルタ 14-4
入力パラメータの変更 14-4
CSV エクスポート 14-5
詳細ページへのリンク 14-5
サード・パーティ製ソフトウェアを使用したレポートの作成 14-5

15 アテステーション

アテステーション・プロセスの設定 15-2
メニュー構造 15-2
システム制御 15-2
アテステーション・プロセスの作成 15-3
アテステーション・プロセスの管理 15-5
アテステーション・プロセスの編集 15-6
アテステーション・プロセスの無効化 15-6
アテステーション・プロセスの有効化 15-6
アテステーション・プロセスの削除 15-6
アテステーション・プロセスの実行 15-7
アテステーション・プロセス管理者の管理 15-7
アテステーション・プロセス実行履歴の表示 15-7
アテステーション・ダッシュボードの使用 15-8
アテステーション・リクエスト詳細の表示 15-9
電子メール通知 15-10
スケジュール済タスク 15-10

16 診断ダッシュボード

診断ダッシュボードの概要 16-2
インストールの確認 16-2
インストール後チェック 16-3
診断ダッシュボードのインストール 16-3
OC4J への診断ダッシュボードのインストール 16-4
JBoss へのデプロイ 16-4

WebSphere へのデプロイ 16-5
WebLogic へのデプロイ 16-6
診断ダッシュボードの起動 16-6
診断ダッシュボードの使用 16-7
テストの詳細とパラメータ 16-8
Microsoft SQL Server の JDBC ライブラリ可用性のチェック 16-8
Microsoft SQL Server の前提条件チェック 16-9
Oracle の前提条件チェック 16-9
WebSphere の埋込み JMS サーバーのステータス 16-10
データベース接続性のチェック 16-10
アカウント・ロックのステータス 16-10
データ暗号化キーの検証 16-11
スケジューラ・サービスのステータス 16-11
Remote Manager のステータス 16-11
JMS メッセージ機能の検証 16-11
ターゲット・システムの SSL トラストの検証 16-12
Java VM システム・プロパティのレポート 16-12
WebSphere のバージョンのレポート 16-12
Oracle Identity Manager のライブラリと拡張機能のバージョンのレポート 16-12
Oracle Identity Manager のライブラリと拡張機能のマニフェストのレポート 16-13
SSO 診断情報 16-13

A アテステーションの理解

アテステーション・プロセスの定義 A-2
アテステーション・プロセスの制御 A-2
プロセスの無効化 A-2
プロセスの削除 A-2
アテステーション・タスクのコンポーネント A-3
アテステーション受信ボックス A-4
アテステーション・リクエスト A-4
財務的に意味を持つリソース A-4
委任 A-5
アテステーション・ライフサイクル・プロセス A-6
第 1 段階 - アテステーション・タスクの作成 A-6
第 2 段階 - アテステーション・タスクに関する作業 A-7
第 3 段階 - 送信されたアテステーション・タスクの処理 A-8
アテステーション・エンジン A-10
アテステーション・スケジュール済タスク A-11
アテステーション・ドリブンのワークフロー機能 A-11
電子メール A-12
アテステーション・レビューアへの通知 A-12
変数 A-12
件名行 A-12
本文 A-12
委任されたレビューアへの通知 A-13
変数 A-13
件名行 A-13
本文 A-13

無効なアテステーション・レビューアに関するプロセス所有者への通知 A-14
変数 A-14
件名行 A-14
本文 A-14
スペシャル・コメント A-14
拒否されたアテステーション権限についてのプロセス所有者への通知 A-15
変数 A-15
件名行 A-15
本文 A-15
スペシャル・コメント A-15
電子メールが定義されていないレビューアについてのプロセス所有者への通知 A-16
変数 A-16
件名行 A-16
本文 A-16
スペシャル・コメント A-16

B　管理者のためのシステム設定上の考慮事項

索引

図一覧

12-1 ワークフロー・ビジュアライザの使用 12-8
12-2 ワークフロー・ビジュアライザでのドラッグ・アンド・ドロップの使用 12-9
12-3 タスク・ノードの使用（右クリック・メニュー） 12-10
12-4 ワークフロー・ビジュアライザの閉じたレスポンス・サブツリー 12-11
A-1 アテステーション・タスクの作成 : ワークフロー A-6
A-2 レビューアが権限に対するレスポンスを送信する場合のイベントのフロー A-8
A-3 アテステーション・タスクのレスポンス送信後のイベント・フロー A-9
A-4 フォロー・アップ・アクション・サブフロー A-10

はじめに

この章では、『Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソール・ガイド』の対象読者および表記規則について説明します。Oracle の関連ドキュメントの一覧も示します。

注意： これは、オラクル社による Thor Technologies 社の買収に伴う暫定リリースです。一部の製品およびドキュメントでは、依然として旧社名（Thor 社）および旧製品名（Xellerate）が使用されていますが、今後のリリースで変更される予定です。

対象読者

このマニュアルは、データベース管理者、システム管理者および開発者を対象としています。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト `http://www.oracle.com/accessibility/` を参照してください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし JAWS は括弧だけの行を読まない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

Oracle サポート・サービスへの TTY アクセス

アメリカ国内では、Oracle サポート・サービスへ 24 時間年中無休でテキスト電話（TTY）アクセスが提供されています。TTY サポートについては、(800)446-2398 にお電話ください。

関連ドキュメント

このマニュアルは、次のドキュメントを読んで理解していることを前提にしています。

詳細は、Oracle Identity Manager ドキュメント・セットに含まれる次のドキュメントを参照してください。

- 『Oracle Identity Manager JBoss 用インストレーション・ガイド』
- 『Oracle Identity Manager WebLogic 用インストレーション・ガイド』
- 『Oracle Identity Manager Installation Guide for WebSphere』
- 『Oracle Identity Manager ベスト・プラクティス・ガイド』
- 『Oracle Identity Manager グローバリゼーション・ガイド』
- 『Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド』
- 『Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソール・カスタマイズ・ガイド』
- 『Oracle Identity Manager Tools リファレンス・ガイド』
- 『Oracle Identity Manager Audit Report 開発者ガイド』
- 『Oracle Identity Manager API 使用法ガイド』
- 『Oracle Identity Manager 用語集』

ドキュメントの更新

オラクル社は、最新かつ最適な情報の提供に努めています。Oracle Identity Manager 9.0 のドキュメント・セットの更新情報は、次に示す Oracle Technology Network のサイトを参照してください。

`http://www.oracle.com/technology/documentation/index.html`

表記規則

このマニュアルでは次の表記規則を使用します。

規則	意味
太字	太字は、操作に関連する Graphical User Interface 要素、または本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。
イタリック	イタリックは、ユーザーが特定の値を指定するプレースホルダ変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、段落内のコマンド、URL、サンプル内のコード、画面に表示されるテキスト、または入力するテキストを示します。

サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

Oracle サポート・サービス

オラクル製品サポートの購入方法、および Oracle サポート・サービスへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

`http://www.oracle.co.jp/support/`

製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

`http://otn.oracle.co.jp/document/`

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

`http://www.oracle.co.jp/education/`

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

`http://www.oracle.co.jp`
`http://otn.oracle.co.jp`

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

1

管理およびユーザー・コンソールの概要

Oracle Identity Manager は、企業アプリケーションや管理対象システムへのアクセスを自動的に許可および取り消すための、高度で柔軟なプロビジョニング・システムです。Oracle Identity Manager を使用すると、スタッフやパートナに対する企業リソースへのアクセス権の付与、あるいは各リソースに関連するアクセス・ポリシーの強制を行うことができます。

Oracle Identity Manager で可能な作業は次のとおりです。

- Oracle Identity Manager ユーザー・アカウント（グループ・メンバーシップ、電子メール・アドレスなど）の表示
- プロファイルの変更
- アクセス権限のあるリソースの確認
- 自分が行ったリクエストおよび他ユーザーに作成されたリクエストの表示
- 自分のための追加リソースのリクエスト
- パスワードの変更
- ログイン用のチャレンジ質問と回答（Q&A）の表示と変更
- ユーザー・プロキシの設定
- 保留中のリクエストの表示と管理（認可された承認者のみ）

さらに、Oracle Identity Manager の権限によっては、次の作業も可能です。

- プロビジョニングされているリソースに持っているアカウントのパスワードおよびユーザー ID の更新
- 管理対象ユーザーのためのリソース・リクエストの作成
- 管理可能な任意のユーザーのための、リソースの下書きリクエストの完了
- 他のユーザーのためのリソースのプロビジョニングの承認
- 追加情報のリクエストへの応答

このマニュアルでは、Oracle Identity Manager で実行できるアクションについて説明します。説明するトピックは次のとおりです。

- ユーザー・ロールと機能
- リソース・モデルの概要

注意： ユーザーによっては使用できない操作もあります。Oracle Identity Manager で表示および使用できる機能は、割り当てられている権限によって異なります。

Oracle Identity Manager システムのシステム管理者は、本番環境で製品を実行する前に、このドキュメントの付録 B「管理者のためのシステム設定上の考慮事項」を一読するようにしてください。

関連資料：

- Oracle Identity Manager の管理およびユーザー・コンソールのカスタマイズの詳細は、『Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソール・カスタマイズ・ガイド』を参照してください。
- Oracle Identity Manager の管理およびユーザー・コンソールのグローバリゼーションの詳細は、『Oracle Identity Manager グローバリゼーション・ガイド』を参照してください。

ユーザー・ロールと機能

表 1-1 に、Oracle Identity Manager 関連の重要なユーザー・ロールと機能のリストを示します。

表 1-1 ユーザー・ロールと機能

ロール	実行可能なタスク
管理者	ユーザー、組織、ユーザー・グループ、リソースおよびポリシーの管理を行う担当者。
承認者	リソースに対するアクセスの承認および拒否を行う担当者。
エンドユーザー	Oracle Identity Manager のセルフサービス機能の利用者で、管理者ではないユーザー。

リソース・モデルの概要

Oracle Identity Manager では、リソースを、リクエストの対象および企業ユーザーへのプロビジョニングの対象にできます。リソースは、アプリケーション、データベースへのアクセス、そこへのアクセスが重要な意味を持つネットワークまたは他のエンティティにあるディレクトリ構造に対する権限のいずれかです。リソースへのアクセスが許可される方法およびそのリソースに対して与えられる権限は、Oracle Identity Manager 管理者が定義するプロビジョニング・プロセスにより決まります。あるリソースへのアクセスを、すべてのユーザーに対して統一的にプロビジョニングすることもできます。または、次のような要素に基づいて、同一の方法でアクセスをプロビジョニングすることも可能です。

- ロール（管理者、経理担当など）
- 勤務地
- 雇用形態（フルタイム、コンサルタントなど）
- グループや部門の割当て
- リソースごとの管理者および Oracle Identity Manager 管理者によって適切とみなされるその他の基準

リソースが正常にプロビジョニングされると、それ以降は Oracle Identity Manager を操作しないでそのリソースにアクセスすることができます。たとえば Microsoft Exchange へのアクセスをリクエストしたユーザーに対してそのリソースが正常にプロビジョニングされた場合、Oracle Identity Manager によりそのユーザーに対して確立されたユーザー ID とパスワード（必要な場合）を使用してそのアプリケーションにログインすることができます。

Oracle Identity Manager は、プロセスとそれを含むタスクを使用してリソースのプロビジョニングを制御します。承認は承認プロセスと呼ばれる特定の種類のプロセスを使用して管理されます。承認はリソースのプロビジョニングが発生する前に取得する必要があります。Oracle Identity Manager には、承認プロセスとプロビジョニング・プロセスという 2 種類のリソース関連プロセスがあります。

承認プロセス

承認プロセスは、リソースをリクエストしたユーザーまたは組織に対してそのリソースのプロビジョニングを承認するかどうかを決定します。承認プロセスは、リソースのプロビジョニングの承認を担当するユーザーからの応答を必要とする一連のタスクで構成されています。応答は手動で提供されるため、これらのタスクは承認者または承認者のグループに割り当てられます。

承認者は、割り当てられる承認プロセス内のすべてのタスクを対象とすることができます。リクエスト内のタスクに割り当てられている承認者は、リクエスト内のすべてのタスクを表示することができます。リクエストの承認者が**「To-Do リスト」**の下の**「保留中の承認」**リンクをクリックすると、リクエスト ID が表示されます。

注意： 承認プロセスはオプションです。一部のリソースは、Oracle Identity Manager 管理者が、承認を必要とせずにプロビジョニングすることができます。この場合、リクエストが送信されるとすぐにリソースへのアクセスが与えられます。

プロビジョニング・プロセス

プロビジョニング・プロセスは、リクエストした 1 人または複数のユーザー、または組織に対してリソースを実際にプロビジョニングするために使用されるプロセスです。プロビジョニング・プロセスは、指定されたリソースへのアクセスを許可するために必要な手順を実行する、一連の自動化されたタスクから構成されます。リソースに対して承認プロセスが定義されていない場合を除いて、承認プロセスが完了するまでプロビジョニング・プロセスを開始することはできません。また、プロビジョニング・プロセスでは、専用のフォームを使用して、リソースへのアクセスを許可するために必要なデータを取得したり、ユーザー入力を求めることができます。

Oracle Identity Manager の例外機能を使用して、プロビジョニング・プロセス中に発生する可能性のある問題に対処できます。たとえば、リソースを使用できない場合にトランザクションが停止あるいは失敗しないようにするビジネス・ロジックを、プロビジョニング・プロセスに追加できます。また、プロビジョニング・トランザクションが失敗したときに、システムが最後の既知の一貫性のある状態にロールバックできるようにする状態エンジンも備わっています。状態エンジンはまた、プロビジョニング・リクエストが拒否された場合に、システムを元の状態にロールバックします。

2

自己登録

この章では、Oracle Identity Manager でのアカウントの作成方法、およびそのアカウントを使用して Oracle Identity Manager でログイン、ログアウトを行う方法について説明します。

この章の内容は、次のとおりです。

- Oracle Identity Manager アカウントの作成
- パスワードの変更
- 自己登録リクエストのトラッキング
- 管理およびユーザー・コンソールへのログイン
- 管理およびユーザー・コンソールのログアウト

Oracle Identity Manager アカウントの作成

Oracle Identity Manager にアカウントを作成していない場合は、作成する必要があります。ユーザー ID には、次の文字は使用できません。

; # / % = | +, ¥ " < >

システムの構成によっては、マネージャにアカウントの作成を依頼する必要があります。

また、システムの構成によっては、自己登録のリクエストに承認が必要な場合があります。承認が必須でない場合は、Oracle Identity Manager が自己登録のリクエストを処理するとすぐにアカウントが作成され、使用できます。システム管理者が、自己登録リクエストに承認が必要となるように Oracle Identity Manager を設定した場合は、リクエストのステータスをトラッキングすることができます。アカウントは、要求された承認を取得したときから使用できます。

注意： リクエストに承認が必要な場合は、リクエストの送信後にリクエスト ID をメモしておきます。リクエスト・ステータスのトラッキングに、リクエスト ID が必要です。

アカウントを作成するには、次の手順を実行します。

1. Oracle Identity Manager への自社ポータル・リンクにアクセスします。

   Oracle Identity Manager のアクセス・ページが表示されます。

2. Oracle Identity Manager アクセス・ページの左ナビゲーション・ペインで**「自己登録」**ラベルを探し、**「リクエストの作成」**をクリックします。

   「ユーザー自己登録」ページが表示されます。

3. 必要なデータを入力します。

   必須情報はアスタリスク（*）で示されます。求められた場合は、必ずパスワードのチャレンジ質問に対する回答を選択および指定します。システム管理者が Oracle Identity Manager をどのように構成したかによっては、パスワードを忘れて再設定する際に、複数のチャレンジ質問に対して回答するよう求められることがあります。

4. **「リクエストの送信」**をクリックします。

   リクエストが送信されたことが Oracle Identity Manager により通知され、トラッキング用にリクエストの数値 ID が表示されます。リクエストの送信後、リクエスト ID をメモしておきます。リクエスト・ステータスのトラッキングに、リクエスト ID が必要です。

   リクエストへのリンクが表示されます。

5. リクエストに承認が必要な場合は、Oracle Identity Manager アクセス・ページの左ナビゲーション・ペインで、**「自己登録」**の下の**「リクエストのトラッキング」**オプションをクリックします。

   「自己登録リクエストのトラッキング」ページが表示されます。このページでリクエストの数値 ID を入力して、リクエストのステータスを確認できます。

パスワードの変更

Oracle Identity Manager のパスワードを忘れた場合、アカウントを解除するようにシステム管理者に依頼するか、いくつかの検証用の質問が用意されているページでパスワードを再設定することができます。これらの質問への正しい回答を入力すると、Oracle Identity Manager でパスワードを変更できます。

ログイン試行回数の最大値を上回ってもパスワードの再設定は可能で、Oracle Identity Manager アカウントはそれ以上ログインが試行されないようロックされます。ただし、チャレンジ質問に正解するまでに最大試行回数を上回ると、アカウントはロックされ、Oracle Identity Manager システム管理者以外はロックを解除できません。

注意： Oracle Identity Manager ユーザー ID を忘れた場合は、Oracle Identity Manager システム管理者に問い合せてください。

紛失したパスワードを再設定するには、次の手順を実行します。

1. Oracle Identity Manager への自社ポータル・リンクにアクセスします。

   Oracle Identity Manager のアクセス・ページが表示されます。

2. Oracle Identity Manager アクセス・ページの左ナビゲーション・ペインで**「ヘルプ」**ラベルを探し、「パスワードを忘れた場合」をクリックします。

   「ユーザー ID の検証」ページが表示されます。

3. 「ユーザー ID の検証」ページで、**「ユーザー ID」**フィールドに ID を入力し、**「OK」**をクリックします。

   「パスワードの変更」ページが表示されます。

4. 表示される質問に回答します。

   このページに表示される質問および回答は、アカウント・オプションで指定します。これらの質問と回答は、Oracle Identity Manager の管理およびユーザー・コンソールに最初にログインしたときに選択します。

5. パスワードのチャレンジ質問に対する正しい答えを入力し、新しいパスワードを両方のフィールドに入力して、**「送信」**をクリックします。

自己登録リクエストのトラッキング

Oracle Identity Manager の構成によっては、自己登録のリクエストに承認が必要な場合があります。承認が必要な場合は、承認と自己登録プロセスのステータスをトラッキングすることができます。

自己登録リクエストのステータスをトラッキングするには、次の手順を実行します。

1. Oracle Identity Manager への自社ポータル・リンクにアクセスします。

   Oracle Identity Manager のアクセス・ページが表示されます。

2. 左ナビゲーション・ペインで、**「自己登録」**の下の**「リクエストのトラッキング」**をクリックします。

   「自己登録リクエストのトラッキング」ページが表示されます。

3. 自己登録のトラッキング・ページの**「リクエスト ID」**フィールドに、自己登録に関連付けられているリクエストの ID を入力します。

4. **「リクエストのトラッキング」**をクリックします。

   自己登録のリクエスト・ステータスに関する詳細が表示されます。

管理およびユーザー・コンソールへのログイン

Oracle Identity Manager の管理およびユーザー・コンソールにログインする前に、そのアプリケーションのアカウントを持っていることを確認します。現在アカウントを持っていない場合は、2-2 ページの「Oracle Identity Manager アカウントの作成」で説明されているとおりにアカウントを作成します。または、アカウントを作成するようマネージャに依頼します。

管理およびユーザー・コンソールにログインするには、次の手順を実行します。

1. Oracle Identity Manager への自社ポータル・リンクにアクセスします。
2. **Oracle Identity Manager ログイン・ページ**でユーザー ID とパスワードを入力します。
3. **「ログイン」**をクリックします。

管理およびユーザー・コンソールのログアウト

アクティブでない状態が一定時間続くと、Oracle Identity Manager から自動的にログアウトされることがあります。シングル・サインオンでない環境で作業している場合もログアウトできます。

シングル・サインオンでない環境の管理およびユーザー・コンソールからログアウトするには、次の手順を実行します。

1. **「ログアウト」**をクリックします。

   確認メッセージが表示されます。
2. **「ログアウト」**または**「取消」**をクリックします。

3

Oracle Identity Manager の使用

ここでは、Oracle Identity Manager の管理およびユーザー・コンソールの主な機能の使用方法について説明します。この章の内容は、次のとおりです。

- Oracle Identity Manager の検索機能
- 特別なユーザー・インタフェース

Oracle Identity Manager の検索機能

Oracle Identity Manager の各ページでは、多くのフィールドに検索機能があります。検索機能は、レコードの位置を確認する必要がある場合、たとえば特定のユーザー・アカウントを探したり、特定のエンティティをレコードに割り当てたり、あるいはリクエストにユーザーを追加する場合に使用します。一部のフィールドには、事前に定義された選択メニューがあります。その他のフィールドには、問合せ機能とも呼ばれる完全な検索機能があります。

ここでは次のトピックについて説明します。

- 検索（問合せ）の作成
- ワイルドカードの使用
- 検索の動作

検索（問合せ）の作成

特定のレコードを検索するには、1 つ以上のフィールドに情報を入力し、**「検索」**をクリックします。検索するレコードに関して、可能なかぎり多くの情報を入力します。

たとえば、ユーザーの名しか覚えていない場合はそれを入力し、他のフィールドは空のままにしておきます。Oracle Identity Manager は、入力されたものと同じ名を持つすべてのユーザー・レコードを表示します。

すべてのフィールドを空のままで検索した場合、Oracle Identity Manager はそのタイプのすべての記録を表示します。再検索を行うには、**「消去」**をクリックします。一部の画面には**「取消」**ボタンがあり、クリックすると検索を中止できます。

注意： Oracle Identity Manager での検索では、大 / 小文字は区別されません。たとえば、Raja という名前のユーザーを検索する場合、入力は「RAJA」でも「raja」でもかまいません。

ワイルドカードの使用

検索で取得するレコードを制限するには、フィールドにデータを入力する以外に、特定の検索フィールドで値の他にワイルドカード文字を入力できます。ワイルドカードを使用すると、Oracle Identity Manager で検索をさらにフィルタリングできます。

ワイルドカード文字のアスタリスク（*）は、検索で、フィールド値の特定されていない部分を表します。アスタリスクは、フィールドに入力する値の先頭、途中、末尾のいずれにも使用できます。たとえば、**「ユーザー ID」**フィールドに「b*」と入力して検索を実行すると、Oracle Identity Manager は、ユーザー ID が文字 B で始まるすべてのユーザー、たとえば bsmith、bobj、barbarak などを表示します。「j*n」のようにアスタリスクが検索する値の途中にある場合、j で始まり n で終わるすべてのレコード、たとえば john、joan、johann などを表示します。アスタリスクを検索する値の先頭に、たとえば「*A」のように置いた場合、A で終わるすべてのレコード、たとえば laura、maria などが取得されます。

検索の動作

検索の作成および実行方法は、実行する検索のタイプによって異なります。取得される結果は、検索を実行するコンテキストに基づきます。

リクエストを作成またはトラッキングする際にユーザー・レコード検索で検索する場合、Oracle Identity Manager は、検索を行うマネージャまたは管理者が管理するユーザーのみを表示します。入力した検索パラメータを組み合せて結果が取得されます。たとえば、**「名」**フィールドに「John」、**「組織」**フィールドに**「NYoffice」**と入力すると、検索者が管理する、NY オフィスに勤務し、名が John であるすべてのユーザーが表示されます。

リクエストをトラッキングする際に、たとえばリクエスト・レコードの検索を実行する場合、リクエストのどのデータ要素で検索するかを選択する必要があります。たとえば、**リクエスト ID** または検索対象ユーザーの ID のいずれかを入力してリクエストを検索することはできますが、両方を入力して検索することはできません。

特別なユーザー・インタフェース

次の各項では、データ表示要件に適合するように管理およびユーザー・コンソールを設定する方法について説明します。

- テキスト・エントリの切捨て
- プロセス・フォームでの子表の表示

テキスト・エントリの切捨て

デフォルトでは、管理およびユーザー・コンソールには、長さにかかわらずテキスト・エントリ全体が表示されます。長いテキスト・エントリを 3 連ドットの省略記号（...）を使用して省略するよう、管理およびユーザー・コンソールを構成できます。

フィールドをカスタマイズしてエントリ名全体を表示するには、次の手順を実行します。

1. XellerateFull.ear ファイルを見つけます。
2. このファイル中で、xlWebApp.war ファイルを見つけます。
3. 次のディレクトリで xlWebAdmin.properties ファイルを見つけます。

   XL_HOME/xellerate/webapp/precompiled/jsp-temp/WEB-INF/classes

4. xlWebAdmin.properties ファイルの `global.property.tableColumnSize` プロパティの値を変更します。

   デフォルト値は `-1` で、テキスト・エントリ全体が表示されます。テキスト・エントリを省略記号で表示するには、`global.property.tableColumnSize` プロパティの値を、表示する文字数を示す正の整数に変更します。たとえば、`global.property.tableColumnSize` プロパティに 10 の値を指定すると、各テキスト・エントリの最初の 10 文字が表示され、それ以降の文字はすべて省略記号で示されます。

プロセス・フォームでの子表の表示

リソース・プロビジョニング・プロセスでは、管理およびユーザー・コンソールは、関連するすべてのプロセス・フォームで、10 個以内の列が表示された子表をデフォルトで表示します。

10 個の列を持つ子表を一度に表示している管理およびユーザー・コンソールの各ページの例を次に示します。

- 「リソース・プロファイル」で**「ユーザーの詳細」**に移動して、**リソースおよびプロセス・フォーム**の**「編集」**リンクか**「表示」**リンクをクリックした場合。
- **ユーザー・ダイレクト・プロビジョニング・ウィザードの手順 3** から**手順 6** を使用した場合。
- 「リソース・プロファイル」で**「組織の詳細」**に移動して、**リソースおよびプロセス・フォーム**の「編集」リンクか「表示」リンクをクリックした場合。
- **組織のダイレクト・プロビジョニング・ウィザードの手順 3** から**手順 6** を使用した場合。
- 「このリソースに関連付けられた組織」で**「リソースの詳細」**に移動して、リソースおよびプロセス・フォームの「編集」リンクか「表示」リンクをクリックした場合。

10 個を超える列を持つ子表を表示するには、次の手順を実行します。

1. 次のディレクトリで xlDefaultAdmin.properties ファイルを開きます。

   XL_HOME/xellerate/webapp/precompiled/jsp-temp/WEB-INF/classes

2. `global.property.NumberOfChildTableColumns` の値を変更します。

   デフォルトは 10 列です。これは任意の数に変更できます。

4

マイ・アカウント

ここでは、Oracle Identity Manager アカウントへのアクセスと管理について説明します。

この章の内容は、次のとおりです。

- アカウント・プロファイルの表示と変更
- パスワードの変更
- パスワードの変更および取得のための質問と回答の指定
- 代行者への担当業務の委任

アカウント・プロファイルの表示と変更

Oracle Identity Manager ユーザー・アカウントに関連する基本情報を変更することができます。

注意： ユーザー・プロファイルで編集できるフィールドは、管理者が行った Oracle Identity Manager の構成によって異なります。

アカウントを表示および編集するには、次の手順を実行します。

1. Oracle Identity Manager にログインします。

   「**Oracle Identity Manager へようこそ**」ページが表示されます。

2. 左ナビゲーション・ペインで「**マイ・アカウント**」をクリックし、続いて「**アカウント・プロファイル**」をクリックします。

3. 「アカウント・プロファイル」ページの「**アカウント・プロファイルの変更**」ボタンをクリックします。

   Oracle Identity Manager によりアカウント情報が表示されます。

4. 必要に応じて変更し、「**プロファイルの保存**」をクリックします。

   その変更に承認が必要な場合は、リクエスト ID が表示されます。この ID をメモしておいて、リクエストのトラッキングに使用します。承認が必要ない場合は、Oracle Identity Manager がリクエストを処理すると、すぐに変更が有効になります。システムの負荷によっては、数分かかることがあります。

   Oracle Identity Manager では、監査の目的でリクエストを格納します。

パスワードの変更

Oracle Identity Manager のパスワードは変更できます。ローカル・システムの設定によっては、システムのセキュリティを保全するために定期的にパスワードを変更するように要求されることがあります。

パスワードを変更するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「**マイ・アカウント**」をクリックします。

   「マイ・アカウント」メニューが展開されます。

2. 「**パスワードの変更**」をクリックします。

   「**パスワードの変更**」ページが表示されます。

3. 「**旧パスワード**」フィールドに現在のパスワードを入力してから、新しいパスワードを入力し、パスワードを再入力して確認します。

4. 「**保存**」をクリックします。

   パスワードがシステムで定義された基準に適合していれば、パスワードは変更されます。

パスワードの変更および取得のための質問と回答の指定

Oracle Identity Manager では、検証用の質問を選択して、それらの回答を指定することができます。チャレンジ質問と回答は、Oracle Identity Manager アカウントに最初にログインしたときに設定します。これらの質問は、パスワードを忘れて再設定が必要な場合、あるいはパスワードの変更が必要な場合に、身元を確認するために使用されます。

回答が必要な質問の数と、選択候補の質問の一覧は、Oracle Identity Manager システム管理者によって定義されます。

チャレンジ質問とその回答は変更できます。

チャレンジ質問と回答を変更するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで**「マイ・アカウント」**をクリックします。
2. **「チャレンジ Q&A」**をクリックします。

   パスワードを入力するよう求められます。
3. パスワードを入力し、**「続行」**をクリックします。

   「チャレンジ質問の選択」ページが表示されます。
4. チャレンジ質問を選択します。必ず、最小質問数以上の質問を選択して、**「選択」**をクリックします。

   「チャレンジ回答の指定」ページが表示されます。
5. 一覧に表示された各質問への回答を入力します。

   必ず、簡単に思い出せる回答を入力してください。
6. **「保存」**をクリックします。
7. **「OK」**をクリックして回答を確認します。

   パスワードを忘れた場合や再設定が必要な場合、質問が提示され、前の手順で選択した回答を入力するよう求められます。

代行者への担当業務の委任

病気、休暇などのために勤務できない場合、別のユーザーにタスク承認業務を委任することができます。承認者として、別のユーザーを自分の代行者として選択することができます。ユーザーを選択すると、通常割り当てられるタスクはすべて、委任したプロキシ・ユーザーにルーティングされます。

プロキシ・ユーザーが Oracle Identity Manager にログインすると、**「ホーム」**ページには、ログインしたユーザーが代行しているユーザーが表示されます。そのユーザーに通常割り当てられるタスクは、プロキシ・ユーザーの**「保留中のリクエスト」**リストに表示されます。この他の情報については、「保留中のリクエスト」上のセクションを参照してください。

プロキシ・ユーザーを指定するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで**「マイ・アカウント」**をクリックし、続いて**「マイ・プロキシ」**をクリックします。

   「プロキシ詳細」ページが表示されます。
2. ここで代行者を定義しない場合、ユーザーに委任するには**「割当て」**をクリックします。

   「プロキシの割当て」ページが表示されます。
3. 「プロキシ名」フィールドで、**「マネージャ」**または**「他のユーザー」**を選択します。

   マネージャが定義されていれば、デフォルトでそのマネージャが選択されます。他のユーザーを検索するには、このフィールドの隣にある拡大鏡アイコンをクリックします。「参照フォーム」ページが表示されます。プロキシ・ユーザーの定義に選択できるすべてのユーザーの名前が表示されます。

4. **「ユーザー ID」**ラジオ・ボタンを選択することでプロキシ・ユーザーを定義し、続いて**「選択」**をクリックします。

   「プロキシの割当て」ページに、選択したユーザー ID が表示されます。

5. **「開始日」**フィールドでカレンダのアイコンをクリックして、プロキシ・ユーザーを有効にする日付を強調表示します。

6. **「終了日」**フィールドでカレンダ・アイコンをクリックして、プロキシ・ユーザーを無効にする日付を選択します。

7. **「割当て」**をクリックします。

   「確認」ページに、そのプロキシ・ユーザーに対して定義された、選択済の**ユーザー ID** が表示されます。

8. 「確認」ページが正しければ、**「割当て」**をクリックします。

   「プロキシ詳細」ページには、定義したプロキシ・ユーザー情報が表示されます。

9. このプロキシ・ユーザーに対する情報を変更するには、**「変更」**をクリックします。

   このユーザーを定義されたプロキシ・ユーザーから削除するには、**「プロキシの削除」**をクリックします。

5

マイ・リソース

自分に対してプロビジョニングされたリソースを表示したり、自分や他のユーザーのためにリソースへのアクセスをリクエストすることができます。

この章の内容は、次のとおりです。

- マイ・リソースの表示
- リソース・リクエストの表示
- 新しいリソースのリクエスト

マイ・リソースの表示

自分に対してプロビジョニングされているリソースを表示するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで**「マイ・リソース」**をクリックし、続いて**「マイ・リソース」**をクリックします。

   「マイ・リソース」ページが表示されます。

   このページには、このユーザーに関連付けられているプロビジョニング済のリソースに関する情報が含まれる表が表示されます。表示内容は次のとおりです。

フィールド	説明
リソース名	プロビジョニングされるリソースの名前です。
プロビジョン日	リソースがプロビジョニングされた日付です。
ステータス	リソースのステータス（状態）です。

2. 自分のために新しいリソースをリクエストするには、このページで**「新しいリソースのリクエスト」**をクリックします。

   「リソースをプロビジョニングするリクエストの作成 - ステップ 1: リソースの指定」ページが表示されます。

3. リクエストするリソースを選択するには、**「リソース名」**チェック・ボックスを選択し、**「追加」**をクリックして、リソースを**「選択済」**リストに追加します。

   そのリソースを「選択済」リストから削除する場合は、**「削除」**をクリックします。

   完了したら、**「続行」**をクリックします。

   リクエストするリソースに関連付けられているリソース・フォームがある場合は、「リソースをプロビジョニングするリクエストの作成 - ステップ 2: リソース・データの指定」ページが表示されます。それ以外の場合は、「リソースをプロビジョニングするリクエストの作成 - ステップ 3: 情報の検証」ページが表示されます。

4. 「リソースをプロビジョニングするリクエストの作成 - ステップ 2: リソース・データの指定」ページが表示されたら、リクエストしたリソースに必要なデータを入力し、**「続行」**をクリックします。

   「リソースをプロビジョニングするリクエストの作成 - ステップ 3: 情報の検証」ページが表示されます。

5. 「リソースをプロビジョニングするリクエストの作成 - ステップ 3: 情報の検証」ページで、次の表の説明に従ってデータを入力します。

フィールド	説明
ユーザー ID	ログイン ID（ユーザー名）です。
名	ユーザーの名です。
姓	ユーザーの姓です。

「選択済リソース」表には、次の情報が表示されます。

フィールド	説明
リソース名	リクエストまたはプロビジョニングしているリソースの名前です。
詳細	そのリソースに関するその他の詳細情報です。

6. コメントを追加するには、**「コメントを追加しますか」**リンクをクリックします。

   「リクエスト・コメントの追加」ページが表示されます。

7. 「コメント」フィールドにコメントを追加したら、**「コメントを追加するにはここをクリックしてください。」**をクリックすると、リソース・リクエストにコメントが挿入されます。

   「消去」をクリックすると**「コメント」**フィールドのテキストが消去されます。ページを閉じるには**「閉じる」**をクリックします。

   コメントを追加すると、追加されたコメントがこのページに表示されます。

8. リソース・リクエストを変更する場合、リソースを変更するには**「変更」**リンクをクリックし、さらにコメントを追加するには**「追加」**リンクをクリックします。

   それぞれのページが表示されます。

9. 情報を確認したら、**「すぐに送信」**をクリックすると、リクエストが有効になります。

   「リクエストが送信されました」ページが表示されます。それ以外の場合は、**「後にスケジュール」**をクリックして、後でアクティブにします。

   このページには、次の情報が表示されます。

フィールド	説明
ステータス	リクエストのステータス（状態）です。
リクエスタ	リクエストを行った人の名前です。
アクション	このリクエストのために実行されたアクションです。
日付	リクエストが実行された日付です。

10. このリクエストを後でアクティブにするには、**「後にスケジュール」**をクリックします。

    「後にスケジュール」をクリックすると、リクエストが作成され、承認プロセスが開始され、承認者は承認タスクを承認して承認プロセスを完了することができます。ただし、プロビジョニング・プロセスは開始されません。リソースのプロビジョニングは、スケジュールされた日付まで行われません。**「後にスケジュール」**ページが表示されます。

11. カレンダのアイコンを使用してリクエストをアクティブにする日を定義し、**「送信」**をクリックします。

リソース・リクエストの表示

自分のために送信したリソース・リクエストと、自分のために他のユーザーが作成したリソース・リクエストを、すべて表示できます。

すべてのリソース・リクエストを表示するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで**「マイ・リソース」**をクリックし、続いて**「マイ・リクエスト」**をクリックします。

   「マイ・リクエスト」ページが表示されます。

   このページでは、**「要求したリクエスト」**オプションがデフォルトになっています。特定のターゲットに対しては、検索構文を使用してリクエストを検索することができます。ドロップダウン・メニューを使用して、次のいずれかの検索基準を選択します。

   - リクエスト ID（デフォルト）
   - リクエスト・タイプ

   選択した検索基準に一致する値を入力します。

結果表には、次の情報が表示されます。

フィールド	説明
リクエスト ID	リクエストの ID
リクエスト・タイプ	リクエストのタイプ
リクエスト・プレビュー	このリクエストに関する、ユーザーと関連リソースのサマリー

2. ユーザーのために別のユーザー（プロキシ・ユーザー）が行ったリクエストの一覧を表示するには、**「要求されたリクエスト」**オプションを選択します。

   「マイ・リクエスト」ページが表示されます。

   このページの表は**「要求したリクエスト」**ページの表に似ていますが、ユーザーにかわってリクエストされたリソースが、リクエストしたユーザーの名前を含めて表示されます。

   「要求されたリクエスト」オプションを選択すると、リクエストの受益者になります。管理者としてプロビジョニング・リクエストを行う場合の目的は、ユーザーまたは組織にリソースを追加することです。このリソースをプロビジョニングされる資格があるユーザーに対しては、ログイン時にリクエストが表示されます。

   「要求したリクエスト」オプションを選択すると、リクエスタになります。このオプションでは、**「リクエスタ」**列は表示されません。自分のリクエストはすべて、このオプションで表示することになります。

新しいリソースのリクエスト

次の手順は、新しいリソースをプロビジョニングする方法について説明しています。

リソースのリクエストを新しく作成するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで**「マイ・リソース」**をクリックし、続いて**「新しいリソースのリクエスト」**をクリックします。

   「リソースをプロビジョニングするリクエストの作成」ページが表示されます。

2. リクエストするリソースを選択するには、**「リソース名」**チェック・ボックスを選択し、**「追加」**ボタンをクリックして、リソースを**「選択済」**リストに追加します。

   「選択済」リストからリソースを削除するには、**「削除」**ボタンを使用します。

3. **「続行」**をクリックします。

   「リソースをプロビジョニングするリクエストの作成 - ステップ 2: リソース・データの指定」ページが表示されます。このページには、ターゲット・ユーザーのためのリソース・オブジェクトが表示されます。

4. リクエストしているリソースに情報入力フォームがない場合は、この手順を省略することができます。

   プロビジョニングするリソース・オブジェクトに関するその他の情報を入力するには、**「続行」**をクリックします。入力しない場合は、**「戻る」**または**「終了」**をクリックします。

   「リソースをプロビジョニングするリクエストの作成 - ステップ 2: リソース・データの指定」ページが表示されます。このページは、このリソース・オブジェクトに関するその他の情報を入力するためのものです。

5. フィールドに追加する情報を入力して**「続行」**をクリックするか、**「戻る」**または**「終了」**をクリックします。

   「リソースをプロビジョニングするリクエストの作成 - ステップ 3: 情報の検証」ページが表示されます。

6. このページの「**選択済ユーザー**」表には、次の情報が表示されます。

フィールド	説明
ユーザー ID	ログイン ID（ユーザー名）
名	ユーザーの名
姓	ユーザーの姓

「**選択済リソース**」表には、次の情報が表示されます。

フィールド	説明
リソース名	リクエストまたはプロビジョニングしているリソースの名前。
詳細	そのリソースに関するその他の詳細情報です。

7. 必要に応じてコメントを追加するには、「**コメントを追加しますか**」リンクをクリックします。

   「**リクエスト・コメントの追加**」ページが表示されます。

8. 「コメント」フィールドにコメントを追加したら、「**コメントを追加するにはここをクリックしてください。**」をクリックすると、リソース・リクエストにコメントが挿入されます。それ以外の場合、「消去」をクリックすると「**コメント**」フィールドのテキストが消去されます。ページを閉じるには「**閉じる**」をクリックします。

   コメントを追加すると、追加されたコメントがこのページに表示されます。

9. このリソース・リクエストに関する情報を変更する場合、リソースを変更するには「**変更**」リンクを、さらにコメントを追加するには「**追加**」リンクをクリックします。

10. 情報を確認したら、「**すぐに送信**」をクリックすると、リクエストが有効になります。

    「**リクエストが送信されました**」ページが表示されます。

    このページには、次の情報が表示されます。

フィールド	説明
ステータス	リクエストのステータス（状態）。
リクエスタ	リクエストを行った人の名前。
アクション	このリクエストのために実行されたアクション。
日付	リクエストが実行された日付です。

11. このリクエストを後でアクティブにするには、「**後にスケジュール**」をクリックします。

    「**後にスケジュール**」ページが表示されます。

    カレンダのアイコンを使用してリクエストをアクティブにする日を定義し、「**送信**」をクリックします。

6

リクエスト

Oracle Identity Manager を使用すると、ユーザーおよび組織のためにリクエストしたリソースのリクエストを作成およびトラッキングできます。管理者の場合は、管理するユーザーのためにリソース・プロビジョニング・リクエストを作成できます。承認者の場合は、割り当てられたタスクを表示および実行することができます。たとえば、タスクを承認または取り消すことができます。承認者でも管理者でもある場合は、両方の役割に関連付けられた機能を実行できます。

この章の内容は、次のとおりです。

- リクエストの作成と管理
- リクエストのトラッキング

ロールおよび関連する Oracle Identity Manager の機能のリストは、「ユーザー・ロールと機能」を参照してください。

リクエストの作成と管理

Oracle Identity Manager を使用すると、リクエストを作成、管理して、自分、他のユーザーおよび組織に対してプロビジョニングすることができます。

Oracle Identity Manager 管理者の場合は、他のユーザーにリソースをプロビジョニングするリクエストを作成できます。次に示すように、一部のリソースは、ユーザーが自分のためにリソースをリクエストできるように設定されています。

- セルフサービス・リクエストが許可されているリソースの場合、Oracle Identity Manager では、管理者でなくても自分のためにリソースをリクエストできます。
- リソースがすべてのユーザーに対して許可に設定されている場合、Oracle Identity Manager では、管理者でなくても別のユーザーのためにリソースをリクエストできます。

リソースがすべてのユーザーに対して許可に設定されていない場合、リソースが許可されている部門や組織に関連付けられているユーザーのみが、自分のためのリソースのリクエストを依頼できます。自分のためにリクエストできるリソースかどうかの判断は、Oracle Identity Manager 管理者か、そのリソースの管理者に問い合せてください。

リソース・インスタンスを有効化、無効化、および失効するには、リソースがそれらのタスク用に設定されている必要があります。

リソースは、次の基準に基づいて検索できます。

- ユーザー ID
- リクエスト ID
- リクエストが作成された日付
- リソース名
- リクエストのステータス

「**リソース**」オプションでは、次のオプションを選択できます。

- **リソースの権限付与 :** リソースをターゲットに対してプロビジョニングできるようにします。
- **リソースの無効化 :** リソースを一時的に無効にします。
- **リソースの再有効化 :** リソースを無効にした後、リソースを再び有効にすることができます。
- **リソースの失効 :** リソースを永久的に削除します。リソースを失効させた後で、再び有効にすることはできません。

ここでは、次のトピックについて説明します。

- リソースの許可
- リソースの無効化
- リソースの再有効化
- リソースの失効

リソースの許可

次の手順は、リソースのプロビジョニングを許可する方法を説明しています。リソースがこの使用方法向けに設定されている場合は、同じリソースを複数回プロビジョニングできます。

注意： 組織のためのリソース・リクエストはユーザーのためのリソース・リクエストに類似しているため、次の手順には、ユーザーのためのリソース・リクエスト手順のみを示します。

リソース・リクエストを許可するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「**リクエスト**」をクリックし、続いて「**リソース**」をクリックします。

   「リクエストの作成」ページが表示されます。このページでは**リソースの権限付与**オプションがデフォルトになっています。このオプションを使用して、特定のユーザーまたは組織に対してリソースを許可します。

2. 「**続行**」をクリックします。

   「リソースをプロビジョニングするリクエストの作成 - ステップ 1: タイプの選択」ページが表示されます。

3. 1 人または複数のユーザーにリソースを割り当てるには、「**ユーザー**」オプションをクリックします。

   1 つまたは複数の組織にリソースをプロビジョニングするには、「**組織**」オプションを選択します。

   「**続行**」をクリックします。

   「**ユーザー**」オプションを選択すると、「リソースをプロビジョニングするリクエストの作成 - ステップ 2: ユーザーの選択」ページが表示されます。

   結果表には、次の情報が表示されます。

フィールド	説明
ユーザー ID	ログイン ID（ユーザー名）
名	ユーザーの名
姓	ユーザーの姓

4. **結果**表で「**ユーザー**」チェック・ボックスを選択し、「**追加**」をクリックして、ユーザー名を「**選択済**」リストに移動します。

   1 人または複数のユーザーを「**選択済**」リストから削除するには、「**削除**」ボタンを使用します。

   ユーザーのリストをフィルタリングするには、「**フィルタ方法**」メニューでキーを選択し、このメニューの隣にあるボックスに選択基準を入力して、「**実行**」をクリックします。

   リクエスト・システム・フォームにユーザー定義フィールドがある場合、これらのフィールドは「ステップ 2: 追加情報の指定」ページに表示されます。これらのフィールドは Design Console で、「User Defined Field Definition」フォームの「**Form Name**」に「**Requests**」を指定して作成できます。詳細は、『Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド』を参照してください。

   完了したら、「**続行**」をクリックします。

   「リソースをプロビジョニングするリクエストの作成 - ステップ 3: リソースの指定」ページが表示されます。

5. リソース名のチェック・ボックスを選択して「**追加**」を選択すると、リソース名が「**選択済**」リストに移動します。

   1 人または複数のユーザーを「**選択済**」リストから削除するには、「**削除**」ボタンを使用します。

   ユーザーのリストをフィルタリングするには、「**フィルタ方法**」メニューでキーを選択し、このメニューの隣にあるボックスに選択基準を入力して、「**実行**」をクリックします。

   完了したら、「**続行**」をクリックします。

   「リソースをプロビジョニングするリクエストの作成 - ステップ 4: リソース・データの指定」ページが表示されます。このページには、リソースのバージョン情報や、このリクエストのユーザーに関する情報が表示されます。

6. このページの情報が正しければ、「**続行**」をクリックします。正しくなければ「戻る」をクリックして修正します。

   関連フォームはすべて次のページに表示されます。

7. 「**フォーム**」フィールドにリクエストされた情報を入力して「**続行**」をクリックするか、「**戻る**」をクリックして修正します。

   「**続行**」をクリックすると、「リソースをプロビジョニングするリクエストの作成 - ステップ 5: 情報の検証」ページが表示されます。

8. 必要に応じてコメントを追加するには、「**コメントを追加しますか**」リンクをクリックします。

   「**リクエスト・コメントの追加**」ページが表示されます。

9. リソース・リクエストにコメントを挿入するには、「**コメント**」フィールドにコメントを入力し、「**コメントを追加するにはここをクリックしてください。**」をクリックします。

   または、「**消去**」をクリックして「コメント」フィールドのテキストを消去します。ページを閉じるには「**閉じる**」をクリックします。

   コメントを追加すると、追加されたコメントがこのページに表示されます。

10. 情報を確認したら、「**すぐに送信**」をクリックすると、リクエストが有効になります。

    「**リクエストが送信されました**」ページが表示されます。

    このページには、次の情報が表示されます。

フィールド	説明
ステータス	リクエストのステータス（状態）
リクエスタ	リクエストを行った人の名前
アクション	このリクエストのために実行されたアクション
日付	リクエストの実行日

11. このリクエストを後でアクティブにするには、「**後にスケジュール**」をクリックして、リクエストがアクティブになる日付を定義します。

    指定できる日付はその日より後の日付のみです。「**後にスケジュール**」ページが表示されます。

    「**後にスケジュール**」オプションは、多くの場合、勤務開始日が後の日付である新しい従業員に対して使用されます。日付を定義し、リクエストが作成され、承認プロセスが開始されたら、承認者はタスクを承認できます。承認プロセスはこれで完了です。ただし、プロビジョニング・プロセスはスケジュールされた日付まで開始されません。

12. カレンダのアイコンを使用してリクエストをアクティブにする日を定義し、「**送信**」をクリックします。

リソースの無効化

次の手順では、1 つまたは複数のリソースのプロビジョニング・リクエストを無効化する方法について説明します。

注意 : 組織のためのリソース無効化はユーザーのためのリソース無効化に類似しているため、次の手順には、ユーザーのためのリソース無効化の手順のみを示します。

リクエストを無効化するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで**「リクエスト」**をクリックし、続いて「リソース」をクリックします。

   「リクエストの作成」ページが表示されます。

2. **「リソースの無効化」**ラジオ・ボタンを選択し、**「続行」**をクリックします。

   「リソースを無効化するリクエストの作成 - ステップ 1: タイプの選択」ページが表示されます。

   このページでは、次のいずれかのオプションを選択できます。

   - **ユーザー :** 1 人または複数のユーザーに対してリソースを無効にできます。
   - **組織 :** 1 つまたは複数の組織に対してリソースを無効にできます。

     この例では、「ユーザー」オプションが選択されています。

3. **「続行」**をクリックします。

   「リソースを無効化するリクエストの作成 - ステップ 2: ユーザーの選択」ページが表示されます。

4. ユーザー名のチェック・ボックスを選択して**「追加」**を選択すると、ユーザー名が**「選択済」**リストに移動します。

   1 人または複数のユーザーを**「選択済」**リストから削除するには、**「削除」**ボタンを使用します。

   リストをフィルタリングするには、**「フィルタ方法」**メニューでキーを選択し、このメニューの隣にあるボックスに選択基準を入力して、**「実行」**をクリックします。

   完了したら、**「続行」**をクリックします。

   「リソースを無効化するリクエストの作成 - ステップ 3: リソースの指定」ページが表示されます。

5. ユーザーに対して無効化する 1 つまたは複数のリソースのチェック・ボックスを選択し、**「追加」**をクリックすると、リソースが**「選択済」**リストに移動します。

   リソースを**「選択済」**リストから削除するには、**「削除」**ボタンを使用します。

6. **「続行」**をクリックします。

   ユーザーに対してリソース・インスタンスの複数のインスタンスがプロビジョニングされている場合は、「リソースを無効化するリクエストの作成 - ステップ 4: 解決」ページが表示されます。それ以外の場合は、「リソースを無効化するリクエストの作成 - ステップ 5: 情報の検証」ページが表示されます。

7. 「リソースを無効化するリクエストの作成 - ステップ 4: 解決」ページが表示されたら、無効化するリソース・インスタンスを選択し、**「続行」**をクリックします。

   「リソースを無効化するリクエストの作成 - ステップ 5: 情報の検証」ページが表示されます。

8. 「リソースを無効化するリクエストの作成 - ステップ 5: 情報の検証」ページに表示される情報について、次の表で説明します。

   「**選択済ユーザー**」表には、次の情報が表示されます。

フィールド	説明
ユーザー ID	ログイン ID（ユーザー名）
名	ユーザーの名
姓	ユーザーの姓
リソース名	リクエストまたはプロビジョニングするリソースの名前
詳細	リソースに関する追加の詳細情報

9. コメントを追加するには、「**コメントを追加しますか**」リンクをクリックします。

   「**リクエスト・コメントの追加**」ページが表示されます。

10. リソース・リクエストにコメントを挿入するには、「**コメント**」フィールドにコメントを入力し、「**コメントを追加するにはここをクリックしてください。**」をクリックします。

    「**コメント**」フィールドのテキストを消去するには、「**消去**」をクリックします。このページを閉じるには、「**閉じる**」をクリックします。

    コメントを追加した場合、「**情報の検証**」ページに表示されます。

    このリソース・リクエストの情報を変更するには、「**変更**」リンクをクリックします。さらにコメントを追加するには、「**追加**」リンクをクリックします。

11. 情報を確認したら、「**すぐに送信**」をクリックすると、リクエストが有効になります。

    「**リクエストが送信されました**」ページが表示されます。

    このページには、次の情報が表示されます。

フィールド	説明
ステータス	リクエストのステータス（状態）
リクエスタ	リクエストを行った人の名前
アクション	このリクエストのために実行されたアクション
日付	リクエストの実行日

12. このリクエストを後でアクティブにするには、「**後にスケジュール**」をクリックします。

    「**後にスケジュール**」ページが表示されます。カレンダのアイコンを使用してリクエストをアクティブにする日を定義し、「**送信**」をクリックします。

リソースの再有効化

無効にしたリソースは再有効化することができます。失効させたリソースは再有効化できません。

注意： 組織のためのリソースの再有効化はユーザーのためのリソースの再有効化に類似しているため、次の手順には、ユーザーのためのリソースの再有効化手順のみを示します。

リソース再有効化のリクエストを作成するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで**「リクエスト」**をクリックし、続いて**「リソース」**をクリックします。

   「リクエストの作成」ページが表示されます。

   このページでは**リソースの権限付与**オプションがデフォルトになっています。

2. **「リソースの再有効化」**オプションを選択して、このユーザーに対して以前に無効化されたリソースへのアクセスを提供し、**「続行」**をクリックします。

   「リソースを再有効化するリクエストの作成 - ステップ 1: タイプの選択」ページが表示されます。

3. 1 人または複数のユーザーに対して無効化したリソースを再有効化するには、**「ユーザー」**をクリックします。

   または、**「組織」**を選択して 1 つまたは複数の組織に対して無効化したリソースを再有効化します。この例では、**「ユーザー」**オプションが選択されています。

4. **「続行」**をクリックします。

   「リソースを再有効化するリクエストの作成 - ステップ 2: ユーザーの選択」ページが表示されます。

   結果表には、次の情報が表示されます。

フィールド	説明
ユーザー ID	ログイン ID（ユーザー名）
名	ユーザーの名
姓	ユーザーの姓

5. **「ユーザー」**チェック・ボックスを選択して**「追加」**をクリックすると、ユーザー名が**「選択済」**リストに移動します。**「選択済」**リストからユーザーを削除するには、**「削除」**ボタンをクリックします。

   完了したら、**「続行」**をクリックします。

   「リソースを再有効化するリクエストの作成 - ステップ 3: リソースの指定」ページが表示されます。

6. リソース名のチェック・ボックスを選択し、**「追加」**をクリックすると、そのリソース名が「選択済」リストに移動します。ユーザーを**「選択済」**リストから削除するには、**「削除」**ボタンを使用して、**「続行」**をクリックします。

   ユーザーに対してリソース・インスタンスの複数のインスタンスがプロビジョニングされている場合は、「リソースを再有効化するリクエストの作成 - ステップ 4: 解決」ページが表示されます。それ以外の場合は、「リソースを再有効化するリクエストの作成 - ステップ 5: 情報の検証」ページが表示されます。

7. 「リソースを再有効化するリクエストの作成 - ステップ 4: 解決」ページが表示されたら、無効化するリソース・インスタンスを選択し、**「続行」**をクリックします。

   「リソースを再有効化するリクエストの作成 - ステップ 5: 情報の検証」ページが表示されます。

8. コメントを追加するには、**「コメントを追加しますか」**リンクをクリックします。

   「リクエスト・コメントの追加」ページが表示されます。

9. リソース・リクエストにコメントを挿入するには、**「コメント」**フィールドにコメントを入力し、**「コメントの追加」**をクリックします。

   追加したコメントがページに表示されます。

   「消去」をクリックすると**「コメント」**フィールドのテキストが消去されます。ページを閉じるには**「閉じる」**をクリックします。

10. 「リソースを再有効化するリクエストの作成 - ステップ 5: 情報の検証」ページの情報を確認して**「すぐに送信」**をクリックすると、リクエストがアクティブになります。

    「すぐに送信」をクリックすると、**「リクエストが送信されました」**ページが表示されます。

    このページには、次の情報が表示されます。

フィールド	説明
ステータス	リクエストのステータス（状態）
リクエスタ	リクエストを行った人の名前
アクション	このリクエストのために実行されたアクション
日付	リクエストの実行日

    このリクエストの詳細を表示するには、**「リクエスト ID」**リンクをクリックします。「リクエストの詳細」ページが表示されます。このページの詳細は、「リクエストのトラッキング」の項を参照してください。

11. このリクエストを後でアクティブにするには、**「後にスケジュール」**をクリックします。

    「後にスケジュール」ページが表示されます。

12. カレンダのアイコンを使用してリクエストをアクティブにする日を定義し、**「送信」**をクリックします。

リソースの失効

失効は永続的な操作です。

リソースの失効リクエストを作成するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで**「リクエスト」**をクリックし、続いて**「リソース」**をクリックします。

   「リクエストの作成」ページが表示されます。

2. **「リソースの失効」**ラジオ・ボタンを選択し、**「続行」**をクリックします。

   「リソースを失効するリクエストの作成 - ステップ 1: タイプの選択」ページが表示されます。

   このページでは、次のいずれかのオプションを選択できます。

   - **ユーザー :** 1 人または複数のユーザーに対してリソースを無効にできます。
   - **組織 :** 1 つまたは複数の組織に対してリソースを無効にできます。

   この例では、**「ユーザー」**オプションが選択されています。

3. **「続行」**をクリックします。

   「リソースを失効するリクエストの作成 - ステップ 2: ユーザーの選択」ページが表示されます。

4. ユーザー名のチェック・ボックスを選択して**「追加」**を選択すると、ユーザー名が**「選択済」**リストに移動します。

   ユーザーを**「選択済」**リストから削除するには、**「削除」**ボタンを使用し、**「続行」**をクリックします。

   「リソースを失効するリクエストの作成 - ステップ 3: リソースの指定」ページが表示されます。

5. ユーザーのアクセスを取り消すチェック・ボックスを選択して、**「追加」**をクリックすると、そのリソースが「選択済」リストに移動します。

   リソースを**「選択済」**リストから削除するには、**「削除」**ボタンを使用し、**「続行」**をクリックします。

   ユーザーに対してリソース・インスタンスの複数のインスタンスがプロビジョニングされている場合は、「リソースを失効するリクエストの作成 - ステップ 4: 解決」ページが表示されます。それ以外の場合は、「リソースを失効するリクエストの作成 - ステップ 5: 情報の検証」ページが表示されます。

6. 「リソースを失効するリクエストの作成 - ステップ 4: 解決」ページが表示されたら、無効化するリソース・インスタンスを選択し、**「続行」**をクリックします。

   「リソースを失効するリクエストの作成 - ステップ 5: 情報の検証」ページが表示されます。

7. 「リソースを失効するリクエストの作成 - ステップ 5: 情報の検証」ページに表示される情報について、次の表で説明します。

   「選択済ユーザー」表には、次の情報が表示されます。

フィールド	説明
ユーザー ID	ログイン ID（ユーザー名）
名	ユーザーの名
姓	ユーザーの姓

「選択済リソース」表には、次の情報が表示されます。

フィールド	説明
リソース名	リクエストまたはプロビジョニングするリソースの名前
詳細	リソースに関する追加の詳細情報

8. コメントを追加するには、**「コメントを追加しますか」**リンクをクリックします。

   「リクエスト・コメントの追加」ページが表示されます。

9. リソース・リクエストにコメントを挿入するには、**「コメント」**フィールドにコメントを入力し、**「コメントを追加するにはここをクリックしてください。」**をクリックします。

   追加したコメントが**「情報の検証」**ページに表示されます。

   それ以外の場合は、**「消去」**をクリックすると**「コメント」**フィールドのテキストが消去されます。ページを閉じるには**「閉じる」**をクリックします。

   このリソース・リクエストの情報を変更する場合、リソースを変更するには**「変更」**リンクを、さらにコメントを追加するには**「追加」**リンクをクリックします。リンクをクリックすると、それぞれ該当するページにジャンプします。

10. 情報を確認して**「すぐに送信」**をクリックすると、リソースが有効になります。

    「リクエストが送信されました」ページが表示されます。このページには、次の情報が表示されます。

フィールド	説明
ステータス	リクエストのステータス（状態）
リクエスタ	リクエストを行った人の名前
アクション	このリクエストのために実行されたアクション
日付	リクエストの実行日

11. このリクエストを後でアクティブにするには、**「後にスケジュール」**をクリックして、リクエストがアクティブになる日付を定義します。

    「後にスケジュール」ページが表示されます。カレンダのアイコンを使用してリクエストをアクティブにする日を定義し、**「送信」**をクリックします。

リクエストのトラッキング

Oracle Identity Manager で割り当てられている権限によっては、リソースのリクエストを表示できることがあります。さらに、リクエスト内で詳細を編集したり、タスクを承認できることもあります。これを、リクエストのトラッキングと言います。トラッキングできるリクエストは、次のいずれかに分類されます。

- 他のユーザーによって作成されたリソースのプロビジョニングを求めるリクエスト
- 他のユーザーにリソースをプロビジョニングするよう作成したリクエスト
- 自分にリソースをプロビジョニングするよう作成したリクエスト
- 自己登録で作成したリクエスト
- 自分のプロファイルを変更して作成したリクエスト

作成、表示および編集できるリクエストのタイプは、Oracle Identity Manager におけるアカウントの特性によって異なります。リクエストの中でタスクを承認する作業を割り当てられている場合、そのリクエストをトラッキングして、割り当てられたタスクを承認することができます。各種のロールおよび関連する機能のリストは、1-2 ページの「ユーザー・ロールと機能」を参照してください。

次の各項では、リクエストのトラッキングに関連するタスクを実行する方法について説明します。

- リクエストの検索
- 承認の詳細の表示
- プロビジョニングの詳細の表示
- リクエストのコメントの表示
- リクエスト・ステータス履歴の表示

リクエストの検索

次の手順では、リクエストの検索について説明します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「**リクエスト**」をクリックし、続いて「**トラッキング**」をクリックします。

   「**リクエストのトラッキング**」ページが表示されます。トラッキングするリクエストを見つけるために、一連のラジオ・ボタンのオプションを使用して既存のリクエストを検索できます。選択できるのはこれらのオプションの 1 つのみです。たとえば「**ユーザー ID**」と「**リクエスト ID**」の両方は選択できません。「**リクエスト ID**」または「**リソース名**」を選択して、そのオプションに関連するフィールドを空のままにしておくと、Oracle Identity Manager によりすべてのリクエストが表示されます。

いずれかの検索オプションを使用しても目的のリクエストが見つからない場合は、別のオプションを選択するか、検索基準をゆるめて検索結果を増やします。次の表に、検索基準の一覧を示します。

フィールド	説明
ユーザー ID	自分自身または別のユーザーのために作成されたリクエストのトラッキングを可能にします。**「セルフ」**または**「その他」**を選択します。**「その他」**を選択する場合は、**「ユーザー ID の検索」**をクリックして、トラッキングするリクエストに関連するユーザーを指定する必要があります。ワイルドカード文字（*）を使用すると、先頭か末尾に特定の文字または数字があるユーザー ID に関連付けられているリクエストを検索することができます。ユーザーの所属組織で検索することもできます。
リクエスト ID	リクエストの ID でリクエストをトラッキングできます。通常は数値です。このオプションを選択し、リクエストの ID を入力します。ワイルドカード文字（*）を使用すると、先頭か末尾に特定の文字または数字があるリクエストを検索することができます。
作成日	リクエストが作成された日付でリクエストをトラッキングできます。このオプションを選択し、問合せ範囲の開始日と終了日を入力します。Oracle Identity Manager により、それらの日付の間に作成されたすべてのリクエストが表示されます。
リソース名	プロビジョニングされるリソース（リクエストで指定されたリソース）によってリクエストをトラッキングできます。このオプションを選択し、リソース名を入力します。ワイルドカード文字（「*」など）を使用して、含まれるリソース名の先頭か末尾に特定の文字があるリクエストを検索することができます。
ステータス	**「リクエストが初期化されました」**、**「リクエストを受信しました」**、**「承認」**、**「未承認」**、**「リクエストが取り消されました」**、**「リクエストがクローズされました」**、**「オブジェクトの承認完了」**、**「リクエスト完了」**、または**「情報の指定」**などのリクエスト・ステータスに応じてリクエストをトラッキングできるようにします。このオプションを選択し、メニューからトラッキングするステータスを選択します。

2. **「検索」**をクリックします。

   Oracle Identity Manager により、入力した基準に一致するすべてのリクエストと、条件式に一致するリクエストの数が表示されます。条件式により数ページのリクエストが検出された場合は、**「最初」**、**「前へ」**および**「次へ」**の各リンクを使用して結果セットを移動します。

3. リクエストの詳細を表示するには、**結果**表の**「リクエスト ID」**リンクをクリックします。

   「リクエストの詳細」ページが表示されます。

   リクエスト全体を取り消すには、リクエストの横にあるチェック・ボックスを選択し、**「リクエストの取消し」**をクリックします。

承認の詳細の表示

このページには、プロセスや保留中のタスクなど、このリクエストに関するすべての承認が表示されます。

承認の詳細を表示するには、次の手順を実行します。

1. 6-11 ページの「リクエストの検索」で説明されている手順に従って、リソース・リクエストを検索します。
2. **「追加詳細」**ボックスから**「承認の詳細」**オプションを選択します。

   承認済のタスク・ページが表示されます。**「承認の詳細」**フィールドに、承認プロセスに関連するすべてのタスクが表示されます。**「リクエスト ID」**番号が、このリクエストの**「リクエストの詳細」**ページへのアクティブ・リンクになっています。**「リクエスト承認タスク」**表に、次のフィールドが表示されます。

フィールド	説明
タスク	承認タスクの名前。
ステータス	リクエストの現行のステータス。
割当て先	このリクエストはユーザーまたはプロキシ・ユーザーに割り当てられます。ユーザー・グループまたはプロキシ・グループにも割り当てられます。
アクション	**「アクション」**列に、各リクエストに対応するチェック・ボックスがあります。最後の行にある**「承認」**、**「拒否」**および**「再割当て」**ボタンを選択して、リクエストに対するアクションを決定します。リクエストを選択して「承認」または「拒否」をクリックします。確認ページに、タスクと**「確認」**ボタン、**「取消」**ボタンが表示されます。 「再割当て」をクリックすると、ログインしたユーザーがタスクの再割当て先を表示する許可を持っているすべてのユーザーのリストがコンソールに表示されます。このページにあるラジオ・ボタンを選択すると、ログインしたユーザーが表示可能でタスク再割当て可能なすべてのグループが一覧表示されます。

プロビジョニングの詳細の表示

リクエストがユーザー、組織またはリソースのいずれによって作成されたかに応じて、ユーザー、組織またはリソースによってプロビジョニング・タスクを表示できます。

プロビジョニング・タスクを表示するには、次の手順を実行します。

1. 6-11 ページの「リクエストの検索」の説明に従って、リソース・リクエストを検索します。
2. **「追加詳細」**ボックスから**「プロビジョニングの詳細」**オプションを選択します。

   「プロビジョニング・タスク」ページが表示されます。**「プロビジョニングの詳細」**フィールドに、プロビジョニング・プロセスに関連するすべてのタスクが表示されます。
3. 目的のラジオ・ボタンを選択して、表示する情報を表示します。

ユーザーまたは組織ごとの表示

「**ユーザー / 組織**」ボタンを選択すると、プロビジョニングされるユーザーまたは組織のすべてのタスクがページに表示されます。リクエストに多数のユーザーまたは組織がある場合は、各ユーザーに対応する表がページに表示されます。

表に示される情報は次のとおりです。

フィールド	説明
リソース名	プロビジョニングされるリソース・オブジェクトの名前です。
リソース・ステータス	リソース・リクエストの現行のステータス。
プロセス・インスタンス名	この名前は、承認プロセスまたはプロビジョニング・プロセスです。
データ	このテキストは、このユーザーのプロセス・フォームへのリンクです。
記述データ	これはプロセスを一意に識別する番号です。

リソースごとの表示

「**リソース**」ラジオ・ボタンを選択すると、このリソースに関連するすべてのリソースと情報が表示されます。リクエストに複数のリソースがある場合、ページには各ユーザーに対応する表が表示されます。

表に示される情報は次のとおりです。

フィールド	説明
ユーザー / 組織	これは、このリソース・オブジェクトにプロビジョニングされたユーザーまたは組織の名前です。
リソース・ステータス	リソース・リクエストの現行のステータス。
プロセス・インスタンス名	プロビジョニング・プロセスの名前です。
データ	このテキストは、このユーザーのプロセス・フォームへのリンクです。
記述データ	これはプロセスを一意に識別する番号です。

リクエストのコメントの表示

リクエストは、表示の権限を持つすべてのユーザーが表示できます。コメントがあると、他のユーザーでもリクエストを理解できます。リクエストの処理方法を他のユーザーが表示できるように、システム管理者と同様に、ユーザーもリクエストにコメントを追加することができます。

リクエスト・コメントを表示するには、次の手順を実行します。

1. 6-11 ページの「リクエストの検索」の説明に従って、リソース・リクエストを検索します。
2. **「追加詳細」**ボックスから**「リクエストのコメント」**オプションを選択します。
3. リクエストの ID 番号をクリックして**「リクエストの詳細」**ページに戻ります。

   このページにコメントを追加するには、**「コメントを追加しますか」**リンクをクリックします。このリクエストに追加されたコメントがある場合は、「リクエストの詳細」→「リクエストのコメント」ページにコメントが表示されます。

   このページの表には、次の情報が表示されます。

フィールド	説明
コメント	これは、追加された実際のコメントです。
日付	コメントが追加された日付です。
追加者	Oracle Identity Manager にログインしたユーザー名です。

リクエスト・ステータス履歴の表示

リクエスト履歴は、現在のワークフローの状態を理解するために役立つ補足的な表示です。ユーザーはリクエストを作成でき、ワークフローが作成されます。リクエストの完了または拒否までの間には、ユーザーの手動アクションやシステム・アクションなど、多数のステップやアクションが実行される必要があります。

アクションが実行されると、ワークフローのステータスが変更され、次の状態に移行します。

ステータス履歴を表示するには、次の手順を実行します。

1. 6-11 ページの「リクエストの検索」の説明に従って、リソース・リクエストを検索します。
2. **「追加詳細」**ボックスから「リクエスト・ステータス履歴」オプションを選択します。

   「リクエスト履歴」ページが表示されます。このページの表に、リクエストのワークフローに関する情報が表示されます。このページに表示される情報を、次の表に示します。

フィールド	説明
ステータス	リソース・リクエストの現行のステータス
日付	リクエストが作成された日付
作成者	このリクエストを作成した名前

7

To-Do リスト

To-Do リストはプロセス内のタスクのリストです。リクエストおよびその関連リソースを承認して使用可能にするプロセスは複数のタスクから構成されています。

リクエストに含まれているリソースは、タスクに対して承認者として割り当てられている他のユーザーが承認を提供するまで、ターゲット・ユーザーに対してプロビジョニング可能になりません。自己登録で承認が必要となるように Oracle Identity Manager を設定した場合、登録プロセスを完了するには、ユーザー自己登録リクエストに関連する承認タスクも表示され、割り当てられた承認者によりアクションが行われることが必要です。

プロビジョニング・タスクのタスク承認者であるユーザーまたはターゲット・ユーザーが所属する組織の管理者のみが、リクエストに含まれるタスクを表示できます。

リクエスト内のあらゆるタスクの承認者である場合は、リクエスト内のすべてのタスクを表示できますが、承認できるのは割り当てられているタスクのみです。管理対象ユーザーのために、保留中のリクエストを表示することもできます。

Oracle Identity Manager Design Console の「Process Definition」フォームを使用してプロセスを定義します。プロセスを定義する際は、**「Provisioning」**と**「Approval」**のいずれかのタイプを指定します。「Provisioning」タイプを選択すると、プロセスはプロビジョニング・プロセスになります。各リソースは、1 つの必須プロビジョニング・プロセスに関連付けられています。これにより、タスクをユーザーに割当てできるようになります。

ここでは次のトピックについて説明します。

- 保留中の承認の確認
- オープン・タスクの管理
- アテステーション・リクエストの管理

保留中の承認の確認

割り当てられたタスクを表示および完了したり、管理下のユーザーに割り当てられているリクエストを表示するには、「保留中の承認」ページを使用します。

保留中の承認を確認するには、次の手順を実行します。

1. **「To-Do リスト」**の下の**「保留中の承認」**をクリックします。

   「保留中の承認」ページに、自分が承認者であるタスクを含むすべてのリクエストのリストが表示されます。ページは、デフォルトでは、**割り当てられている**保留中のリクエストを表示した状態で開きます。

2. 管理下のユーザーに割り当てられている保留中のリクエストを表示するには、**「自身が管理するユーザーへの割当て」**ラジオ・ボタンを選択します。

   ページに、該当する保留中のリクエストが表示されます。

   「検索」基準のドロップダウン・メニューを使用して特定のリクエストを検索することもできます。このメニューには次の項目が含まれています。

   - リクエスト ID
   - リクエスタ
   - 割当て先

   結果表に検索基準の説明があります。各フィールドに適切な値を入力します。**「リクエスト・タイプ」**基準を使用する場合は、**「リクエスト・タイプ」**ボックスで対応する値を選択します。**結果**表には、次のフィールドが表示されます。

フィールド	説明
リクエスト ID	これは、システムによって生成された、リクエストの一意の ID 番号です。
リクエスト・タイプ	リクエストのタイプは次のいずれかです。 ■ ユーザーまたは組織に対するリソースの追加 / 失効 / 有効化 / 無効化 ■ エンティティの有効化 / 無効化 / 削除 / 作成 / 変更
リクエスタ	リクエストを作成したユーザーです。
リクエスト・プレビュー	リクエストのサマリーです。表示される情報には、ユーザー ID または組織とリソースが含まれます。
割当て先	このリクエストを承認するために割り当てられているユーザーです。
ステータス	リクエストのステータス。
承認 / 拒否	このフィールドを使用して目的のリクエストを選択し、承認または拒否します。
再割当て	このフィールドを使用して、別のユーザーまたはユーザー・グループに再割当てする、目的のリクエストを選択します。

3. 保留中のリクエストを承認するには、**「承認 / 拒否」**列で該当するチェック・ボックスを選択し、**「承認」**をクリックします。

   リクエスト ID が**結果**表から削除されます。

   保留中のリクエストを拒否するには、**「承認 / 拒否」**列で該当するチェック・ボックスを選択し、**「拒否」**をクリックします。リクエスト ID が**結果**表から削除されます。

4. 保留中のリクエストを再割当てするには、**「再割当て」**列で該当するチェック・ボックスを選択し、**「再割当て」**をクリックします。

   「保留中の承認を再割当て」ページが表示されます。

5. このリクエストを再割当てするユーザーまたはグループのチェック・ボックスを選択し、**「再割当て」**をクリックします。

   「確認」ページが表示されます。

オープン・タスクの管理

「オープン・タスク」オプションを選択すると、プロビジョニング・プロセスに対して定義されているタスクが一覧表示されます。「オープン・タスク」オプションに、管理下のユーザーまたは自分に割り当てられているすべてのオープン・プロビジョニング・タスクが表示されます。**「オープン・タスク」**オプションを使用して、タスクを再試行し（ステータスが拒否の場合）、別のユーザーにプロビジョニング・タスクを再割当てするか、プロビジョニング・タスクのレスポンスを設定します。この項では、次のタスクについて説明します。

- オープン・タスクの表示
- オープン・タスクの再割当て
- オープン・タスクへのレスポンスの設定

オープン・タスクの表示

管理下のユーザー・グループまたは自分に割り当てられているすべてのオープン・プロビジョニング・タスクを表示できます。

オープン・タスクを表示するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで**「To-Do リスト」**をクリックし、続いて**「オープン・タスク」**をクリックします。

   「オープン・タスク」ページが表示されます。

2. **「フィルタ方法」**検索基準を使用すると、次の分類でタスクをソートできます。

   - タスク名
   - リソース名
   - 組織名
   - ユーザー ID
   - 割当て前（日付を yyyy-MM-dd 形式で入力）
   - 割当て後（日付を yyyy-MM-dd 形式で入力）

   各フィールドに適切な値を入力します。**「オープン・タスク・タイプ」**および**「オブジェクト・タイプ」**基準を使用するには、対応するボックスで値を選択します。続いて**「実行」**をクリックします。**結果**表に、プロビジョニング・タスクに関する次の情報が表示されます。

フィールド	説明
タスク名	このリソース名のプロセス定義フォームで定義したタスクの名前。
タスク・ステータス	リソース・タスクの現行のステータス。
リソース名	このプロビジョニング・タスクに関連付けられているリソースの名前。
組織名	タスクが関連付けられている組織。
ターゲット・ユーザー	プロビジョニング・プロセスを開始する対象となったユーザー。
割当て日	プロビジョニング・タスクが割り当てられた日付。
割当て先	プロビジョニング・タスクが割り当てられているユーザーのユーザー名。

フィールド	説明
再試行	このチェック・ボックスが選択されている場合、プロビジョニング・タスクのステータスが「却下」であることを示しています。このチェック・ボックスを使用してプロビジョニング・タスクを再試行します。
再割当て	このチェック・ボックスを使用して、このプロビジョニング・タスクを別のユーザーまたはユーザー・グループに割り当てます。
レスポンスの設定	このチェック・ボックスを使用して、このプロビジョニング・タスクに対するレスポンスを設定します。
手動による完了	このチェック・ボックスを使用して、プロビジョニング・タスクを手動で完了します。

オープン・タスクの再割当て

オープン・タスクは別のユーザーに割り当てることができます。

オープン・タスクを再割当てするには、次の手順を実行します。

1. 目的のプロビジョニング・タスク名のチェック・ボックスを選択し、**「再割当て」**をクリックします。

   「再割当て」オープン・タスク・ページが表示されます。

2. ユーザー ID またはグループ ID を選択し、**「再割当て」**をクリックします。

   選択できるユーザーまたはグループは、1 人または 1 グループのみです。

   「確認」ページが表示されます。このページには、最初のセンテンスにユーザー ID（氏名）が表示され、プロビジョニング・タスクは箇条書き項目として表示されます。

3. **「再割当てタスクの確認」**をクリックするか、**「取消」**をクリックします。

   「オープン・タスク」ページが表示されます。再割当てしたプロビジョニング・タスクは**結果**表に表示されなくなります。

オープン・タスクへのレスポンスの設定

オープン・タスクへのレスポンスを設定するには、次の手順を実行します。

1. プロビジョニング・タスク名のチェック・ボックスを 1 つ以上選択して、**「レスポンスの設定」**をクリックします。

   「タスクのレスポンスの指定」ページが表示されます。

2. プロビジョニング・タスクに対するレスポンスを選択し、**「レスポンスの設定」**をクリックします。

   これを行わない場合は、**「取消」**をクリックします。

   「確認」ページに、このプロビジョニング・タスクへのレスポンスが表示されます。

3. **「タスクのレスポンスの確認」**をクリックするか、**「取消」**をクリックします。

   「オープン・タスク」ページが表示されます。レスポンスを設定したプロビジョニング・タスクは**結果**表に表示されなくなります。

アテステーション・リクエストの管理

アテステーションとは、一部のユーザーが持つプロビジョニング・リソースの概要を示すレポートについて、確認が必要であることをレビューアに定期的に通知するメカニズムです。レビューアは、適切なレスポンスによって権限の正確さをアテストすることができます。割り当てられているすべてのオープン・アテステーション・タスクを表示、認証、却下または委任するアテステーション・タスクを表示できます。

ここでは次のトピックについて説明します。

- アテステーション・リクエストの表示
- アテステーション・アクションの保存
- コメントと委任の更新
- アテステーションの送信

アテステーション・リクエストの表示

アテステーション・リクエストを使用すると、ユーザー権限が有効であるかどうかを決定できます。アテステーションのリクエストは、認証、却下、拒否または委任することができます。

アテステーション・リクエストを表示するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで「**To-Do リスト**」をクリックし、続いて「**アテステーション**」をクリックします。

   「アテステーション・リクエスト受信ボックス」ページが表示されます。このページには、保留中のアテステーション・プロセス・リクエストに関する次の情報を提供する結果表が表示されます。

列	説明
プロセス名	プロセスの名前。
プロセス・コード	プロセスのコード。
データ型	アテストされるデータのタイプ。
スコープ	アテステーション・スコープがマネージャ別、グループ別、組織別またはリソース別のいずれであるかを示します。
委任者	タスクの委任元であるユーザーを識別します。タスクがアテステーション・プロセスによって割り当てられた場合、このフィールドは空です。
現在のリクエスト	アテステーション・タスクが作成された日付と時刻を指定します。

2. 「アテステーション・リクエスト受信ボックス」ページの結果表で、管理するプロセス名のリンクをクリックします。

   リクエスト・ページに、ユーザーがタスクの一部としてアテストするために必要な権限が表示されます。レビューアは、アテストする権限の詳細（プロセス・フォーム・データ）も表示することができます。結果表には次の列があります。

列	説明
ユーザー	権限をアテストする対象。
リソース	権限がアテストされるリソース。データは、アテステーション日現在の、権限のプロセス・フォーム・データが表示されるポップアップ・ページへのリンクです。
記述データ	プロビジョニング・リソース・インスタンスの説明。
最終アテスト日	この権限が最後にアテストされた日付と時刻が格納されます。
コメント	権限について入力したコメント。
アクション	権限に対するアクションを指定するために選択する、**「認証」**、**「却下」**、**「拒否」**および**「委任」**の各ボタンがあります。

3. アクションが未指定のレコードのみを表示するには、結果表の上にある**「すでにアクションが指定されている場合はレコードを非表示にします」**オプションを選択します。

4. 結果表でその他の行を表示するには、**「次へ」**をクリックします。

アテステーション・アクションの保存

次の手順では、アテステーション・アクションの保存方法を説明します。

注意： 保存してもアテステーションは送信されません。アテステーションを送信するには、7-7 ページの「アテステーションの送信」に記載されている手順に従う必要があります。

アテステーション・アクションを保存するには、次の手順を実行します。

1. 7-5 ページの「アテステーション・リクエストの表示」の手順に従って、保存するアテステーション・プロセスを選択します。

2. 「アテステーション・リクエスト」ページで、リストされている権限に対して設定するアクションを選択し、**「保存」**をクリックします。

   「アテステーション・リクエスト」→「アクションの保存」ページに、アクションを選択した現行のアテステーション・リクエストにある権限をリストした表が表示されます。**「委任」**のアクションを選択したすべての権限で、**「委任されたレビューア」**フィールドにあるレビューアを検索することもできます。

3. 「アテステーション・リクエスト」→「アクションの保存」ページで、リストされている権限に任意のコメントを入力するか、**「レビューア・アクション」**列の値が**「委任」**である権限に対するレビューアを選択します。

4. レビューアは、**「デフォルトのコメント」**列と**「デフォルトの委任レビューア」**列に値を入力することができます。

   特定の値が表にない場合、これらの値がすべての権限に対して使用されます。

5. **「保存」**をクリックします。

コメントと委任の更新

アテステーション・リクエストを更新するには、次の手順を実行します。

1. 7-5 ページの「アテステーション・リクエストの表示」の手順に従って、更新するアテステーション・プロセスを選択します。
2. 7-6 ページの「アテステーション・アクションの保存」の手順に従って、いずれかの権限について、コメントを入力するか委任されるレビューアを選択します。
3. **「既存のコメントおよび委任情報を更新」**をクリックします。

   「アテステーション・リクエスト」→「コメントおよび委任を更新」ページに、アクションを選択した現行のアテステーション・リクエストにある権限をリストした表が表示されます。
4. 「アテステーション・リクエスト」→「コメントおよび委任を更新」ページで、更新する権限の横にあるチェック・ボックスを選択し、新しいコメントを入力して、委任されるレビューアを選択します。
5. **「保存」**をクリックします。

アテステーションの送信

次の手順で、アテステーションを送信する方法について説明します。

注意： 現行のアテステーション・プロセス・リクエストで各権限にアクションを指定してある場合にかぎり、アテステーションを送信できます。それ以外の場合は、**「アテステーションの送信」**ボタンは無効です。

アテステーションを送信するには、次の手順を実行します。

1. 7-5 ページの「アテステーション・リクエストの表示」の手順に従って、送信するアテステーション・プロセスを選択します。
2. 7-6 ページの「アテステーション・アクションの保存」の手順に従って、いずれかの権限について、コメントを入力するか委任されるレビューアを選択します。
3. 「アテステーション・リクエスト」ページで**「アテステーションの送信」**をクリックします。

   「アテステーション・リクエストの確認」ページが表示されます。
4. 「アテステーション・リクエストの確認」ページで**「送信」**をクリックします。
5. 送信したタスクは、アテステーション受信ボックスから削除されます。

8

ユーザー

管理者は、たとえば Oracle Identity Manager アカウントなど、従業員が必要とするユーザー・レコードを作成および管理することができます。

ユーザーによる自己登録を許可している場合でも、他のユーザーのためにアカウントを作成する機能を管理者に保持させておくことがあります。すべてのユーザーが他のユーザーのためにアカウントを作成できるわけではありません。

この章の内容は、次のとおりです。

- ユーザーの作成
- ユーザーの管理

ユーザーの作成

ユーザー・アカウントを作成するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで**「ユーザー」**をクリックし、続いて**「作成」**をクリックします。

   「ユーザーの作成」ページが表示されます。

2. ユーザー登録に必要なデータを入力します。

   必須フィールドはアスタリスクで示されます。

   警告 : Design Console で「User ID Reuse プロパティを「true」に設定した後に既存のユーザー ID を再利用しようとすると、例外が発生します。この問題を解決するには、USR 表の `USR_LOGIN` 列の一意索引を削除し、一意ではない索引を作成します。「User ID Reuse プロパティの詳細は、『Oracle Identity Manager デザイン・コンソール・ガイド』を参照してください。

3. 「組織」フィールドにある拡大鏡アイコンをクリックすると、「組織」参照ダイアログが表示されます。

4. リストから組織を選択して、**「選択」**をクリックします。

5. **「ユーザーの作成」**をクリックします。

   Oracle Identity Manager によりユーザー・アカウントが作成され、「ユーザーの詳細」ページにユーザー・アカウント情報が表示されます。

   ユーザーを作成した直後のため、追加詳細ボックスのいずれかのオプションを選択すると、限定された情報が表示されます。各検索基準の詳細が表示されているときは、ユーザーに任意のリソースを追加または割当てできます。

「ユーザーの詳細」ページでは、次の項目を選択できます。

- **編集 :** ユーザー・プロファイルを変更します。
- **無効化 :** ユーザーに対してプロビジョニングを無効にします。
- **ロック解除 :** ログイン再試行制限を超えたためにユーザー・アカウントがロックアウトされた場合、そのアカウントをロック解除します。
- **削除 :** ユーザー・アカウントを削除します。
- **パスワードの変更 :** 現行のパスワードを変更します。

ユーザー・プロファイルの編集

ユーザー・プロファイルを編集するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで**「ユーザー」**をクリックし、続いて「管理」をクリックします。

   「ユーザーの管理」ページが表示されます。

2. 「ユーザーの管理」ページでメニューから 1 つ以上の属性を選択し、メニューの隣のテキスト・ボックスに検索基準（ワイルド・カードが必要な場合はアスタリスク（*）を含む）を入力します。

   「従業員タイプ」および**「ステータス」**検索基準を使用するには、対応するボックスで値を選択します。

3. **「ユーザーの検索」**をクリックします。

   ユーザー・リストが表示されます。

4. 情報を編集するユーザーのフィールドをクリックします。

   「ユーザーの詳細」ページが表示されます。

5. 「編集」をクリックします。

6. ユーザーのデータを編集して**「保存」**をクリックするか、**「編集の取消し」**をクリックします。

ユーザーの無効化

ユーザーを無効化すると、そのユーザーはプロビジョニングの対象になりません。「ユーザーの編集」ページにある無効化ボタンは、ロールまたはステータスに応じて**「無効化」**と**「有効化」**の間で切り替わります。

ユーザー・プロファイルを無効化するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで**「ユーザー」**をクリックし、続いて「管理」をクリックします。

   「ユーザーの管理」ページが表示されます。

2. 「ユーザーの管理」ページでメニューから 1 つ以上の属性を選択し、メニューの隣のテキスト・ボックスに検索基準（ワイルド・カードが必要な場合はアスタリスク（*）を含む）を入力します。

   「従業員タイプ」および**「ステータス」**検索基準を使用するには、対応するボックスで値を選択します。

3. **「ユーザーの検索」**をクリックします。

   ユーザー・リストが表示されます。

4. 情報を無効にするユーザーのチェック・ボックスをクリックしてから「無効化」をクリックします。

ユーザーのパスワードの変更

ユーザーのパスワードは再設定できます。

パスワードを変更するには、次の手順を実行します。

1. **「パスワードの変更」**をクリックします。

   「パスワードの変更」ページが表示されます。

2. 新しいパスワードを入力し、確認します。

3. **「パスワードの保存」**または**「取消」**をクリックします。

ユーザーの管理

ユーザー・アカウントに対する操作は、有効化、無効化、リソースのプロビジョニングおよびロック解除です。ユーザー・アカウントを有効化するには、そのアカウントが無効になっている必要があります。ロックを解除できるのは、ロックされているアカウントのみです。ユーザーが再試行回数の上限を超えてログインを試みると、アカウントはロックされます。設定された再試行回数を超えると、そのユーザーはロックアウトされます。

次の手順では、ユーザー・アカウントの管理方法について説明します。

ユーザーの Oracle Identity Manager レコードを編集するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで**「ユーザー」**をクリックし、続いて**「管理」**をクリックします。

   「ユーザーの管理」ページが表示されます。

2. ユーザーに関連する情報をフィールドに入力します。

   1 つ以上のメニューを使用して、検索属性の選択を解除します。選択後、一致させるテキストを隣のフィールドに入力したり、ワイルドカードのアスタリスク（*）を使用します。入力する情報が多いほど、取得されるユーザー・レコードのリストの精度が上がります。**「従業員タイプ」**および**「ステータス」**検索基準を使用するには、対応するボックスで値を選択します。

3. **「ユーザーの検索」**をクリックします。

   Oracle Identity Manager により、入力した基準に一致するユーザーのリストが表示されます。

4. アカウントを有効化、無効化、ロック解除または削除するには、該当するチェック・ボックスやボタンを選択します。

   たとえばユーザー・アカウントを無効にするには、該当する行の**「無効化」**チェック・ボックスを選択し、**「無効化」**をクリックします。

5. ユーザーのアカウントを編集するには、そのアカウントのユーザー ID をクリックします。

   Oracle Identity Manager によりユーザーのプロファイルが表示されます。

6. アカウントのパスワードを編集、無効化、有効化、ロック解除、削除または変更して、該当するボタンをクリックします。

   ユーザーに関する詳細情報を表示するには、プルダウン・メニューを使用します。

   - ユーザーのためにプロビジョニングされたリソースを表示するには、**「リソース・プロファイル」**オプションをクリックします。

     このページでは、**「新しいリソースのプロビジョニング」**ボタンをクリックしてリソースをプロビジョニングできます。

- 「グループ・メンバーシップ」ページを表示するには、メニューの**「グループ・メンバーシップ」**オプションをクリックします。このメニューには、そのユーザーが関連付けられているグループ・メンバーシップがリストされます。

  グループ・メンバーシップ・ページを使用すると、ユーザーをグループに割り当てることもできます。

- 「プロキシ詳細」ページを表示するには、メニューの**「プロキシ詳細」**オプションをクリックします。このメニューには、そのユーザーが関連付けられているプロキシ・ユーザーがリストされます。

  「プロキシ詳細」ページを使用してプロキシを割り当てることもできます。

9

組織

システム管理者は、組織に関連する情報を作成および管理できます。この章では、Oracle Identity Manager を使用して組織を作成および管理する方法について説明します。

この章の内容は、次のとおりです。

- 組織の作成
- 組織の管理
- 組織詳細の管理

組織の作成

組織を作成するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで**「組織」**をクリックし、続いて**「作成」**をクリックします。

   「組織の作成」ページが表示されます。

2. アスタリスク（*）で示された必須フィールドに、組織に関するデータを入力します。

   「タイプ」フィールドで、プルダウン・メニューを使用して、組織のタイプを選択します。メニューに示されているタイプは次のとおりです。

   - 会社（デフォルト）
   - 部門
   - 支店

     「親の名前」フィールドで拡大鏡アイコンをクリックすると、**組織の参照**ポップアップが表示されます。

   - 任意の組織名を選択し、**「選択」**をクリックします。

     組織名が「組織の作成」ページに入力されます。

   - **「組織の作成」**をクリックします。

     「組織の詳細」ページが表示されます。「組織の詳細」ページの説明は、9-3 ページの「組織詳細の管理」を参照してください。

組織の管理

次の各項で説明するように、組織は有効化、無効化および削除することができます。

- 組織の検索と表示
- 組織の有効化
- 組織の無効化
- 組織の削除

組織の検索と表示

Oracle Identity Manager で既存の組織を検索および表示するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで**「組織」**をクリックし、続いて**「管理」**をクリックします。

   「組織の管理」ページが表示されます。

2. ページ上部にあるボックスを使用して、次の検索基準を選択します。

   - **組織名 :** 組織の名前です。
   - **親組織名 :** この組織がメンバーである組織。組織が**結果**表に表示される場合は**「組織名」**フィールドに表示されます。これは親組織のサブ組織です。

3. 「組織タイプ」および「組織ステータス」の各ボックスを使用して、次の検索基準を選択します。

   - **組織タイプ :** 組織の分類タイプです（「会社」、「部門」、「支店」など）。
   - **組織ステータス :** 組織の現行のステータスです（「アクティブ」、「無効」、「削除」）。

4. 検索基準に対応する適切な値を入力するか、すべての組織を検索する場合は条件式にワイルドカードのアスタリスク（*）を使用します。

   検索の「結果」ページが表示されます。このページでは、組織の無効化や削除を行うことができます。

組織の有効化

組織を有効化するには、次の手順を実行します。

1. **「有効化」**チェック・ボックスを選択して**「有効化」**をクリックします。

   「有効化の確認」ページが表示されます。

2. **「有効化の確認」**をクリックしてこの組織の有効化を完了するか、**「取消」**をクリックします。

組織の無効化

組織を無効化できるのは、「System Configuration」フォームの**「Organization Delete/Disable Action」**パラメータが**「True」**に設定されている場合のみです。「System Configuration」フォームは、Oracle Identity Manager Design Console のメニュー・オプションの 1 つです。

組織を無効化するには、次の手順を実行します。

1. **「無効化」**チェック・ボックスを選択して**「無効化」**をクリックします。

   「無効化の確認」ページが表示されます。

2. **「無効化の確認」**をクリックしてこの組織の無効化を完了するか、**「取消」**をクリックします。

組織の削除

組織を削除できるのは、「System Configuration」フォームの**「Organization Delete/Disable Action」**パラメータが**「True」**に設定されている場合のみです。「System Configuration」フォームは、Oracle Identity Manager Design Console のメニュー・オプションの 1 つです。

組織を削除するには、次の手順を実行します。

1. **「削除」**チェック・ボックスを選択して**「削除」**をクリックします。

   「削除の確認」ページが表示されます。

2. **「削除の確認」**をクリックしてこの組織の削除を完了するか、**「取消」**をクリックします。

組織詳細の管理

組織およびサブ組織に対しては、リソースの有効化、無効化、失効、およびプロビジョニングが可能です。管理者および管理グループの割当て、および管理権限の変更もできます。

組織を管理するには、次の手順を実行します。

1. 9-2 ページの「組織の作成」の説明に従って組織を作成します。既存の組織の場合は次の手順に従います。

   a. 9-2 ページの「組織の管理」の説明に従って組織を検索します。

   b. 結果表で組織名をクリックします。「組織の詳細」ページが表示されます。

   「組織の詳細」ページが表示されます。

2. **「組織に関する追加詳細の表示」**メニューを使用して、この組織に関する情報を表示できます。表示する内容は次の項目に基づいて選択できます。

   - リソース・プロファイル
   - ユーザー
   - サブ組織
   - 管理グループ
   - 権限のあるリソース

「組織の詳細」ページでは、次の操作が可能です。

- **編集 :** 組織プロファイルを変更します。
- **無効化 :** 組織をプロビジョニング対象から無効にします。
- **削除 :** 組織を削除します。

3. この組織のリソース・プロファイルに基づいて情報を参照すると、「組織情報」→「リソース・プロファイル」ページが表示されます。「リソース・プロファイル」ページでは、次の操作が可能です。
   - **有効化 :** 組織に関連するリソースを有効化します。
   - **無効化 :** 組織に関連するリソースを無効化します。
   - **失効 :** 組織に関連するリソースを失効させます。
   - **新しいリソースのプロビジョニング :** 組織に関連付けられた新しいリソースをプロビジョニングします。
4. この組織のユーザーに基づいて情報を表示すると、「組織情報」→「ユーザー」ページが表示されます。

   「ユーザー」ページでは、次の操作が可能です。
   - **有効化 :** 組織に関連するユーザーを有効化します。
   - **無効化 :** 組織に関連するユーザーを無効化します。
   - **ロック解除 :** 組織に関連するユーザーのロックを解除します。
   - **削除 :** 組織に関連するユーザーを削除します。
   - **移動 :** ユーザーを別の組織に移動します。
5. この組織のサブ組織に基づいて情報を参照すると、「組織情報」→「下位組織」ページが表示されます。

   「下位組織」ページでは、サブ組織を別の組織に移動できます。
6. この組織の管理者に基づいて情報を参照すると、「組織情報」→「管理グループ」ページが表示されます。

   「管理グループ」ページでは、次の操作が可能です。
   - 新しい管理者の**割当て**
   - **新規グループの作成**
   - **権限の更新**
   - グループの**削除**
7. この組織の権限のあるリソースに基づいて情報を参照すると、「組織情報」→「許可されたリソース」ページが表示されます。

   「許可されたリソース」ページで、組織に関連する、権限のあるリソースの割当ておよび更新を行うことができます。

10

ユーザー・グループ

ユーザー・グループを使用して、アクセス権、ロール、権限などの一般的な機能を割当てできるユーザーの集合のレコードを作成および管理します。

ユーザー・グループは、組織に依存しないグループ、複数の組織にわたるグループ、1 つの組織のユーザーしか含まないグループが可能です。

グループを使用すると、複数のユーザーに対して次の操作を実行できます。

- ユーザーが Oracle Identity Manager の管理およびユーザー・コンソールを使用してアクセスできるメニュー項目を指定します。
- ユーザー・グループにユーザーまたはサブグループを割り当てます。
- ユーザーがプロセス・タスクを設定できるステータスを指定します。
- データ・オブジェクトの変更および権限のリクエストを行います。
- グループ管理者を指名して、たとえば別のユーザー・グループのメンバーが現在のユーザー・グループのメンバーを追加または削除したり、グループの他の特性を変更できるようにします。
- ユーザー・グループのプロビジョニング・ポリシーを指定します。

  これらのポリシーは、ユーザー・グループのメンバーに対して、あるリソース・オブジェクトを自動プロビジョニングするか、リクエストによりプロビジョニングするかを決定します。
- ユーザー・グループに対して、メンバーシップ・ルールを追加または削除します。

  このルールは、どの Oracle Identity Manager ユーザーをユーザー・グループに自動割当てできるかを決定します。

Oracle Identity Manager には、3 つのデフォルトのユーザー・グループ定義があります。

- システム管理者
- オペレータ
- すべてのユーザー

これらのユーザー・グループに関連付けられた権限は変更できます。他のユーザー・グループを作成することもできます。

「システム管理者」ユーザー・グループのメンバーは、Oracle Identity Manager でレコード（システム・レコード以外）を作成、編集および削除できる完全な権限を持っています。このグループのユーザーは、他のユーザーの権限を制御したり、割り当てられないタスクについてもプロセス・タスクのステータスを変更して、一般に最も高いレベルからシステムを管理することができます。

「オペレータ」ユーザー・グループのメンバーは、「組織」、「ユーザー」および「タスク・リスト」の各フォームにアクセスできます。このグループのユーザーは、これらのフォームの一部の機能を実行できます。

「すべてのユーザー」ユーザー・グループのメンバーは権限が最小ですが、自身のユーザー・レコードにアクセスできるなどの機能があります。デフォルトでは、各ユーザーは自動的に「すべてのユーザー」ユーザー・グループに所属します。

この章の内容は、次のとおりです。

- グループの作成
- グループの管理

注意 :「すべてのユーザー」グループからユーザーを削除することはできません。

重要 : ユーザー・グループ SELF OPERATORS が、デフォルトで Oracle Identity Manager に追加されます。このユーザー・グループには XELSELFREG という 1 人のユーザーが含まれ、Oracle Identity Manager の管理およびユーザー・コンソールで自己登録アクションを実行するためのユーザー権限の変更を担当します。

このグループに関連付けられている権限を変更しないこと、またこのグループにユーザーを割り当てないことを強くお薦めします。

グループの作成

新規のユーザー・グループを最初に作成する際、「グループの詳細」ページにはグループ名のみが表示されます。10-3 ページの「グループの管理」の説明に従って、**「追加詳細」**メニューを使用して情報を追加します。

ユーザー・グループを作成するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで**「ユーザー・グループ」**をクリックし、続いて**「作成」**をクリックします。
2. **「ユーザー・グループの作成」**ページが表示されます。
3. ユーザー・グループの名前を**「名前」**フィールドに入力します。
4. **「作成」**をクリックします。
5. **「グループの詳細」**ページが表示されます。
6. グループ名を変更する場合は**「編集」**を、ユーザー・グループを削除する場合は**「削除」**をクリックします。

グループの管理

ユーザー・グループの検索、それらのグループへの情報の追加、ユーザー・グループのためのその他の管理機能を実行できます。

この項では、次の内容について説明します。

- ユーザー・グループの検索
- ユーザー・グループの削除
- ユーザー・グループの表示と管理

ユーザー・グループの検索

ユーザー・グループを検索するには、次の手順を実行します。

1. 左ナビゲーション・ペインで**「ユーザー・グループ」**をクリックし、続いて**「管理」**をクリックします。

   「グループの管理」ページが表示されます。

2. メニューから「グループ名」属性を選択し、メニューの隣のテキスト・ボックスに値を入力します。

   ワイルドカードのアスタリスク（*）を使用すると、すべてのユーザー・グループを問合せできます。

3. **「検索」**をクリックします。

   検索の結果ページが表示されます。このページを使用して、ユーザー・グループを表示および削除できます。

ユーザー・グループの削除

ユーザー・グループを削除するには、次の手順を実行します。

1. 10-3 ページの「ユーザー・グループの検索」の説明に従ってグループを検索します。
2. 削除するグループの横にある**「削除」**チェック・ボックスを選択し、**「削除」**をクリックします。

   「確認」ページが表示されます。

3. **「削除の確認」**をクリックしてこのユーザー・グループの削除を完了するか、**「取消」**をクリックします。

ユーザー・グループの表示と管理

表示するユーザー・グループを選択した後、次の項目を含むそのユーザー・グループの詳細を表示できます。

- メンバーとサブグループ
- メニュー項目
- 管理グループ
- アクセス・ポリシー
- メンバーシップ・ルール
- 権限
- 許可されたレポート

メンバーとサブグループ

メンバー（ユーザー）またはサブグループを表示したり、グループに割当てできます。「ユーザーの割当て」および「サブグループの割当て」の各オプションも機能は類似しています。次の手順では、「ユーザーの割当て」を例として示しています。

メンバーおよびサブグループに関連する操作を行うには、次の手順を実行します。

1. 10-3 ページの「ユーザー・グループの検索」の説明に従ってグループを検索し、結果表でグループの名前をクリックします。

   「グループの詳細」ページが表示されます。

2. 追加詳細ボックスで、「メンバーとサブグループ」を選択します。

   「グループの詳細」→「メンバーとサブグループ」ページが表示されます。

3. 「ユーザーの割当て」をクリックします。

   「グループの詳細」→「メンバーとサブグループ」→「メンバー・ユーザーの検索」ページが表示されます。

4. 「ユーザーの検索」をクリックするとユーザー名の一覧が表示されます。**「消去」**をクリックします。

   結果表が表示されます。

5. メンバーの優先順位を上下させるには、**結果**表の**「優先度を上げる / 下げる」**列で、そのメンバーに関連付けられたラジオ・ボタンを選択し、**「上げる」**または**「下げる」**をクリックします。

6. メンバーを削除するには、**結果**表の**「削除」**列でそのメンバーのラジオ・ボタンをクリックし、**「メンバーの削除」**をクリックします。

7. 対象ユーザーの「ユーザー ID」チェック・ボックスを選択し、**「割当て」**をクリックします。

   「確認」ページに、選択したユーザー ID 名が表示されます。

8. このユーザー・グループに割り当てる正しいユーザー名である場合は、**「割当ての確認」**をクリックします。

   これを行わない場合は、**「取消」**をクリックします。

メニュー項目

「メニュー項目」検索基準には、このユーザー・グループに許可されているすべてのメニュー項目が表示されます。**「メニュー項目」**オプションを使用すると、ユーザー・グループに対して新しいメニュー項目を割り当てることができます。

このユーザー・グループで使用するメニュー項目に関連する操作を行うには、次の手順を実行します。

1. 10-3 ページの「ユーザー・グループの検索」の説明に従ってグループを検索し、**結果**表でグループの名前をクリックします。

   「グループの詳細」ページが表示されます。

2. 追加詳細ボックスで、**「メニュー項目」**を選択します。

   「グループの詳細」→「メニュー項目」ページが表示されます。

3. **「メニュー項目の割当て」**をクリックします。

   「グループの詳細」→「メニュー項目」→「メニュー項目の割当て」ページが表示されます。

4. 目的のメニュー項目名のチェック・ボックスを選択し、**「割当て」**をクリックします。

   「確認」ページが表示されます。

5. このユーザー・グループに割り当てる正しいメニュー項目名である場合は、**「割当ての確認」**をクリックします。

   これを行わない場合は、**「取消」**をクリックします。

   結果表に、このユーザー・グループに許可されているメニュー項目が表示されます。このページでは、許可しないメニュー項目を削除することもできます。

6. メニュー項目を削除するには、メニュー項目名のチェック・ボックスを選択し、**「削除」**をクリックします。

   これでこのメニュー項目はこのユーザー・グループとの関連付けを解除されました。

管理グループ

ユーザー・グループに関連付けられているすべての管理グループを表示することができます。また、次の操作も可能です。

- 管理グループの割当て
- 新しい管理グループの作成
- 管理グループの権限の更新

管理グループの割当て

このページでは、このユーザー・グループから管理グループを削除することもできます。

管理グループを割り当てるには、次の手順を実行します。

1. 10-3 ページの「ユーザー・グループの検索」の説明に従ってグループを検索し、結果表でグループの名前をクリックします。

   「グループの詳細」ページが表示されます。

2. 「追加詳細」ボックスで、**「管理グループ」**を選択します。

   「グループの詳細」→「管理グループ」ページが表示されます。

3. **「管理グループの割当て」**をクリックします。

   「グループの詳細」→「管理グループ」→「管理グループの割当て」ページが表示されます。

   このページには、このユーザー・グループに関連付けることができる管理グループがすべて表示されます。

4. 目的の管理グループ名のチェック・ボックスと書き込みおよび削除に関するそれぞれの設定を選択して、**「割当て」**をクリックします。

   「確認」ページが表示されます。

5. **「割当ての確認」**または**「取消」**をクリックします。

   結果表に、このユーザー・グループを管理できる管理グループが表示されます。

新しい管理グループ

1. 10-3 ページの「ユーザー・グループの検索」の説明に従ってグループを検索し、結果表でグループの名前をクリックします。

   「グループの詳細」ページが表示されます。

2. 追加詳細ボックスで**「管理グループ」**を選択します。

   「グループの詳細」→「管理グループ」ページが表示されます。

3. このユーザー・グループに対して新しい管理グループを作成するには、**「新規グループの作成」**をクリックします。

   「管理者の割当て - ステップ 1: 管理者の割当て」ページが表示されます。

4. この新しい管理グループに含めるユーザーに対応するユーザー名のチェック・ボックスを選択し、**「追加」**をクリックします。

   ユーザーのログイン名が「選択済」リストに表示されます。

5. **「続行」**をクリックするか、**「戻る」**または**「終了」**をクリックしてウィザードを終了します。

   「管理者の割当て - ステップ 2: 別名の指定」ページが表示されます。

6. 新しい管理グループのエイリアス名を入力し、**「続行」**をクリックします。

   または、**「戻る」**をクリックして前のページに戻るか、**「終了」**をクリックしてウィザードを終了します。

   「管理者の割当て - ステップ 3: 権限の指定」ページが表示されます。デフォルトでは、**「読取り」**権限のチェック・ボックスが選択されています。

7. 必要に応じて書込みまたは削除権限を選択し、「続行」をクリックします。

   「管理者の割当て - ステップ 4: 委任情報の検証」ページが表示されます。

   このページには、管理グループのエイリアス、この管理グループに所属するユーザーおよびそのグループの権限が表示されます。

8. この管理グループを変更するには、**「変更」**リンクを使用します。

   「変更」リンクをクリックすると、該当するウィザード・ページに戻って変更することができます。変更しない場合は、**「続行」**をクリックします。

   「グループの詳細」→「管理グループ」ページが表示されます。

グループ権限の更新

グループ権限を更新するには、次の手順を実行します。

1. 10-3 ページの「ユーザー・グループの検索」の説明に従ってグループを検索し、結果表でグループの名前をクリックします。

   「グループの詳細」ページが表示されます。

2. 「追加詳細」ボックスで、**「管理グループ」**を選択します。

   「グループの詳細」→「管理グループ」ページが表示されます。

3. このユーザー・グループに関連する管理グループの権限を更新するには、**「権限の更新」**をクリックします。

   「グループの詳細」→「管理グループ」→「権限の更新」ページが表示されます。

   このページには、管理グループ名と書込みおよび削除の権限が表示されます。

4. 管理グループの権限設定を変更するには、**「書込み権限」**および**「削除権限」**に対応するチェック・ボックスをクリックします。続いて**「更新」**をクリックすると変更されます。

   これを行わない場合は、**「取消」**をクリックします。

   「確認」ページが表示されます。このページには、更新した管理グループが表示されます。

5. このページに表示されている名前が正しければ、**「更新の確認」**をクリックします。

   これを行わない場合は、「取消」をクリックします。

   「グループの詳細」→「管理グループ」ページが表示されます。

   更新された管理グループに、変更された書込みまたは削除アクセス権が表示されます。

6. 管理グループを削除するには、目的のグループ名のチェック・ボックスを選択し、**「削除」**をクリックします。

アクセス・ポリシー

このユーザー・グループで使用できるすべてのアクセス・ポリシーを表示したり、ユーザー・グループに対してアクセス・ポリシーの割当ておよび削除を行えます。

アクセス・ポリシーに関連する操作を行うには、次の手順を実行します。

1. 10-3 ページの「ユーザー・グループの検索」の説明に従ってグループを検索し、結果表でグループの名前をクリックします。

   「グループの詳細」ページが表示されます。

2. 追加詳細ボックスで**「アクセス・ポリシー」**を選択します。

   「グループの詳細」→「アクセス・ポリシー」ページが表示されます。

3. 新しいアクセス・ポリシーを割り当てるには、「割当て」をクリックします。

   「グループの詳細」→「アクセス・ポリシー」→「アクセス・ポリシーの割当て」ページが表示されます。

   このページには、ポリシー名とポリシーの簡単な説明が表示されます。

4. このユーザー・グループの、目的のアクセス・ポリシーに対応するチェック・ボックスを選択して、**「割当ての確認」**をクリックします。

   これを行わない場合は、**「取消」**をクリックします。

   「確認」ページが表示されます。

5. このユーザー・グループに割り当てる正しいアクセス・ポリシーである場合は、**「割当ての確認」**をクリックします。

   これを行わない場合は、**「取消」**をクリックします。

   「グループの詳細」→「アクセス・ポリシー」ページが表示されます。

6. このアクセス・ポリシーを削除するには、削除するポリシー名に対応するチェック・ボックスを選択し、**「削除」**をクリックします。

メンバーシップ・ルール

このユーザー・グループで使用できるすべてのメンバーシップ・ルールの表示、ユーザー・グループに対する新しいメンバーシップ・ルールの割当て、およびメンバーシップ・ルールの削除を行うことができます。

メンバーシップ・ルールに関連する操作を行うには、次の手順を実行します。

1. 10-3 ページの「ユーザー・グループの検索」の説明に従ってグループを検索し、結果表でグループの名前をクリックします。

   「グループの詳細」ページが表示されます。

2. 追加詳細ボックスで**「メンバーシップ・ルール」**を選択します。

   「グループの詳細」→**「メンバーシップ・ルール」**ページが表示されます。

3. 新しいメンバーシップ・ルールを割り当てるには、「ルールの割当て」をクリックします。

   「グループの詳細」→「メンバーシップ・ルール」→「メンバーシップ・ルールの割当て」ページが表示されます。このページには、メンバーシップ・ルールの名前が表示されます。

4. このユーザー・グループの、目的のメンバーシップ・ルールに対応するチェック・ボックスを選択して、**「割当ての確認」**をクリックします。

   これを行わない場合は、**「取消」**をクリックします。

   「確認」ページが表示されます。

5. このユーザー・グループに割り当てる正しいメンバーシップ・ルールである場合は、**「割当ての確認」**をクリックします。

   これを行わない場合は、**「取消」**をクリックします。

   「グループの詳細」→「メンバーシップ・ルール」ページが表示されます。

6. このメンバーシップ・ルールを削除するには、削除するメンバーシップ・ルールのチェック・ボックスを選択し、**「削除」**をクリックします。

権限

ユーザー・グループで使用できる権限の表示、ユーザー・グループに対する新しい権限の割当ておよび更新を行うことができます。

ユーザー・グループの権限に関連する操作を行うには、次の手順を実行します。

1. 10-3 ページの「ユーザー・グループの検索」の説明に従ってグループを検索し、結果表でグループの名前をクリックします。

   「グループの詳細」ページが表示されます。

2. 追加詳細ボックスで**「権限」**を選択します。

   「グループの詳細」→「権限」ページが表示されます。

3. 新しい権限を割り当てるには、**「割当て」**をクリックします。

   「グループの詳細」→「権限」→「割当て権限」ページが表示されます。このページに、権限の名前と、アクティブな権限の設定、**「挿入」**、**「書込み」**および**「削除権限」**が表示されます。

4. 目的の権限名のチェック・ボックスと、それぞれの権限設定を選択し、**「割当て」**をクリックします。

   これを行わない場合は、**「取消」**をクリックします。

   「確認」ページが表示されます。

5. これがこのユーザー・グループに割り当てる権限であれば、**「割当ての確認」**をクリックします。それ以外の場合は**「取消」**をクリックします。

   「グループの詳細」→「権限」ページが表示されます。

6. 権限名を削除するには、目的の権限名に対応するチェック・ボックスを選択し、**「削除」**をクリックします。

7. 権限を更新するには、「権限の更新」をクリックします。

   「グループの詳細」→「権限」→「権限の更新」ページが表示されます。

8. 目的の権限の**「挿入の許可」**、**「更新の許可」**または**「削除の許可」**を選択または選択解除して**「更新」**をクリックするか、**「取消」**をクリックします。

   「確認」ページが表示されます。このページには、更新されたすべての権限が表示されます。

9. このページの情報が正しければ、**「更新の確認」**をクリックします。それ以外の場合は**「取消」**をクリックします。

   「グループの詳細」→「権限」ページが表示されます。「グループの詳細」→「権限」ページに、このユーザー・グループの詳細な権限情報が表示されます。権限の削除も可能です。

10. 権限を削除するには、目的の権限名に対応するチェック・ボックスを選択し、**「削除」**をクリックします。

許可されたレポート

グループ・メンバーが実行を許可されているレポートを一覧表示し、このグループに対してレポートを選択することができます。

グループのレポート権限に関連する操作を行うには、次の手順を実行します。

1. 10-3 ページの「ユーザー・グループの検索」の説明に従ってグループを検索し、**結果**表でグループの名前をクリックします。

   「グループの詳細」ページが表示されます。

2. 追加詳細ボックスで**「許可されたレポート」**を選択します。

   「グループの詳細」→「レポート」ページが表示されます。

3. ユーザーに新しいレポートへのアクセス権を付与するには、**「レポートの割当て」**をクリックします。

   「グループの詳細」→「レポート」→「レポートの割当て」ページが表示されます。このページには、使用できるレポートの名前とタイプが表示されます。

4. 目的のレポートに対応するチェック・ボックスを選択して**「割当て」**をクリックするか、**「取消」**をクリックします。

   「確認」ページが表示されます。

5. これがこのユーザー・グループに割り当てるレポートであれば、**「割当ての確認」**をクリックします。それ以外の場合は**「取消」**をクリックします。

   「グループの詳細」→「レポート」ページが表示されます。

6. レポートを削除するには、目的のレポート名に対応するチェック・ボックスを選択し、**「削除」**をクリックします。

11

アクセス・ポリシー

この章では、Oracle Identity Manager でユーザー、組織およびリソースに対してアクセス・ポリシーを作成、使用する方法について説明します。

この章の内容は、次のとおりです。

- アクセス・ポリシーの作成
- アクセス・ポリシーの管理

アクセス・ポリシーの作成

アクセス・ポリシー・ウィザードは、ユーザー・グループやユーザーにリソースをプロビジョニングするためのアクセス・ポリシーを定義する際に役立ちます。ポリシーを作成する際、ユーザーにリソースをプロビジョニングする前に、ポリシーにより必ず承認リクエストが発行されるように設定できます。また、アクセス・ポリシーが適用される際に、承認リクエストを生成しないでリソースをユーザーにダイレクトにプロビジョニングすることも可能です。

さらに、アクセス・ポリシーが作成されているユーザー・グループの一員であるユーザーに対して、このアクセス・ポリシーによって指定されたリソースをプロビジョニングするかどうかも決定できます。これをポリシーの更新と言います。

アクセス・ポリシーを作成するには、次の手順を実行します。

1. **「アクセス・ポリシー」**の下の**「作成」**をクリックします。

   「アクセス・ポリシーの作成」ページが表示されます。

2. 必須フィールドの情報は、アスタリスク（*）で示されます。

   このアクセス・ポリシーを**「承認なし」**と**「承認あり」**のどちらを使用してプロビジョニングするかを指定できます。指定された承認者（またはプロキシ・ユーザー）が承認しない場合はリソースがユーザーまたはグループにプロビジョニングされないようにするには、**「承認あり」**オプションを選択します。承認が必要ない場合は**「承認なし」**オプションを選択します。

3. アクセス・ポリシーの作成時に更新するようにするには、**「アクセス・ポリシーの更新」**チェック・ボックスをクリックします。

   更新のチェック・ボックスが選択されない場合、グループ・メンバーシップは考慮されません。

   「続行」をクリックします。

   「アクセス・ポリシーの作成 - ステップ 2: リソースの選択 (プロビジョニング)」ページが表示されます。

4. 「アクセス・ポリシーの作成 - ステップ 2: リソースの選択 (プロビジョニング)」ページでは、このアクセス・ポリシーでプロビジョニングするリソースを指定できます。

   フィルタ検索のメニューを使用してリソースを検索します。

   結果表からリソースの名前を選択するには、該当するボックスを選択し、**「追加」**をクリックします。

   プロビジョニングする目的のリソースの名前が**「選択済」**リストに表示されます。リソースを拒否するだけのアクセス・ポリシーを作成する場合は、リソースを選択しないで**「続行」**をクリックします。

   選択されているリソースの割当てを解除するには、**「選択済」**リストでリソースを選択し、**「削除」**をクリックします。

   「続行」をクリックします。このリソースに関連付けられているフォームがある場合は、後続のページに必須フィールドが表示されます。それ以外の場合は、「アクセス・ポリシーの作成 - ステップ 2: 失効するリソースの選択」ページが表示されます。

5. 「アクセス・ポリシーの作成 - ステップ 2: 失効するリソースの選択」で、適用しなくなったアクセス・ポリシーを失効させるかどうかを指定します。

   結果表で、自動的に失効させるリソースのチェック・ボックスを選択します。

   「続行」をクリックします。「アクセス・ポリシーの作成 - ステップ 3: リソースの選択 (拒否)」ページが表示されます。

6. 「アクセス・ポリシーの作成 - ステップ 3: リソースの選択 (拒否)」ページを使用して、このアクセス・ポリシーが拒否するリソースを選択します。

   拒否されるリソースを選択するには、まず対応するチェック・ボックスを結果表で選択してリソースを選択します。**「選択済」**リストにリソースを移動するには、**「追加」**をクリックします。プロビジョニングするリソースを選択しなかった場合は、拒否するリソースを少なくとも 1 つを選択する必要があります。プロビジョニングするものと同じリソースを拒否対象に選択すると、プロビジョニングするリソースとしての割当ては解除されます。同様に、前の手順で、すでに拒否するように選択したものと同じリソースをプロビジョニング対象に割り当てると、拒否するリソースとしての割当ては解除されます。拒否対象に選択されているリソースの割当てを解除するには、すでに選択したリソースを「選択済」リストから選択し、**「削除」**をクリックします。

   「続行」をクリックします。

7. **「アクセス・ポリシーの作成 - ステップ 4: グループの選択」**ページが表示されます。

   このページを使用して、グループをアクセス・ポリシーに関連付けます。

8. グループをこのアクセス・ポリシーに関連付けるには、結果表でグループの名前に対応するボックスを選択し、**「追加」**をクリックします。

   目的のグループの名前が**「選択済」**フィールドに表示されます。グループ名を削除するには、**「削除」**ボタンを使用します。

   このアクセス・ポリシーに対してユーザー・グループを指定できます。フィルタ検索ドロップダウン・メニューを使用してユーザー・グループを検索できます。

   結果表で、目的のユーザー・グループに対応するボックスを選択して**「追加」**ボタンをクリックします。ユーザー・グループの名前が選択されます。少なくとも 1 つのユーザー・グループを選択する必要があります。目的のユーザー・グループの名前が**「選択済」**リストに表示されます。

   選択されているユーザー・グループの割当てを解除するには、「選択済」リストでリソースを選択し、**「削除」**をクリックします。**「続行」**をクリックします。

9. 「アクセス・ポリシーの作成 - ステップ 5: アクセス・ポリシーの検証」情報ページが表示されます。このページを使用して、アクセス・ポリシーに対して前の手順で指定した情報を確認します。

10. **「変更」**リンクをクリックすると、ウィザードの関連するステップにジャンプし、以前に指定した情報をそこで変更することができます。

    変更したら、**「続行」**をクリックするとこのページ（ステップ 5）に戻ります。**「続行」**をクリックすると、Oracle Identity Manager にアクセス・ポリシーが作成されます。完了ページに、アクセス・ポリシーの名前と正常に作成されたことが表示されます。

アクセス・ポリシーの管理

Oracle Identity Manager の管理およびユーザー・コンソールを使用すると、既存のアクセス・ポリシーの情報を変更できます。

アクセス・ポリシーを管理するには、次の手順を実行します。

1. 「アクセス・ポリシー」の下の「管理」をクリックします。

   「アクセス・ポリシーの管理」ページが表示されます。

   検索基準フィールドのメニューを使用して、検索結果のソートに使用するアクセス・ポリシーを選択します。ワイルドカードのアスタリスク（*）を基準値として使用すると、選択した属性に任意の値を持つすべてのアクセス・ポリシー・インスタンスを検索できます。**「アクセス・ポリシーの検索」**をクリックします。

   「アクセス・ポリシーの管理」ページに検索結果が表示されます。

2. 目的のアクセス・ポリシーの詳細を表示するには、「アクセス・ポリシー名」リンクをクリックします。

   「アクセス・ポリシー詳細」ページが表示されます。

   このアクセス・ポリシーの変更を終了するには、各選択カテゴリの末尾にある**「変更」**リンクを使用します。

   「変更」リンクをクリックすると、最初に情報を入力した、目的のページにジャンプします。

3. この段階で、このページから情報を変更できます。完了したら**「アクセス・ポリシーの更新」**をクリックします。

   このアクセス・ポリシーが更新され、情報が更新された「アクセス・ポリシー詳細」ページにジャンプします。

12

リソース管理

リソース管理機能では、組織または個人ユーザーに対してリソース・オブジェクトを管理できます。リソース管理には、次の機能があります。

- リソースを検索して詳細を表示する機能
- ユーザーまたは組織に対してリソースの無効化、有効化および失効を行う機能
- リソース管理者およびリソース認可者グループの管理

この章では、リソースの管理に関する次の内容を説明します。

- リソースの管理
- リソースに関連付けられている組織に関する作業
- 「リソース管理者」オプションの使用
- 「リソース認可者」オプションの使用
- 「リソース・ワークフロー」オプションの使用

リソースの管理

次の手順は、リソースの管理方法について説明しています。

注意： 前の手順で説明したとおり、検索の実行時にドロップダウン・リストから値を選択して、それに対応する検索値を入力しなかった場合、エラーが発生します。また、ドロップダウン・メニューから同じ値を 2 度選択すると、エラーが発生します。

リソースを管理するには、次の手順を実行します。

1. **「リソース管理」**、続いて**「管理」**をクリックします。

   「リソース検索」ページが表示されます。

2. ページ上部のボックスを使用して検索基準を選択し、対応する属性を隣のフィールドに入力するか、アスタリスク（*）をワイルドカードとして使用します。**「リソース・タイプ」**および**「ターゲット」**基準を使用するには、対応するボックスで値を選択します。

3. **「検索」**をクリックします。

   結果表が表示されます。

4. リソースの名前をクリックします。たとえば、**「Oracle Identity Manager ユーザー」**という名前のリソースを選択します。

   「リソースの詳細」ページが表示されます。

5. リソースに関する詳細情報を表示するには、メニューを使用します。

   その他の詳細情報には、次のオプションがあります。

   - このリソースに関連付けられた組織
   - リソース管理者
   - リソース認可者

リソースに関連付けられている組織に関する作業

組織に関連付けられているリソースの、有効化、削除および失効を行うことができます。組織に対して複数回プロビジョニングされたリソースについては、マッピング・カテゴリを決定することもできます。

リソースに関連付けられている組織に関する操作を行うには、次の手順を実行します。

1. **「このリソースに関連付けられた組織」**オプションを選択します。

   「このリソースに関連付けられた組織」ページが表示されます。

2. ラジオ・ボタンを使用して、関連付けられている組織のリストをフィルタします。

   「すべて」ラジオ・ボタンを選択すると、すべての組織が一覧表示されます。**「ステータス別」**ラジオ・ボタンを選択すると、**「リソース・ステータス」**列の組織がフィルタされます。リソースに関連付けられている組織は**「組織名」**列に一覧表示されます。この場合、「リソース・ステータス」には、一覧表示された各組織に対してプロビジョニングされているリソースが示されます。組織に対応するリソースを変更するには、次のいずれかを実行します。

   - 有効化
   - 無効化
   - 失効

   「識別子」列の値は、マップ記述フィールドを使用して Oracle Identity Manager Design Console の「Process Definition」フォームからマップできるフィールド・タイプに対応しています。同一のリソースが同一の組織に複数回プロビジョニングされている場合に、こ

の値から、定義されているマッピング・カテゴリ（**「プロセス・タイプ」**、**「組織名」**または**「リクエスト・キー」**）を区別できます。

「リソース管理者」オプションの使用

「リソースの詳細」ページで**「リソース管理者」**オプションを選択します。**「リソース管理者」**ページに、このリソースに管理者として割り当てられているグループの名前が表示されます。このページには、**「書込み権限」**と**「削除権限」**の各権限も表示されます。これらは管理者グループが（リソース・パラメータではなく）リソースに対して持つ権限です。書込みアクセスのあるグループは、リソースを変更できます。削除アクセスのあるグループは、リソースを削除できます。

次の操作を実行できます。

- リソースの管理者としてのユーザー・グループの割当て
- 新しい管理者グループの作成
- 管理グループの権限の更新

リソースの管理者としてのユーザー・グループの割当て

ユーザー・グループをリソースの管理者として割り当てるには、次の手順を実行します。

1. **「割当て」**をクリックします。

   「管理者の割当て」ページが表示されます。

   このページには、このリソースに割り当てられているすべてのグループ名が表示されます。チェック・ボックスを選択して**「書込み権限」**オプションと**「削除権限」**オプションを有効にし、このリソースにグループを割り当てます。

2. **「割当て」**をクリックします。

   「割当ての確認」ページが表示されます。このページに、このリソースに割り当てられた新しいユーザー・グループが表示されます。

3. **「割当ての確認」**または**「取消」**をクリックします。

   「リソース管理者」ページに、このリソースに関連付けられているすべてのグループ名の一覧が表示されます。この情報は変更できます。

新しい管理者グループの作成

リソースを管理する新しいグループを作成できます。この処理を行う委任管理ウィザードが用意されています。

注意： 新しいグループを作成するユーザーが書込みおよび削除アクセスを持つ他のグループに所属している場合、その他のグループが新しいグループの管理グループになります。これは、新しい組織を作成する場合にも当てはまります。

新しいグループを作成するには、次の手順を実行します。

1. **「新規グループの作成」**をクリックします。

   「管理者の割当て - ステップ 1: 管理者の割当て」ページが表示されます。

   結果表で、管理グループに含める**ユーザー・ログイン**名をクリックして、**「追加」**ボタンをクリックします。

   名前が**「選択済」**表示パネルに表示されます。

   「続行」をクリックするか、**「終了」**をクリックしてウィザードを終了します。

   「管理者の割当て - ステップ 2: 別名の指定」ページが表示されます。

2. 管理者グループのエイリアス名を入力し、**「続行」**をクリックします。

   または、**「戻る」**をクリックして前のページに戻るか、**「終了」**をクリックしてウィザードを終了します。

   「管理者の割当て - ステップ 3: 権限の指定」ページが表示されます。

3. **「書込み」**チェック・ボックスと**「削除」**チェック・ボックスをクリックしてそれぞれの権限を管理者グループに割り当て、**「続行」**をクリックします。

   それ以外の場合は、**「戻る」**をクリックして前のページに戻るか、**「終了」**をクリックしてウィザードを終了します。

   「管理者の割当て - ステップ 4: 委任情報の検証」ページが表示されます。

4. 前の手順で入力した情報を変更するには、目的のカテゴリの**「変更」**リンクをクリックします。

   対応するステップのページが表示されます。

   変更を確認して「続行」をクリックします。または、**「戻る」**をクリックして前のページに戻るか、**「終了」**をクリックしてウィザードを終了します。

   「リソース管理者」ページが表示されます。新しいグループが**結果**表に追加されます。

管理グループの権限の更新

管理グループの権限を更新できます。

権限を更新するには、次の手順を実行します。

1. **「権限の更新」**をクリックします。

   「リソースの詳細」→「リソース管理者」→「管理者の更新」ページが表示されます。

2. 管理グループの権限設定を変更するには、必要に応じて、書込み権限および削除権限に対応するチェック・ボックスをクリックします。

3. **「更新」**をクリックして変更を実行します。または**「取消」**をクリックします。

   「確認」ページが表示されます。更新した管理グループ名が表示されます。

4. 正しい名前が表示されている場合は**「更新の確認」**をクリックします。それ以外の場合は**「取消」**をクリックします。

「リソース認可者」オプションの使用

どのユーザー・グループにリソースのプロビジョニングを認可するかを決定できます。

「リソース認可者」オプションを使用するには、次の手順を実行します。

1. **「リソースの詳細」**ページで、メニューから**「リソース認可者」**オプションを選択します。

   「リソースの詳細」→「リソース認可者」ページが表示されます。

2. このリソースに認可の優先順位レベルを設定するには、**「優先度を上げる / 下げる」**ラジオ・ボタンを選択します。

3. このリソースの認可者を削除するには、該当する**「グループ名」**チェック・ボックスを選択して、**「削除」**をクリックします。

4. リソースを認可するユーザー・グループをさらに追加するには、**「割当て」**をクリックします。

   「リソースの詳細」→「リソース認可者」→「認可者の割当て」ページが表示されます。

5. 目的のグループ名のチェック・ボックスを選択して**「割当て」**をクリックするか、**「取消」**をクリックします。

   「確認」ページが表示されます。

6. 正しければ**「割当ての確認」**を、正しくなければ**「取消」**をクリックします。

   「リソースの詳細」→「リソース認可者」ページが表示されます。このリソースに割り当てた**グループ名**が**結果**表に追加されることに注意してください。

「リソース・ワークフロー」オプションの使用

グラフィカル・ワークフロー・ビジュアライザ・ツールは、タスク・シーケンスのビジュアル表示、依存性などのワークフロー定義コンポーネントを提供します。ビジュアル表示されるのは、ワークフローの概要とリレーションシップ、およびフローを構成するタスク・コンポーネントです。ワークフロー・ビューは編集および印刷できます。

グラフィカル・ワークフロー・ビジュアライザ・ツールには、「承認」と「プロビジョニング」の 2 つのプロセス・タイプが表示されます。通常は**「承認」**タイプのプロセスを使用して、Oracle Identity Manager リソースのユーザーや組織へのプロビジョニングを承認します。プロビジョニング・プロセスと異なり、承認プロセスを構成しているタスクは、通常、手動で完了する必要があります。**「プロビジョニング」**タイプのプロセスは、Oracle Identity Manager リソースをユーザーや組織にプロビジョニングするために使用します。

注意： ワークフロー・ビジュアライザの Nexaweb アプレットにアクセスするには、Java 仮想マシン 1.4.2.*xx* を使用するように Web ブラウザを設定する必要があります。

この項では、次の内容について説明します。

- ワークフロー・ビジュアライザの起動
- ドラッグ・アンド・ドロップの使用
- 「表示オプション」の使用（メニュー項目）
- タスク・ノードの使用（右クリック・メニュー）
- 展開ノードの使用（レスポンス・サブツリー）
- ワークフロー定義の「プロビジョニング」イベント・タブの使用
- タスク詳細へのアクセス

ワークフロー・ビジュアライザの起動

ビジュアライザを起動するには、次の手順を実行します。

1. **「リソースの詳細」**ページで、プルダウン・メニューから**「リソース・ワークフロー」**オプションを選択します。

   「リソースの詳細」→「リソース・ワークフロー」ページが表示されます。このページには、リソース名と、このリソースに対して使用するワークフロー定義のすべての名前の一覧を含む表が表示されます。

2. ワークフロー定義をグラフィック・フローチャートにレンダリングするには、目的のワークフロー名のリンクをクリックします。

   新しい Web ブラウザ・ウィンドウが起動され、ワークフロー定義のグラフィック表示が示されます。

ワークフロー・ビジュアライザの使用

承認ワークフロー定義は、承認プロセス全体を表す 1 つのフローとして表示されます。承認プロセスには独自のフォームがないので、ワークフロー詳細ヘッダーにはフォームに関する情報は表示されません。ワークフロー・ビジュアライザには、**「プロセス・フォームの名前」**情報フィールドは表示されません。

ワークフロー・ビジュアライザの**情報フィールド**は次のとおりです。

フィールド名	説明
ワークフロー名	プロセス定義の名前。
リソース	「オブジェクト名」の名前（承認またはプロビジョニングされたリソース・オブジェクト）。
ワークフロー・タイプ	「プロセス定義」タイプの名前（「承認」または「プロビジョニング」）。タイプは、ワークフローがリソースのデフォルトかどうかも示しています。

ワークフロー・ビジュアライザ・**ツールバーのメニュー項目**は次のとおりです。

フィールド名	説明
表示オプション	**不明レスポンス・コードの表示 :** 不明レスポンス・コードは、ワークフローのすべてのタスクに対して定義されています。ワークフローのロジックとして使用されることはありません。ただし、それら（不明レスポンス・コード）を表示するかどうかを選択できます。 **画面上のアダプタ名の表示 :** 自動化されたアダプタの名前を表示できます。 **取消しタスクの表示 :** 画面上のタスクの取消しタスクを表示することができます。 **リカバリ・タスクの表示 :** 画面上のタスクのリカバリ・タスクを表示することができます。
イメージの生成	このオプションを使用すると、ワークフロー・ビューをイメージとして保存し、後で印刷することができます。このメニュー項目をクリックすると、新しいブラウザ・ウィンドウが起動され、JPEG にフォーマットされたイメージが表示されます。フローチャートの、表示領域のスクロール制限のために非表示になっている部分も含めて、ワークフローの全体が表示されます。イメージを右クリックして、メニューから**「ピクチャを別名で保存 ...」**を選択すると、Web ブラウザの標準機能を使用して、マシン上にローカルにイメージを保存することができます。
ワークフローのリロード	このオプションを選択すると、ワークフロー・ビューが更新されます。

フィールド名	説明
凡例	このオプションを選択すると、ワークフロー定義のフローチャートを作成するために使用されるすべてのビジュアル・コンポーネントの説明が表示されます。 **マーカー** マーカー・ノードは、特別な条件を示す位置マーカーを表します。次のような条件があります。 開始ポイント : このマーカーはワークフロー内の論理的な始点を示します。ワークフロー定義内の実際のタスクではありません。 ページ参照 : このマーカーは、ワークフロー・チャートの別の場所にすでに描画されているタスク・ノードを表します。別のタスクへの接続を表示しても、ワークフロー・ビューにリンクが錯綜して表示されることがありません。 レスポンス・サブツリー : レスポンス・サブツリー（展開ノード）は、レスポンス・ノードの重要なサブツリーを非表示にすることで、ワークフローを操作しやすく保ちます。展開ノード・マーカーをダブルクリックすると、レスポンスが表示された状態でワークフロー・ビューが再描画されます。 **タスク** タスク・ノードはワークフロー内のタスクを表します。次のタスクがあります。 手動タスク : 手動タスクは、タスクが完了するためにユーザー・アクションが必要な、プロセス内のすべてのタスクを表します。承認プロセスは通常、手動タスクを含みます。 自動化タスク : 自動化タスクは、ユーザーの操作が必要なくても完了できるプロセス内のすべてのタスクを表します。自動化タスクには、常にプロセス・タスク・アダプタが必要です。プロビジョニング・プロセスは通常、自動化タスクを含みます。 **レスポンス** レスポンス・ノードは、タスク上で定義されているレスポンス・コードを表します。レスポンス・ノードは、内部の実際のレスポンス・コードを表示します。レスポンス・コードは、タスク上の、レスポンスが設定されているステータスに基づいています。 タスクを完了 : プロセス・タスクは完了しており、緑で示されます。 タスクを却下 : プロセス・タスクは却下されており、赤で示されます。 タスクを取消し : プロセス・タスクは取り消されており、青で示されます。 **リンク** タスク・ノードやレスポンス・ノードは矢印線で結ばれ、ワークフローの流れを示します。リンクの色は、結ばれている 2 つのノードのリレーションシップのタイプを示します。 初期タスク : ワークフロー定義内の最初のプロセス・タスクです。 レスポンス生成済タスク : 現行のタスクが完了したときにトリガーされるプロセス・タスクと定義されます。一般に、新しいプロセス・タスクがトリガーされるのは、条件付きタスクがプロセス・タスクの実行と組み合せて特定のレスポンス・コードを受け取る場合です。 リカバリ・タスク : 現行のタスクが却下されたときにトリガーされるプロセス・タスクと定義されます。 取消しタスク : 現行のプロセス・タスクが取り消されたときにトリガーされるプロセス・タスクと定義されます。 依存タスク : 依存タスクは、別のプロセスに依存するプロセス・タスクとして定義されます。Oracle Identity Manager では、このタイプのタスクは、依存する別のプロセス・タスクが終了しないと開始できません。

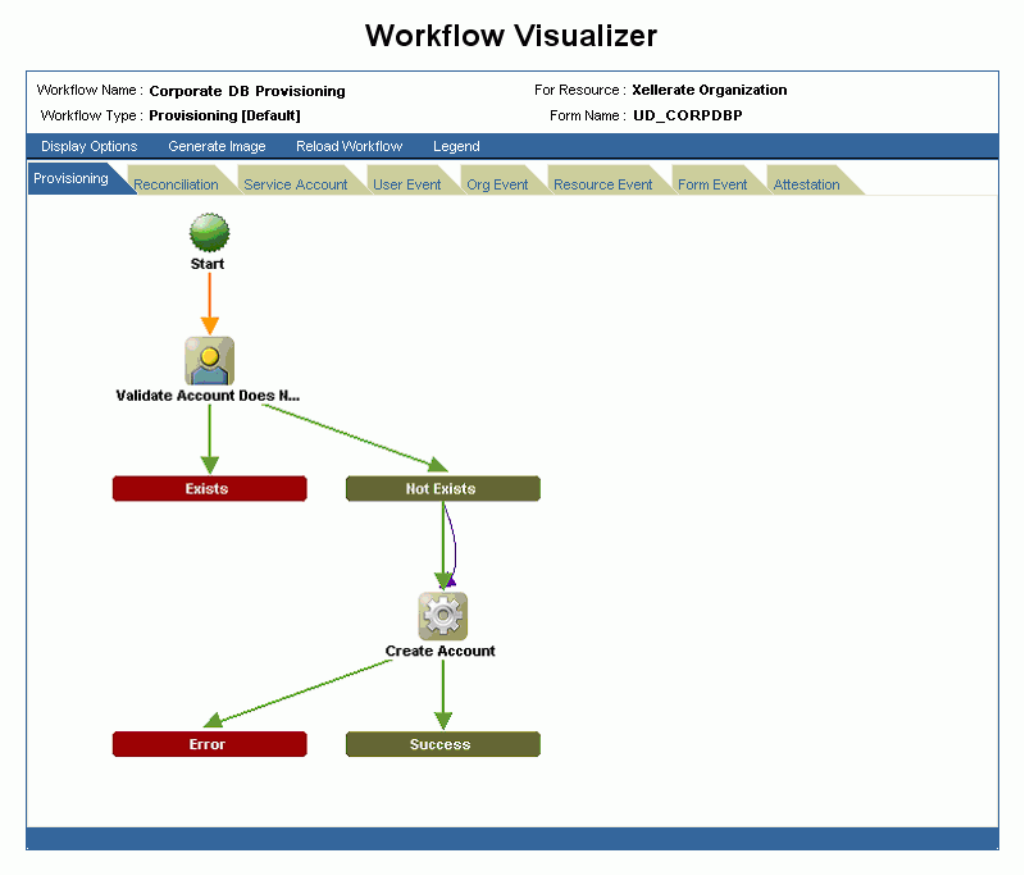
ユーザー・インタフェース

ワークフロー・ビジュアライザでは、次の機能を使用してワークフロー・ビューを操作できます。

- ドラッグ・アンド・ドロップ
- 表示オプション（メニュー項目）
- タスク・ノード（右クリック・メニュー）
- 展開ノード（レスポンス・サブツリー）

たとえば、Corporate DB Provisioning ワークフロー定義が表示されているとします。イベント・タブを選択すると、そのイベントに対応するタスクのシーケンスが表示されます。イベント・タブの詳細は、12-12 ページの「ワークフロー定義の「プロビジョニング」イベント・タブの使用」で説明しています。

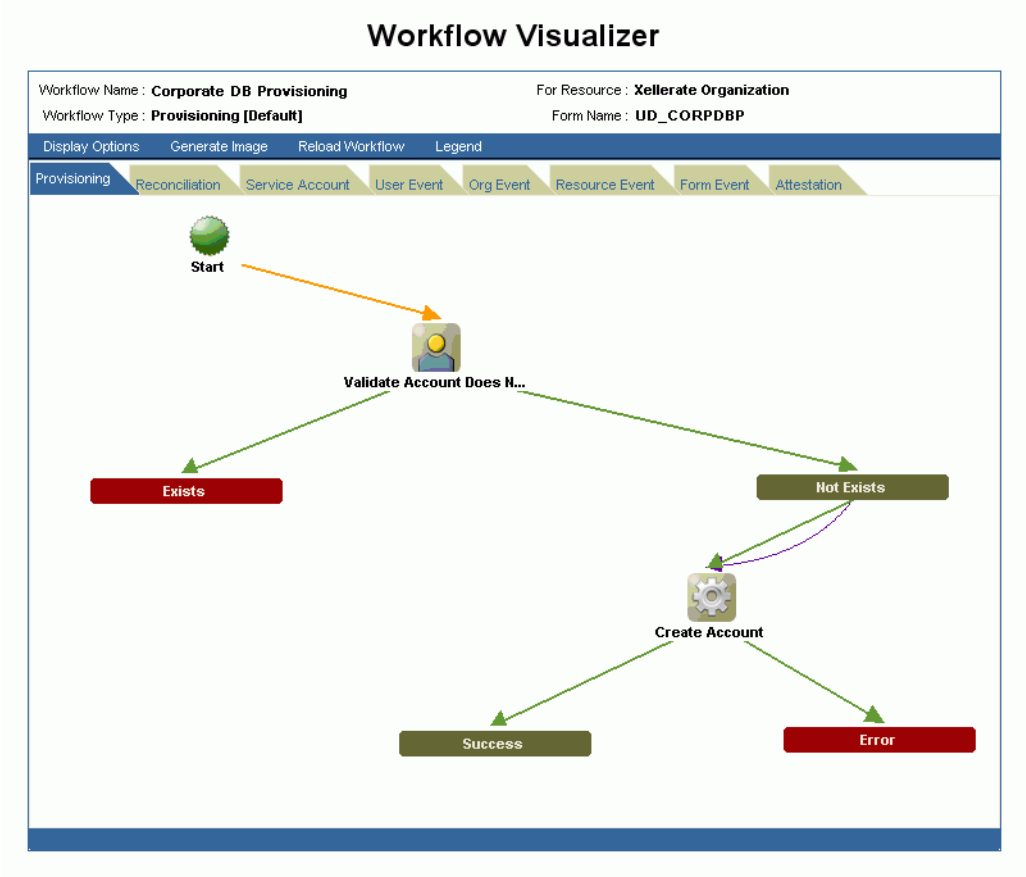
図 12-1 ワークフロー・ビジュアライザの使用



ドラッグ・アンド・ドロップの使用

グラフィック・ワークフローは、ワークフロー定義を構成しているアイコンをドラッグ・アンド・ドロップすることによって、ワークフロー・ビュー内の任意の位置に配置を変更できます。アイコン・コンポーネントを移動しても、矢印で結ばれているリンクは途切れません。

図 12-2 ワークフロー・ビジュアライザでのドラッグ・アンド・ドロップの使用



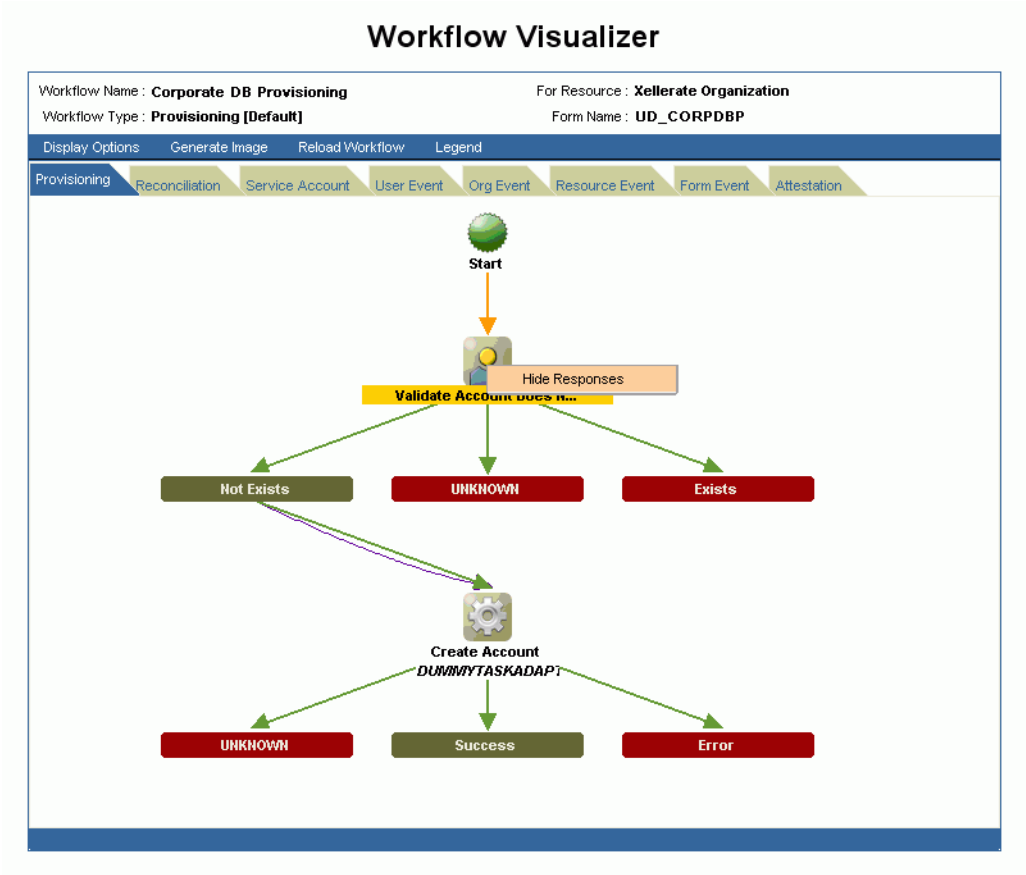
「表示オプション」の使用（メニュー項目）

「**表示オプション**」ツールバー・メニュー項目を使用して、**不明レスポンス・コード**、**アダプタ名**、**取消しタスク**および**リカバリ・タスク**の表示と非表示を切り替えることができます。ワークフローは自動的に更新され、選択した基準に基づいてワークフローが再描画されます。

タスク・ノードの使用（右クリック・メニュー）

タスク・ノードを右クリックすると、**「レスポンスを非表示」**オプションが表示されます。このオプションをクリックするとレスポンス・サブツリーが閉じ、展開ノードに変わります。タスク・ノード・ラベルが黄色く強調表示され、閉じていることを示します。ノードが閉じている間は、**「レスポンスを非表示」**アクション・オプションは表示されません。

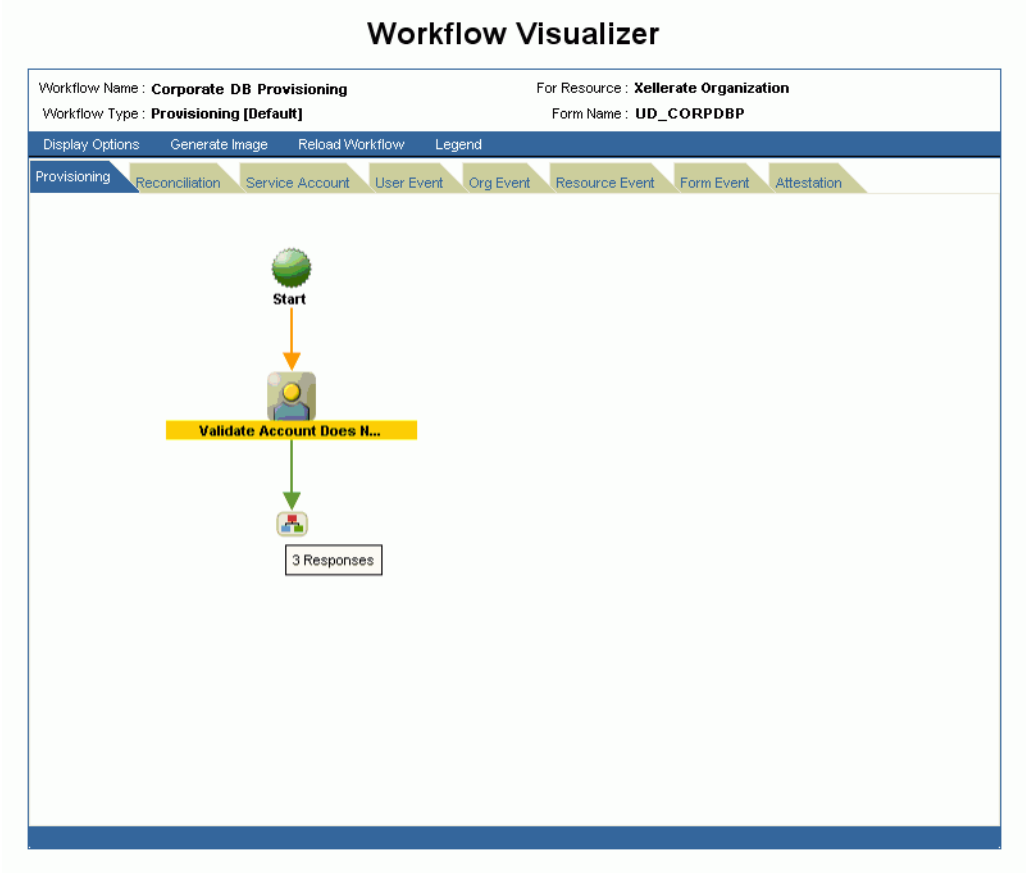
図 12-3 タスク・ノードの使用（右クリック・メニュー）



展開ノードの使用（レスポンス・サブツリー）

5 つ以上のレスポンス・コードを含み、**不明レスポンス・コード**を含まないタスク・ノードは、フローチャートにレスポンスとともに描画されることはありません。レスポンス・サブツリー全体ではなく展開ノードが表示されます。展開ノードをダブルクリックすると、フローチャートが再描画され、親タスク（ノード）のレスポンス・サブツリーが表示されます。タスク・ノードのラベルが黄色く強調表示されます。

図 12-4 ワークフロー・ビジュアライザの閉じたレスポンス・サブツリー



注意： カーソルを展開ノードに重ねると、関連付けられているレスポンス・コードの数が表示されます。**不明レスポンス・コード**は、デフォルトでは非表示です。

ワークフロー定義の「プロビジョニング」イベント・タブの使用

ワークフロー定義の「プロビジョニング」は、関連する論理フローのイベント・タブとともに表示されます。イベント・タブは、ワークフロー定義の特定のイベントの、各種のタスク・シーケンスを表します。イベント・タブをクリックすると、プロセスのワークフロー・イベントに対応するタスクがタブに表示されます。フローチャートを任意の表示に配置することができます。そのワークフロー・イベントに定義されたタスクがない場合は、タブの表示は空白です。そのワークフロー・イベント・タイプに複数のタスク・シーケンスがある場合、タブにはプルダウン・メニューが表示され、表示するプロセス・フローチャートを選択することができます。

「プロビジョニング」タブ

「プロビジョニング」タブには、リソースをプロビジョニングするタスクが表示されます。プロセス・タイプが**「プロビジョニング」**の場合、プロセス・フローチャートには、リソースをプロビジョニングするために必要なすべてのタスクが表示されます。

「リコンシリエーション」タブ

「リコンシリエーション」タブには、**「リコンシリエーションの挿入を受信しました」**または**「リコンシリエーションの更新を受信しました」**のマーカー・タスクが挿入されたプロビジョニング・プロセスのリコンシリエーション・イベントが表示されます。これらのタスクは、アダプタをアタッチされることにより、プロビジョニング・アクションを開始することができます。アダプタがアタッチされていない場合は、そのタスクには**「イベントが処理されました」**のレスポンス・コードが割り当てられます。このレスポンス・コードに基づいて、その他のプロビジョニング・プロセス・タスクを生成して、リコンシリエーション・イベントによるプロビジョニング・フローを開始することができます。

「サービス・アカウント」タブ

「サービス・アカウント」タブには、ユーザー用のサービス・アカウント（管理者）のすべてのプロビジョニング・プロセスが表示されます。ユーザーに対してサービス・アカウントがプロビジョニングされると、Oracle Identity Manager はそのユーザーの ID からサービス・アカウントへのマッピングを管理します。リソースが失効されるかユーザーが削除されても、サービス・アカウントのプロビジョニング・プロセスは取り消されません。そのかわりに、プロビジョニング・プロセスに、ユーザーからサービス・アカウントへのマッピングを削除するタスクが挿入されます。サービス・アカウントのプロビジョニング・プロセスは、**「サービス・アカウントが変更されました」**、**「サービス・アカウント・アラート」**および**「サービス・アカウントが移動されました」**です。

「ユーザー・イベント」タブ

「ユーザー・イベント」タブには、パスワードまたはユーザー ID を更新するなどの、ユーザー・レコードに対する変更に対応するワークフローが表示されます。

「組織イベント」タブ

「組織イベント」タブには、名前、親の名前、リソースのプロビジョニング先組織の鍵またはリソースのプロビジョニング先ユーザーの組織の鍵の更新など、組織のレコードに対する変更に対応するワークフローが表示されます。

「リソース・イベント」タブ

「リソース・イベント」タブには、有効化または無効化など、プロビジョニングされたリソース・インスタンスの状態変更に対応するワークフローが表示されます。

「フォーム・イベント」タブ

「フォーム・イベント」タブには、プロビジョニングされたリソース・インスタンスのプロセス・フォームにおけるデータ変更に対応するワークフローが表示されます。

「アテステーション」タブ

「アテステーション」イベント・タブには、アテステーション・プロセスにおけるデータ変更に対応するワークフローが表示されます。

タスク詳細へのアクセス

特定のタスクの詳細情報を表示するには、タスクのアイコンをダブルクリックします。タスクの詳細ウィンドウは、Oracle Identity Manager Design Console の「Process Definition」フォームのタスク定義ウィンドウに類似しています。タスクの詳細ウィンドウでは、タスク定義に関する情報が、論理的にグループ化されたタブで表示されます。次のタブがあります。

- **一般 :** このタブには、名前や説明などのタスク情報が表示されます。
- **自動化 :** このタブには、タスク、タスクのステータス、および各種のマッピングの自動化アダプタに関する情報が記載されています。
- **タスクの割当て :** このタブには、タスクの割当て方法とすべての関連情報に関する情報が表示されます。
- **依存先 :** このタブには、選択したタスクの依存先であるすべてのタスクが一覧表示されます。
- **リソース・ステータス管理 :** このタブには、タスク・ステータスとリソース・ステータスの間のマッピングが表示されます。

「一般」タブ

フィールド名	説明
タスク名	プロセス・タスクの名前。
タスクの説明	プロセス・タスクに関する説明です。
タスクの結果	このフィールドは、このタスクのプロセス・アクションを示しています。「**ENABLED**」、「**DISABLED**」または「**NONE**」のいずれかです。リソースへのユーザーのアクセスについて、プロセスは有効化あるいは無効化されます。アクションが無効だと、関連タスクもすべて無効化されます。「**NONE**」アクションは、このタスクが特定のプロセス・アクションに関連付けられていないことを意味します。
再試行間隔	このフィールドは、このプロセス・タスク・インスタンスが追加されるまでに待機する時間を分単位で示します。
再試行の制限	このフィールドは、却下されたタスクを Oracle Identity Manager が再試行する回数を示します。
条件付きタスク	このフィールドは、プロセス・タスクに対して満たす必要がある条件を指定しています。
リカバリの完了	このフィールドは、生成されたすべてのリカバリ・タスクの完了時に、現行のプロセス・タスクのステータスが Oracle Identity Manager によって「**却下**」から「**完了に失敗**」に変更されることを示します。このフラグは、依存している他のプロセス・タスクをトリガーします。
保留中の取消しを許可	このフィールドは、ステータスが「**保留**」のときにプロセス・タスクを取り消せるかどうかを示します。
複数を許可	このフィールドは、単一のプロセス・インスタンス内で、タスクを複数回挿入することが許可されているかどうかを示します。
ワークフロー完了に必須	このフィールドは、プロセス・タスクが「**完了**」ステータスを持っていない場合、プロセスを完了することができないことを示します。
手動挿入	このフィールドは、現行のプロセス・タスクをユーザーがプロセスに手動で追加できるかどうかを示します。

「自動化」タブ

プロビジョニング・プロセスに所属するタスクは、通常、自動化されています。

注意： タスクが自動化されていない場合、このタブは表示されません。

フィールド名	説明
アダプタ名	アダプタの名前。
アダプタ・ステータス	アダプタが完全にマッピングされているかどうかを示します。
アダプタ変数	アダプタ内のユーザー定義のプレースホルダで、アダプタ・タスクが使用する実行時アプリケーション・データを含みます。
マップされていますか。	アダプタ変数がマッピングされているかどうかを示します。

「タスクの割当て」タブ

このタブは、プロセス・タスクの割当てルールを指定します。ルールは、プロセス・タスクの割当て方法を定めます。

タスク割当てルールは承認プロセスのタスクに関連付けられます。これらのタスクは通常、手動で完了されるためです。プロビジョニング・プロセスに所属するタスクは、通常、自動化されています。結果的に、タスク割当てルールは必要とされません。

「依存先」タブ

このタブには、現行のタスクの依存先タスク名が表示されます。

「リソース・ステータス管理」タブ

リソースには、事前定義されたプロビジョニング・ステータスがあり、リソース・オブジェクトがターゲットのユーザーや組織にプロビジョニングされるのに応じて、そのライフサイクルを通じて様々なステータスを表します。このタブには、プロセス・タスクのステータス（**「タスク・ステータス」**）と、その割当て先リソースのプロビジョニング・ステータス（**「リソース・ステータス」**）の間のリンクが表示されます。

フィールド名	説明
タスク・ステータス	事前定義されたプロビジョニング・ステータス・タイプの 1 つ。
リソース・ステータス	ステータスは、**「待機中」**、**「プロビジョニング」**、**「なし」**、**「準備完了」**、**「有効」**、**「無効」**、**「失効」**、**「プロビジョニング済」**および**「情報の指定」**のいずれかです。

13

デプロイメント・マネージャ

デプロイメント・マネージャは Oracle Identity Manager の設定のエクスポートとインポートを行うツールです。デプロイメント・マネージャを使用すると、Oracle Identity Manager の設定を構成しているオブジェクトをエクスポートすることができます。複数の環境の間で Oracle Identity Manager の各項目を交換するには、デプロイメント・マネージャを使用します。通常、1 つのデプロイメントからもう 1 つに、たとえばテスト・デプロイメントから本番デプロイメントに設定を移行したり、システムのバックアップを作成する際にデプロイメント・マネージャを使用します。

重要 : デプロイメント・マネージャを使用するには、Oracle Identity Manager の管理およびユーザー・コンソールを実行するコンピュータに JRE 1.4.2 がインストールされている必要があります。

設定内のオブジェクトの一部または全部を保存することができます。これにより、テスト環境で設定を開発およびテストし、完了した項目を後で本番環境にインポートすることができます。オブジェクトと、そのすべての依存オブジェクト、すべての関連オブジェクトを同時にインポートおよびエクスポートすることも、一部のみをエクスポートすることもできます。

この章の内容は、次のとおりです。

- デプロイメント
- デプロイメントのインポート
- ベスト・プラクティス

デプロイメント

Oracle Identity Manager システムからオブジェクトをエクスポートして、XML ファイルに保存することができます。デプロイメント・マネージャにあるエクスポート・ウィザードを使用して、エクスポート・ファイルを構築することができます。オブジェクトをタイプごとに追加します。一度に 1 タイプずつ、たとえばユーザー・グループ、フォーム、プロセスなどの順で追加します。子オブジェクトや依存性を持つオブジェクトを選択している場合は、追加するかどうかを選択できます。1 つのタイプを追加したら、戻って別のオブジェクトを XML ファイルに追加します。必要なオブジェクトをすべて追加し終えたら、デプロイメント・マネージャを使用して 1 つの XML ファイルにそれらを保存します。

注意： ユーザー定義のフィールドが特定のリソース・オブジェクトに関連付けられている場合、エクスポート・プロセスの際に、次のいずれかのイベントが発生します。

- ユーザー定義フィールドに値（入力された情報）が含まれている場合、デプロイメント・マネージャはそれを依存性とみなします。
- ユーザー定義フィールドに値が含まれていない場合（フィールドは空）、デプロイメント・マネージャはそれを依存性とみなしません。

デプロイメントをエクスポートするには、次の手順を実行します。

1. Oracle Identity Manager の管理およびユーザー・コンソールのメニューで、**「デプロイメント管理」**をクリックし、続いて**「エクスポート」**をクリックします。

   デプロイメント・マネージャが開き、エクスポート・ウィザードのオブジェクトの検索画面が表示されます。

2. オブジェクトの検索画面で、メニューからオブジェクト・タイプを選択し、検索基準を入力します。

   条件フィールドを空のままにしておくと、自動的にアスタリスクが表示され、選択されたタイプのすべてのオブジェクトを検索します。

3. **「検索」**をクリックすると、選択したタイプのオブジェクトが検索されます。

   オブジェクトを選択するには、チェック・ボックスをクリックします。

4. **「子の選択」**をクリックします。

   「子の選択」画面が表示されます。「子の選択」画面に、選択されたオブジェクトとそのすべての子が表示されます。

5. エクスポートする子を選択します。

   項目を選択または削除するには、そのチェック・ボックスをクリックします。

   「戻る」をクリックすると、オブジェクトの検索画面に戻ります。

6. **「依存性の選択」**をクリックします。

   「依存性の選択」画面が表示されます。「依存性の選択」画面に、選択されたオブジェクトが必要とするすべてのオブジェクトが表示されます。

7. エクスポートする依存性を選択します。

   項目を選択または削除するには、そのチェック・ボックスをクリックします。

   「戻る」をクリックすると「子の選択」画面に戻ります。

8. **「確認」**をクリックします。

   「確認」画面が表示されます。

9. 必要な項目がすべて選択されていることを確認し、**「エクスポート用に追加」**をクリックします。

   「エクスポート用に追加」をクリックしても、まだエクスポート・ファイルに項目をさらに追加することができます。

   「戻る」をクリックすると、オブジェクトの検索画面に戻ります。

   「さらに追加」画面が表示されます。

10. ウィザードを使用して項目をさらに追加し、完了したらウィザードを終了します。

    目的のラジオ・ボタンを選択し、**「OK」**をクリックします。

    「さらに追加」を選択した場合は、手順 2 から 7 を繰り返します。それ以外の場合は、「エクスポート」画面が表示されます。

    「エクスポート」画面に現行のエクスポート項目が表示されます。選択項目の隣にあるアイコンは、選択されているオブジェクトのタイプを示しています。**サマリー情報**ペインに、エクスポートするオブジェクトが表示されます。「未選択の依存性」ペインに、エクスポートしないことを選択したオブジェクトのすべての依存性または子が表示されます。

11. エクスポート・ファイルに変更を加えるには、次の手順を実行します。

    - フォームをクリアするには**「リセット」**をクリックします。
    - アイコン定義を表示するには**「凡例」**をクリックします。
    - **「オブジェクトの追加」**をクリックしてウィザードを再起動し、エクスポート・ファイルにさらに項目を追加します。

    オブジェクトを「現在の選択」リストから削除するには、次の手順を実行します。

    - 削除するオブジェクトを右クリックし、ショートカット・メニューから**「削除」**を選択します。オブジェクトに子オブジェクトがある場合、一度にすべて削除するには、ショートカット・メニューから**「子も含めて削除」**を選択します。
    - **「削除」**をクリックして確認します。オブジェクトが、選択した項目の子または依存性の場合は、**「未選択の子」**または**「未選択の依存性」**リストに追加されます。

    オブジェクトを**「未選択の子」**または「未選択の依存性」リストから**「現在の選択」**リストに戻すには、オブジェクトを右クリックして、**「追加」**を選択します。クリックして確認します。

12. **「エクスポート」**をクリックします。

    説明の追加ダイアログ・ボックスが表示されます。

13. ファイルの説明を入力します。

    この説明は、ファイルがインポートされるときに表示されます。

14. **「エクスポート」**をクリックします。

    「別名保存」ダイアログ・ボックスが表示されます。

15. ファイル名を入力します。

    ファイルを探すためにブラウズすることができます。

16. **「保存」**をクリックします。

    エクスポートに成功したことを示すダイアログが表示されます。

17. **「閉じる」**をクリックします。

デプロイメントのインポート

デプロイメント・マネージャを使用して、XML ファイルに保存したオブジェクトを Oracle Identity Manager システムにインポートすることができます。XML ファイルの全部または一部をインポートすることも、複数の XML ファイルを同時にインポートすることもできます。デプロイメント・マネージャは、インポートするオブジェクトの依存性が、インポート時に、または使用するシステムで確実に利用できるかどうかをチェックします。インポート中、システム内のオブジェクトをインポート中のオブジェクトと置換えできます。たとえば、システムのグループを XML ファイル内で指定されているグループと置換えできます。

この項では、次の内容について説明します。

- スケジュール済タスクの再インポート時のデプロイメント・マネージャの動作
- XML ファイルのインポート

注意： メニュー項目への参照を含むデータをインポートする場合は、前もってターゲット・システムにメニュー項目を作成しておく必要があります。

スケジュール済タスクの再インポート時のデプロイメント・マネージャの動作

通常の状況では、スケジュール済タスクを Oracle Identity Manager 環境にインポートし、実際の本番環境に合せて後から値を変更することになります。ただし、同じ Oracle Identity Manager サーバーに同一のスケジュール済タスクをインポートするのが 2 回目である場合、デプロイメント・マネージャはデータベースにある属性値を上書きしません。その場合、デプロイメント・マネージャは再インポートした XML ファイルの属性値を、対応するデータベース内の属性値と比較します。

次の表に、スケジュール済タスクの再インポートにおけるデプロイメント・マネージャの動作についてまとめます。

スケジュール済タスクに、インポートする XML ファイルにある属性値があるか	データベースに対応する属性値があるか	デプロイメント・マネージャのアクション
はい	いいえ	属性値をデータベースに格納します。
いいえ	はい	データベース内の既存の属性値を削除します。
はい	はい（タイムスタンプ表示でより新しい属性）	データベースには変更がありません。
はい（タイムスタンプ表示でより新しい属性）	はい	最新の属性値でデータベースを更新します。

XML ファイルのインポート

1. 管理およびユーザー・コンソールのメニューで、**「デプロイメント管理」**をクリックし、続いて**「インポート」**をクリックします。
2. ファイルを選択します。

   「インポート」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. **「オープン」**をクリックします。

   「ファイル・プレビュー」画面が表示されます。
4. **「ファイルの追加」**をクリックします。

   「置換」画面が表示されます。
5. 名前を置換するには、上書きする項目に隣接した**「新しい名前」**フィールド内をクリックし、任意の名前を入力します。

   置換できる項目はターゲット・システムに存在する項目のみです。
6. **「次へ」**をクリックします。
7. IT リソース・インスタンスをエクスポートする場合、「IT リソース・インスタンス・データの提供」画面が表示されます。

   それ以外の場合は「確認」画面に切り替わります。
8. 現行のリソース・インスタンスの値を変更して**「次へ」**をクリックするか、**「スキップ」**をクリックして現行のリソース・インスタンスをクリックするか、**「< 新規インスタンス >」**をクリックして新しいリソース・インスタンスを作成します。

   「確認」画面が表示されます。
9. 情報が正確か確認します。

   戻って変更するには**「戻る」**をクリックします。それ以外の場合は**「選択内容の表示」**をクリックします。

   デプロイメント・マネージャの「インポート」画面に現行の選択内容が表示されます。

   「インポート」画面では、現行の選択内容の隣にアイコンが表示されます。アイコンは、選択されているオブジェクトのタイプを示しています。右側のアイコンはアイコンのステータスを示しています。選択されたファイルの名前、インポートするオブジェクトのサマリー情報および置換情報が画面の左側に表示されます。右側には、**「インポートから削除したオブジェクト」**リストに、インポートされない XML ファイル内のすべてのオブジェクトが一覧表示されます。
10. 必要に応じて変更します。
    - フォームをクリアするには**「リセット」**をクリックします。
    - アイコン定義を表示するには**「凡例」**をクリックします。
    - 「現在の選択」リストからオブジェクトを削除するには、削除するオブジェクトをクリックし、ショートカット・メニューから**「削除」**を選択します。続いて**「削除」**をクリックして確認します。

      オブジェクトに子オブジェクトがある場合、一度にすべて削除するには、ショートカット・メニューから**「子も含めて削除」**を選択します。「インポートから削除したオブジェクト」リストに項目が追加されます。
    - 「現在の選択」リストに項目を戻すには、項目を右クリックして、**「追加」**を選択します。

      オブジェクトに子オブジェクトがある場合、一度にすべて追加するには、ショートカット・メニューから**「子も含めて追加」**を選択します。
    - 置換するには**「置換の追加」**をクリックします。

- 別の XML ファイルからオブジェクトを追加するには、**「ファイルの追加」**をクリックして、手順の 2 から 7 を繰返します。
- インポートした情報に関する情報を表示するには**「情報の表示」**をクリックします。

  「情報」画面に、インポートに関する基本情報が表示されます。

  詳細情報を表示するには、**「情報レベル・メッセージの表示」**チェック・ボックスをクリックし、続いて**「メッセージの表示」**をクリックします。**「閉じる」**をクリックして「情報」画面を閉じます。

11. 現行の選択内容をインポートするには、**「インポート」**をクリックします。

    確認のダイアログ・ボックスが表示されます。

12. **「インポート」**をクリックします。

    「インポートに成功しました」ダイアログが表示されます。

13. **「OK」**をクリックします。

    Oracle Identity Manager システムにオブジェクトが追加されます。

ベスト・プラクティス

デプロイメント・マネージャの使用に関する推奨実施案と注意点を次に示します。

> **関連資料 :** デプロイメント・マネージャの使用に関連するベスト・プラクティスについては、『Oracle Identity Manager ベスト・プラクティス・ガイド』を参照してください。

- デプロイメント・マネージャの全機能を有効に使用する上での制限に留意します。
- システム・オブジェクトはエクスポートしないでください。
- 定義データと業務系データは別々にグループ化します。
- フォームのバージョンには一貫した名前を使用します。
- エクスポート時にはわかりやすい説明を入力します。
- インポートを実行する前に、すべての警告を確認します。
- エクスポートを実行する前に、ターゲット・システムで必要な依存性を確認します。
- インポートによるスケジュール済タスク属性への影響に留意します。
- アダプタをコンパイルしてスケジュール済タスクを有効にします。
- エンティティ・アダプタは、重要なマッピングしか伴わずに単独でエクスポートするようにして、必要なマッピングは後から手動で作成します。
- データベースを本番環境にインポートする前に、データベースをバックアップします。
- UDF またはフォームのインポート時には、フォームのバージョンが正しいことを確認します。
- インポートは、システムのアクティビティが低い時間帯に実行します。

14

レポート

現行の運用データと履歴データのどちらにアクセスしているかに基づいて、Oracle Identity Manager を使用して生成できるレポートは、**操作レポートと履歴レポート**に分けられます。これらのレポートには、ユーザーが使用できるリソースが記載されています。

この章の内容は、次のとおりです。

- 操作レポートの概要
- 履歴レポートの概要
- レポートの実行
- レポートの表示
- フィルタ
- 入力パラメータの変更
- CSV エクスポート
- 詳細ページへのリンク
- サード・パーティ製ソフトウェアを使用したレポートの作成

操作レポートの概要

次の各項では、Oracle Identity Manager に付属している操作レポートについて説明します。これらのレポートは、管理者と監査者が、運用やコンプライアンスの用途で使用できます。

リソース・アクセス・リスト
リソースにプロビジョニングされている既存のすべてのユーザーを問合せします。

ポリシー・リスト
指定されたグループのポリシーのリストが表示されます。

ポリシーの詳細
指定されたポリシーに関する詳細が表示されます。

Oracle Identity Manager パスワードの有効期限
ユーザー・パスワードの有効期限の設定が一覧されます。

ユーザー・リソース・アクセス
指定された問合せパラメータに一致するユーザーのアクセス権限を問合せします。

権限のサマリー
各リソース内のステータスごとのユーザー数が一覧されます。

プロセス別のアテステーション・リクエスト
アテステーション・リクエストがプロセスごとに一覧されます。

アテステーション・リクエストの詳細
指定されたアテステーション・リクエストの詳細を返します。

リソース・パスワードの期限切れ
リソース・パスワードが期限切れになるユーザーのリストが返されます。

グループ・メンバーシップ
各グループ内のユーザー数が一覧されます。

アテステーション・プロセス・リスト
定義されているすべてのアテステーション・プロセスが一覧されます。

レビューア別のアテステーション・リクエスト
アテステーション・リクエストがレビューアごとに一覧されます。

グループ・メンバーシップ・プロファイル
ユーザー・グループ・メンバーシップが一覧されます。

履歴レポートの概要

次の各項では、Oracle Identity Manager に付属している履歴データ・レポートについて説明します。これらのレポートは、管理者と監査者が、コンプライアンスやフォレンジック監査の用途で使用できます。

ユーザー・メンバーシップ履歴

ユーザーのグループ・メンバーシップの履歴が表示されます。

ユーザー・リソース・アクセス履歴

アカウントのライフサイクルを通したユーザーのリソース・アクセス履歴が一覧されます。

グループ・メンバーシップ履歴

グループのメンバーシップの履歴が表示されます。

ユーザー・プロファイル履歴

アカウントのライフサイクルを通したユーザーのプロファイル履歴が一覧されます。

リソース・アクセス・リスト履歴

リソースのライフサイクルを通して、プロビジョニングされているすべてのユーザーを問合せします。

レポートの実行

レポートを実行するには、次の手順を実行します。

1. **「レポート」**を展開し、**「操作レポート」**または**「履歴レポート」**をクリックします。

   結果画面に、そのユーザーが使用できるそのタイプのすべてのレポートが一覧表示されます。レポートが一覧表示される表には、次のフィールドがあります。

フィールド	説明
レポート名	操作レポートの一意の名前が表示されます。そのレポートの入力パラメータへのリンクにもなっています。
レポート・コード	レポートの一意の英数字コードです。
レポート・タイプ	管理者がレポートを整理するのに役立つレポート・タイプです。
説明	レポートの簡単な説明です。

2. レポートの名前をクリックして選択します。

   レポート入力パラメータ画面が表示されます。この画面に、レポートの実行に必要な入力パラメータが表示されます。場合により、少なくとも 1 つ以上の入力パラメータ・フィールドが必須フィールドとなります。そうでない場合も、1 つ以上のフィールドに入力しないとレポートを実行できません。

3. レポートに含まれている情報を識別するために必要な情報を入力します。

4. **「送信」**ボタンをクリックすると、レポートが実行されます。

   「レポート表示」ページが表示されます。

レポートの表示

このページには、レポートの内容が表示されます。いくつかの表示形式を使用できます。形式情報は、各レポートに関連付けられているレポート・メタデータに含まれています。表示形式には次のものがあります。

- シンプルな表形式
- セクション形式
- セクション形式（レポート・ヘッダー付き）

デフォルトで各ページに表示されるのは 50 レコードのみです。この制限は、プロパティ・ファイルで変更できます。複数のページがある場合、ページの上部と下部にある**「最初」**、**「前へ」**、**「次へ」**および**「最後」**の各ナビゲーション・リンクがアクティブになります。

フィルタ

フィルタを使用して、レポートの検索基準を絞り込むことができます。デフォルトで、3 つのフィルタがメニューおよびテキスト・フィールドとして表示されます。メニューからデータのタイプを選択して、テキスト・フィールドにフィルタ文字列を入力します。フィルタ・テキスト・ボックスで、ワイルドカード文字のアスタリスク（*）を使用できます。アスタリスクは任意の数の文字を表します。たとえば、「`S*t`」は、「`Slashdot`」や「`Sat`」に一致します。ユーザー・ステータス、従業員タイプなどの参照フィールドを表すフィルタ基準には、値を選択するためのボックスがあります。

フィルタは既存のレポートを絞り込むのみで、新しいレポートを生成することはありません。たとえば、レポートを `[First Name=j*]`（名が「j」で始まるすべてのレコードを返す）という入力パラメータで実行し、`[Last Name=Smith]` で再度フィルタリングした場合、名が「j」で始まり、姓が「Smith」であるレコードのみが返されます。

フィルタ・パラメータとしてユーザー・ステータスが含まれる履歴レポートの場合、検索は履歴データに対して実行されます。たとえば、[ユーザー・ステータス = アクティブ] のフィルタ基準を指定すると、現在無効であっても過去のある時点でアクティブであったすべてのユーザーが返されます。

フィルタを作成して**「フィルタ」**ボタンをクリックすると、結果レポートが同じレポート表示ページに表示されます。フィルタ・メニューとテキスト・ボックスには、入力されたフィルタ値が表示されます。**「消去」**ボタンをクリックすると、フィルタ・フィールドがクリアされます。

入力パラメータの変更

「入力パラメータの変更」ボタンをクリックすると、入力パラメータのページに戻ります。入力パラメータのフィールドには、すでに入力した情報が含まれています。

CSV エクスポート

レポート情報はすべて、CSV（カンマ区切り）ファイル形式でエクスポートすることができます。**「CSV のエクスポート」**ボタンをクリックし、プロンプトで、CSV ファイルをコンピュータ上にローカルに保存するよう選択します。デフォルトのファイル名は `<report code>.csv` です。

詳細ページへのリンク

レポートに表示されるリソース名とユーザー ID には、リンクになっているものがあります。これらのリンクをクリックすると、新しい**詳細ページ**に、このリソースやユーザー ID に関するさらに詳細な情報が表示されます。

サード・パーティ製ソフトウェアを使用したレポートの作成

Oracle Identity Manager は、Crystal Reports などのサード・パーティ製ツールを使用したレポートの作成をサポートしています。サード・パーティ製ツールを使用して、14-2 ページの「操作レポートの概要」に記載されている操作レポートまたは14-3 ページの「履歴レポートの概要」に記載されている履歴レポートを作成できます。

注意： サード・パーティ製ソフトウェアを使用してレポートを作成する方法の詳細は、ソフトウェアのマニュアルを参照してください。

15

アテステーション

アテステーション・タスクは、作成、管理および表示することができます。

この章の内容は、次のとおりです。

- アテステーション・プロセスの設定
- アテステーション・プロセスの作成
- アテステーション・プロセスの管理
- アテステーション・ダッシュボードの使用

関連項目： Oracle Identity Manager の管理およびユーザー・コンソールでのアテステーションの使用の詳細は、付録 A「アテステーションの理解」を参照してください。

アテステーション・プロセスの設定

管理およびユーザー・コンソールのメニュー項目から、アテステーション・プロセスの構成画面にアクセスできます。Oracle Identity Manager 管理者は、この画面を使用して次の操作を実行できます。

- 新しいアテステーション・プロセスの定義
- 既存のプロセスの管理
- 非定型アテステーション・プロセスの開始

メニュー構造

最上位の「**アテステーション**」メニューには、次のリンクがあります。

- 作成
- 管理
- ダッシュボード

これらのメニュー項目は、Oracle Identity Manager 管理コンソールのすべてのメニュー項目を管理する同一の委任管理権限により管理されています。

これらのメニュー項目は定義済ですが、Oracle Identity Manager のグループには割り当てられていません。監査コンプライアンス・コンポーネントがインストールされている場合、それらは Oracle Identity Manager のシステム管理者グループに割り当てられます。

システム制御

アテステーションには次の依存性があります。

- ユーザー・プロファイル監査機能を有効にする必要があります。
- 履歴データは、少なくともプロセス・フォーム・レベルの深さまで収集する必要があります。

監査レベルが必要なレベルより下に設定されている場合、アテステーションに関連するメニュー項目のリンクをクリックすると「アテステーション機能は使用できません」ページが生成され、ユーザーによるアテステーション・プロセスの定義ができなくなります。

監査レベルは `XL.UserProfileAuditDataCollection` というシステム・プロパティに制御されており、アテステーション機能では、この値が少なくとも「リソース・フォーム」に設定される必要があります。

アテステーション・プロセスの作成

次の手順で、アテステーション・プロセスを設定する方法について説明します。

注意： 次の手順では、Oracle Identity Manager 権限モデルが適用されています。このモデルではターゲット（たとえばユーザー）のリストを、ログインしているユーザーが読取りアクセス権を持っているターゲットのみに制限します。

新しいアテステーション・プロセスを作成するには、次の手順を実行します。

1. **「アテステーション」**リンクを展開し、**「作成」**をクリックします。

   「ステップ 1: プロセスの定義」ページが表示されます。

2. フィールドに値を入力して**「次へ」**をクリックします。次の表にフィールドの説明を示します。

フィールド	説明
名前 *	アテステーション・プロセスの一意の名前を示します。名前は、無効化および削除されたアテステーション・プロセスの中で一意である必要があります。
コード	プロセスの識別コード（32 文字以下）。コードは、無効化および削除されたアテステーション・プロセスの中で一意である必要があります。
説明	アテステーション・プロセスの詳細説明です。

3. 「ステップ 2: アテステーションのスコープとレビューアを定義」ページで、次の手順を実行します。

   a. アテステーション・スコープは、アテステーションのターゲットが選択されるアルゴリズムを定義します。最初の 3 つのオプションは**「ユーザー権限のアテステーション」**に対応しており、決定されたユーザーの、財務的に意味のある権限がすべて確認およびアテストされる必要があります。アルゴリズムは、アテステーションを必要とする権限を持つユーザーを（上下関係、グループのメンバーシップまたはユーザーが定義される組織に基づいて）選択する方法を決定します。

      4 つ目のオプションは**「リソース権限のアテステーション」**に対応しています。この場合、ユーザーや、そのユーザーの持つ他の権限に関係なく、特定のリソースへのアクセスはすべてアテストされる必要があります。このためこのオプションでは、アクセスをアテストするリソースを管理者が選択します。

      アテステーション・スコープのタイプは次のいずれかを選択します。

      マネージャにレポートするユーザー

      グループのメンバー

      組織のユーザー

      単一リソースに対するユーザー・アクセス

   b. 選択したアテステーション・スコープの隣にある拡大鏡をクリックして、マネージャ、グループ、組織またはリソースを選択します。

c. 次のアテステーション・レビューアのいずれかを選択します。

各ユーザーのマネージャ

この場合、ターゲット・ユーザー・セットに属するレポートを持つ各マネージャ用に 1 つずつ、複数のアテステーション・タスクを設定できます。

特定のレビューア

このレビューアは、ターゲット・セット全体のレビューアでもかまいません。

d. 前の手順で特定のレビューアを選択した場合は、拡大鏡をクリックしてレビューアを選択します。

e. **「次へ」**をクリックします。「ステップ 3: 管理詳細の定義」ページが表示されます。

4. アテステーション・プロセスに関する次の詳細管理情報を指定します。

- アテステーション・スケジュール
- プロセス所有者
- オプションで、レビューアがアテステーションを拒否した場合の「プロセス所有者」ユーザー・グループへの通知。

「ステップ 3: 管理詳細の定義」ページで、次の手順を実行します。

a. 次のアテステーション・スケジュールのいずれかを選択します。

1 回実行

指定した月数の間隔で実行

指定した日数の間隔で実行

指定した年数の間隔で実行

b. アテステーション・プロセスを、毎月、毎日または毎年といったスケジュールで実行するよう決定すると、選択したオプションのテキスト・ボックスを何回も指定する必要があります。

c. 開始日を選択するために、「開始日」フィールドの隣のカレンダ・アイコンをクリックします。

d. プロセス所有者グループを指定するために、「プロセス所有者」グループ・ボックスの隣の拡大鏡をクリックします。

e. 必要に応じて、**「レビューアがアテステーション・リクエストを拒否した場合、プロセス所有者に電子メール」**ボックスをクリックして選択を解除します。この場合、レビューアがアテステーションを拒否しても、プロセス所有者に通知が送信されません。

f. **「次へ」**をクリックします。「ステップ 4: 確認」ページが表示されます。

5. 「ステップ 4: 確認」ページで、**「プロセスの作成」**をクリックしてアテステーション・プロセスを作成します。次の情報が表示された画面に移動します。

これでアテステーション・プロセス定義を正常に作成できました。

「<processname>」をクリックすると、「アテステーション・プロセスの詳細」ページが表示されます。別のアテステーション・プロセスを作成するには、**「別のアテステーション・プロセス定義を作成」**をクリックします。

「アテステーション・プロセスの詳細」ページの詳細は、「アテステーション・プロセスの管理」を参照してください。

アテステーション・プロセスの管理

アテステーション・プロセスを管理するには次の手順を実行します。

1. **「アテステーション」**リンクを展開し、**「管理」**をクリックします。アテステーションの検索ページが表示されます。
2. アテステーションの検索ページで、管理するアテステーション・プロセスの検索基準を入力します。アテステーション・プロセス名、プロセス・コード、レビューアのタイプ、スコープのタイプまたはプロセス所有者を基準にして検索できます。検索基準を入力したら、**「検索」**をクリックします。結果表に、検索基準に一致するアテステーション・プロセスが表示されます。ログインしている管理者が、権限や、プロセス所有者グループのメンバーであることによって表示を許可されているアテステーション・プロセスのみが表示されます。このページには、削除されたプロセスは表示されません。結果表の列を次の表に示します。

列	説明
プロセス名	プロセスの名前を指定します。
プロセス・コード	アテステーション・プロセス・コード。
データ型	アテストされているデータのタイプです。
スコープ	アテステーション・スコープがマネージャ別、グループ別、組織別またはリソース別のいずれであるかを示します。
最終開始	アテステーション・プロセスが最後に実行されたタイミングを指定します。
最終完了	このプロセスのインスタンスが最後に完了したタイミングを指定します。
次回開始	次に実行されるプロセスがスケジュールされるタイミングを指定します。
ステータス	アテステーション・プロセスが有効であるか無効であるかを示します。

3. アテステーションの検索ページの結果表で、管理するプロセス名のリンクをクリックします。「アテステーション・プロセスの詳細」ページが表示されます。

ここでは次のトピックについて説明します。

- アテステーション・プロセスの編集
- アテステーション・プロセスの無効化
- アテステーション・プロセスの有効化
- アテステーション・プロセスの削除
- アテステーション・プロセスの実行
- アテステーション・プロセス管理者の管理
- アテステーション・プロセス実行履歴の表示

アテステーション・プロセスの編集

アテステーション・プロセスを編集するには次の手順を実行します。

1. 「アテステーション・プロセスの詳細」ページで、**「編集」**をクリックします。

   「アテステーション・プロセスの編集」ページが表示されます。

2. 「アテステーション・プロセスの編集」ページでアテステーション・プロセスに必要な変更を加え、**「保存」**をクリックします。

   「アテステーション・プロセスの編集」ページ上のフィールドは、アテステーション・プロセスの作成用ウィザードに表示されるものと同一です。

アテステーション・プロセスの無効化

プロセスがアクティブである間は、**「無効化」**ボタンが表示されます。アクティブ・プロセスは無効化できます。

アテステーション・プロセスを削除するには次の手順を実行します。

1. 「アテステーション・プロセスの詳細」ページで、**「無効化」**をクリックします。

   プロセスがアクティブである間は、**「無効化」**ボタンのみが表示されることに注意してください。

   「アテステーションの無効化の確認」ページが表示されます。

2. **「アテステーションの無効化の確認」**ページで**「無効化の確認」**をクリックします。

アテステーション・プロセスの有効化

アテステーション・プロセスを有効化できるのは、次の開始時刻が未来で、プロセスが無効化されている場合のみです。

アテステーション・プロセスを有効化するには次の手順を実行します。

1. 「アテステーション・プロセスの詳細」ページで、**「有効化」**をクリックします。

   プロセスが無効である間は、**「有効化」**ボタンのみが表示されることに注意してください。

   「アテステーションの有効化の確認」ページが表示されます。

2. **「アテステーションの有効化の確認」**ページで**「有効化の確認」**をクリックします。

アテステーション・プロセスの削除

アテステーション・プロセスの編集、無効化および削除を実行できるのは、必要な権限を持つプロセス管理者のみです。

アテステーション・プロセスを削除するには次の手順を実行します。

1. 「アテステーション・プロセスの詳細」ページで、**「削除」**をクリックします。

   「アテステーションの削除の確認」ページが表示されます。

2. **「アテステーションの削除の確認」**ページで**「削除の確認」**をクリックします。

アテステーション・プロセスの実行

この機能を使用すると、未スケジュールのアテステーション・プロセスを実行できます。アテステーション・プロセスを実行するには、「アテステーション・プロセスの詳細」ページで**「即時実行」**をクリックします。これにより、アテステーション・スケジュールとは独立してアテステーション・プロセスが開始されます。

未スケジュールのアテステーション・プロセスを開始できるのは、プロセス所有者グループのユーザーのみです。

アテステーション・プロセス管理者の管理

アテステーション・プロセスのための管理グループの追加、削除および更新のタスクは、ユーザーおよび組織のために管理グループを更新するタスクに類似しています。

アテステーション・プロセスの管理者を管理するには、「アテステーション・プロセスの詳細」ページの「追加詳細」ボックスから**「管理者」**を選択します。「アテステーション・プロセスの詳細」→「管理グループ」ページが表示されます。このページを使用して、アテステーション・プロセスのための管理者の追加や削除、および管理者権限の更新を行うことができます。

アテステーション・プロセス定義の権限モデルは次のとおりです。

- アテステーション・プロセス定義を表示するには、ユーザーは次のいずれかである必要があります。
  - 「管理者」において適切な読取り権限を持つグループのメンバー
  - プロセス所有者であるグループのメンバー
- アテステーション・プロセス定義を編集するには、ユーザーは、「管理者」において適切な書込み権限を持つグループのメンバーである必要があります。
- アテステーション・プロセス定義を削除するには、ユーザーは、「管理者」において適切な削除権限を持つグループのメンバーである必要があります。

アテステーション・プロセス実行履歴の表示

アテステーション・プロセスの実行履歴を表示するには、「アテステーション・プロセスの詳細」ページの「追加詳細」ボックスから**「実行履歴」**を選択します。「アテステーション・プロセスの詳細」→「アテステーション・プロセス実行履歴」ページが表示されます。

「アテステーション・プロセス実行履歴」表には次の列があります。

列	説明
リクエスト ID	実行されたアテステーション・プロセス・インスタンスの ID。
スコープ・パラメータ	アテステーション・スコープの選択のために設定されたパラメータ値。
レビューア	アテステーション・プロセスのレビューアの名前。
開始日	リクエストが開始された日付と時刻。
完了日	リクエストが完了した日付と時刻。リクエストが保留中の場合は、「未完了」と表示されます。

アテステーション・ダッシュボードの使用

自分がメンバーであるグループが所有するアテステーション・プロセスの状態を表示するには、アテステーション・ダッシュボードを使用します。アテステーション・ダッシュボードを使用するには、**「アテステーション」**リンクを展開し、**「アテステーション・ダッシュボード」**をクリックします。「アテステーション・ダッシュボード」ページの表に、自分がメンバーであるあらゆるグループが所有するアテステーション・プロセスの状態が示されます。「アテステーション・ダッシュボード」表にある列を次の表に示します。

列	説明
プロセス・コード	アテステーション・プロセス・コード。
プロセス名	プロセスの名前を指定します。アテステーション・プロセス名のリンクをクリックすると、「アテステーション・プロセスの詳細」ページが表示されます。
最終完了	最後のインスタンスが完了する前にインスタンスが実行された日付と時刻。該当するものがない場合、値は「なし」です。これは、アテステーション・リクエストに対応する適切な「アテステーション・リクエストの詳細」ページにユーザーを誘導するリンクです。
現在のリクエスト日	このプロセスの最後のインスタンスが実行された日付と時刻。一度も実行されていない場合、値は「新規」です。これは、アテステーション・リクエストに対応する適切な「アテステーション・リクエストの詳細」ページにユーザーを誘導するリンクです。
現在完了	最後に実行されたインスタンスが完了した日付と時刻です。完了していない場合、値は「保留」です。
全レコード	アテステーションに対して識別されている権限の総数を示します。アテステーション・タスクによって、最後のプロセス・インスタンスの一部と認識されます。
認証済	最後のアテステーション・プロセス・インスタンスで認可された権限の数を指定します。
却下	最後のアテステーション・プロセス・インスタンスで却下された権限の数を指定します。
拒否	最後のアテステーション・プロセス・インスタンスで拒否された権限の数を指定します。
委任済	最後のアテステーション・プロセス・インスタンスで委任された権限の数を指定します。

アテステーション・リクエスト詳細の表示

「アテステーション・ダッシュボード」ページからアクセスできるドリルダウン・ページには、アテステーション・プロセスの特定の実行で処理するすべての権限のアテステーション詳細が表示されます。

アテステーション・リクエスト詳細を表示するには次の手順を実行します。

1. 「アテステーション・ダッシュボード」ページの表に表示された「最終完了」フィールドまたは「現在のリクエスト・ページ」フィールドのリンクをクリックします。

   「アテステーション・リクエストの詳細」ページには、選択したアテステーション・プロセスのリクエスト詳細が、次の列を含む表とともに表示されます。

列	説明
ユーザー	権限がアテスト対象となっているユーザー。データは、アテステーション日現在のユーザー詳細が表示されるポップアップのプロファイル・ページへのリンクです。
リソース	アテストされる権限の基盤であるリソース。データは、アテステーション日現在の、権限のプロセス・フォーム・データが表示されるポップアップ・ページへのリンクです。
記述データ	プロビジョニングされたリソース・インスタンスのための説明データのフィールドです。
アテステーション結果	アテステーションに対して最終的に入力されたレスポンスです。
レビューア	レスポンスを入力したユーザー。データは、現行のユーザー詳細が表示される、ポップアップのプロファイル・ページへのリンクです。
委任パス	権限のアテステーションが委任を経由して実行された場合、この列の「表示」リンクを使用して、「委任パスの詳細」ページを表示することができます。委任が発生しない場合、値は「なし」です。
コメント	レビューア・コメントを表示します。長いコメントは切り捨てられ、ロールオーバーで表示されるツールチップにコメントの全体が示されます。

2. 委任が必要なアテステーション・リクエストには、**「委任パス」**列にリンクが含まれます。

   リンクをクリックすると、「委任パス」ページに、アテステーション・リクエストの委任パスが表示されます。

   「アテストされたデータ」フィールドには、アテストされる権限の詳細が表示されます。値は、ユーザー情報、リソース名および説明データを次の形式で組み合せることによって作成されます。

```
<<User First Name>> <<User Last Name>> [<<User ID>>] - <<Resource Name>> -
<<Descriptive Data>>
```

   表にあるフィールドは次のとおりです。

列	説明
レビューア	アテストする権限が割り当てられたレビューア。データは、現在のユーザー・プロファイル・データがポップアップ表示されるリンクです。
アテステーション結果	レビューアにより行われるアクション。最初のレコードを除き、常に「委任済」です。
アテステーション日	レビューアのアテステーション・レスポンスの日付と時刻。
コメント	レビューア・コメント。長いコメントは切り捨てられ、ロールオーバーで表示されるツールチップにコメントの全体が示されます。

電子メール通知

アテステーション・プロセスの一部として、アテステーション・エンジンは様々な段階で電子メールを関係者に送信します。電子メールの内容は、Oracle Identity Manager の「電子メール定義」ストアの**「一般」**タイプの電子メール・テンプレートを使用して設定できます。

テンプレートでは、フォーム・ユーザーは XELSYSADM と定義されます。これは別のユーザーに変更できます。電子メール・アドレスが、このテンプレートを使用するように選択されたユーザーに対して定義されていることを確認してください。定義されていない場合、通知の送信に失敗することがあります。

次の電子メール通知テンプレートを使用できます。

- **Notify Attestation Reviewer:** アテステーション・タスクがレビューアに割り当てられたときに電子メールを送信するために使用されます。
- **Notify Delegated Reviewers:** アテステーション・タスクがレビューアに委任されたときにレビューアに電子メールを送信するために使用されます。
- **Invalid Attestation Reviewers:** アテステーション・タスクを生成した結果、無効なレビューアが発生した場合に、プロセス所有者グループのユーザーに電子メールを送信するために使用されます。
- **Notify Declined Attestation Entitlements:** レビューアが権限を拒否した場合にプロセス所有者グループのユーザーに電子メールを送信するために使用されます。
- **Attestation Reviewers With No Email Defined:** どのレビューアにも電子メール・アドレスが定義されていない場合に、プロセス所有者グループのユーザーに電子メールを送信するために使用されます。

スケジュール済タスク

「アテステーション・プロセスの開始」と呼ばれるシステムのスケジュール済タスクは、Oracle Identity Manager で定義されているアテステーション・プロセスを調査し、必要なアテステーション・タスクをシステムに作成します。

このスケジュール済タスクの主要な機能は次のとおりです。

- そのまま使用できるスケジュール済タスクが、デフォルトで 30 分間隔で実行されるように設定されています。この値は必要に応じてユーザーが変更できます。
- すべてのアクティブ・アテステーション・プロセスを調査します。
- アテステーション・エンジンの呼出しを開始して、実行する必要があるすべてのアテステーション・プロセス（スケジュールされた次の開始時刻を過ぎているプロセス）を開始します。

16

診断ダッシュボード

この章では、Oracle Identity Manager の診断ダッシュボード機能について説明します。

この章の内容は、次のとおりです。

- 診断ダッシュボードの概要
- 診断ダッシュボードのインストール
- 診断ダッシュボードの使用
- テストの詳細とパラメータ

診断ダッシュボードの概要

診断ダッシュボード・ツールを使用して、Oracle Identity Manager の一部の前提条件を検証し、インストールを確認することができます。

このツールを使用するには、アプリケーション・サーバーと Oracle Identity Manager 環境の適切なシステム管理者権限を持っている必要があります。データベース関連のテストの一部には DBA 権限が必要です。DBA 権限がない場合は、テスト用の URL を DBA に渡して、結果の返送を依頼します。

使用および表示できるテストのリストは、Oracle Identity Manager がインストールされているかどうか、またこのツールや Oracle Identity Manager がどのようなアプリケーション・サーバーにインストールされているか、あるいはインストールされるかに依存します。

診断ダッシュボード・ツールと Oracle Identity Manager は、同一のアプリケーション・サーバーにインストールしてください。

インストールの確認

このツールを Oracle Identity Manager のインストール前、Oracle Identity Manager のインストール直後に使用して、インストールが正常であることを確認し、インストールのステータスをチェックします。

Oracle Identity Manager のインストール前に次のテストが実行されます。

- Microsoft SQL Server の JDBC ライブラリ可用性のチェック
- Microsoft SQL Server の前提条件チェック
- Oracle の前提条件チェック
- 埋込み JMS サーバーのステータス

さらに、次の 2 つのレポートを使用できます。

- Java VM システム・プロパティのレポート
- WebSphere のバージョンのレポート

次のテストは、インストールした Oracle Identity Manager がアプリケーション・サーバー上で使用可能になってからのみ使用できます。

- データベース接続性のチェック
- アカウント・ロックのステータス
- データ暗号化キーの検証
- スケジューラ・サービスのステータス
- Remote Manager のステータス
- JMS メッセージ機能の検証
- ターゲット・システムの SSL トラストの検証
- SSL 診断情報

次の 2 つのレポートも、インストールした Oracle Identity Manager が使用できるようになってからのみ使用できます。

- Oracle Identity Manager のライブラリと拡張機能のバージョンのレポート
- Oracle Identity Manager のライブラリと拡張機能のマニフェストのレポート

これらのテストをいつでも実行して、Oracle Identity Manager インストールのステータスを確認できます。

- バージョン番号の表示
- JVM バージョンの確認
- 新規 Oracle Identity Manager インストールの確認
- データベースの検証
- WebSphere の埋込み JMS のインストールの確認
- データベース暗号化キーの生成

インストール後チェック

インストール後のテストを次に示します。

- データベース暗号化キーの検証
- トラスト・ストアの検証
- SSO 診断 / 検証
- WebSphere での JMS サーバー可用性
- メッセージ機能の検証
- スケジューラの検証
- Remote Manager の検証
- レポート作成のバージョン番号
- パッケージング

診断ダッシュボードのインストール

Oracle Identity Manager 診断ダッシュボード・ツールは、Oracle Identity Manager インストーラとともにインストール CD に収められています。CD-ROM の **Diagnostic Dashboard** ディレクトリに WAR ファイルとして収められています。

診断ダッシュボード・ツールは、Oracle Identity Manager をインストールする前にアプリケーション・サーバーにデプロイすることをお薦めします。

OC4J への診断ダッシュボードのインストール

ここでは、OC4J に診断ダッシュボードをインストールする方法について説明します。

注意： クラスタ化インストールでは、クラスタの各ノードに診断ダッシュボードをインストールする必要があります。

診断ダッシュボードを OC4J サーバーにインストールするには、次の手順を実行します。

1. Oracle 管理およびユーザー・コンソールにログインします。

   `http://xlserver_host_ip:port`

2. 「**Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control へのログイン**」をクリックします。
3. 自分の OC4J Admin ユーザー名とパスワードを使用してログインします。
4. クラスタ化されていないデプロイでは、「グループ」の「OC4J インスタンス」列の下の「**ホーム**」をクリックします。クラスタ化されたデプロイでは、クラスタ・ノードのインスタンス名を選択します。
5. OC4J ホームページにある「**アプリケーション**」をクリックします。
6. 「**デプロイ**」をクリックします。
7. 「**アーカイブはローカル・ホストに存在します。アーカイブを Application Server Control が稼働しているサーバーにアップロードします。**」オプションを選択します。
8. 「**参照**」をクリックして、次のディレクトリにある `XIMDD.war` を選択します。

   `<installer_home>¥dashboard¥`

   「**次へ**」をクリックします。

9. 手順 2 で、アプリケーションの名前（たとえば `XIMDD`）を指定して、手順 3 で「**デプロイ**」をクリックします。

   診断ダッシュボードには次の場所からアクセスできます。

   `http://xlserver_host_ip:port/XIMDD`

JBoss へのデプロイ

Oracle Identity Manager 診断ダッシュボードを JBoss 上にデプロイするには、`XIMDD.WAR` ファイルを次の場所にコピーします。

```
<JBOSS_HOME>/server/default/deploy
```

WebSphere へのデプロイ

Oracle Identity Manager 診断ダッシュボードを WebSphere 上にデプロイするには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールにログインします。
   - アプリケーション・サーバーを起動します。
   - Internet Explorer で、URL（`http://localhost:9090/admin`）を入力します。
2. 「**OK**」をクリックして続行します。

   WebSphere のメイン画面が表示されます。
3. 左メニュー・ペインの「**Applications**」リンクをクリックし、続いて「**Install New Application**」リンクをクリックします。

   「Preparing for the Application Installation」画面が表示されます。
4. WAR ファイルの場所を、Path 属性の値として指定します。「XIMDD」をコンテキスト・ルートとします。
5. 「**Next**」をクリックして続行し、「Generate Default Bindings」画面で「**Next**」をクリックします。

   「Install New Application」画面が表示されます。
6. アプリケーションの名前を XIMDD に変更します。「**Next**」を 2 回クリックします。
7. クラスタまたはサーバーを選択し、**XIMDD.war** のチェック・ボックスを選択し、「**Apply**」をクリックします。
8. 選択したクラスタ / サーバーが「Server」列に表示されるのを確認し、「**Next**」をクリックします。
9. 「**Finish**」をクリックします。

   「Installing...」画面が表示されます。アプリケーションを正常にインストールすると、「**Application XIMDD installed successfully**」というメッセージが表示されます。
10. 「**Save to Master Configuration**」リンクをクリックし、続いて「**Save**」をクリックします。
11. 左メニュー・ペインの「**Applications**」>「**Enterprise Applications**」リンクをクリックします。
12. 「**XIMDD**」チェック・ボックスを選択し、続いて「**Start**」をクリックします。

    ステータス、たとえばインストールされたアプリケーションが正常起動したかどうかが表示されます。

WebLogic へのデプロイ

Oracle Identity Manager 診断ダッシュボードを WebLogic 上にデプロイするには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールにログインします。
   - アプリケーション・サーバーを起動します。
   - Internet Explorer で、次の URL を入力します。

     `http://localhost:7001/console`
2. 左メニュー・ペインの「**Deployments**」リンクをクリックし、続いて左メニュー・ペインの「**Web Application Modules**」リンクをクリックします。
3. 「**Deploy a new Web Application Module**」リンク、続いて「**Upload your file(s)**」リンクをクリックして、XIMDD.war ファイルをアップロードします。
4. WAR ファイルをアップロードする場所に移動します。通常は次の場所です。

   ```
   WL_HOME¥user_projects¥domains¥<your-domain-name>¥
   <your-adminserver-name>¥upload.
   ```
5. 「**Upload**」ボタンをクリックします。

   「**XIMDD.war**」ラジオ・ボタンを選択して、「**Target Module**」をクリックします。
6. 「**Deploy**」ボタンをクリックします。

   次のページに、アプリケーションのデプロイが正常に終了したことが表示されます。

これで、ブラウザを使用して診断ダッシュボードに接続できます。

診断ダッシュボードの起動

デプロイ後は、次の URL テンプレートを使用して診断ダッシュボードにアクセスできます。

```
http://<host>:<port>/XIMDD
```

クラスタ化インストールでは、個別のクラスタ・メンバーに対応するホストとポート番号を使用して、そのクラスタ・メンバーに接続する必要があります。左メニュー・ペインの「**診断ダッシュボード**」リンクをクリックすると、診断ダッシュボードのメイン・ページが表示されます。

診断ダッシュボード・ツールは、ツールがどのアプリケーション・サーバーにデプロイされているかを示します。また、アプリケーション・サーバーに Oracle Identity Manager がすでにインストールされているかどうかも示します。次の表に示したテストは、Oracle Identity Manager がインストールされているかどうか、どのアプリケーション・サーバーが使用されているかに応じて異なります。次の表に、これらのテストの可用性を示します。

テスト名	Oracle Identity Manager がインストールされていない場合の可用性	アプリケーション・サーバー
SQL Server の JDBC ライブラリ可用性のチェック	○	JBoss
SQL Server の前提条件チェック	○	JBoss
Oracle の前提条件チェック	○	WebSphere/WebLogic/JBoss/OC4J
WebSphere の埋込み JMS サーバーのステータス	○	WebSphere
データベース接続性のチェック	×	WebSphere/WebLogic/JBoss/OC4J
アカウント・ロックのステータス	×	WebSphere/WebLogic/JBoss/OC4J
データ暗号化キーの検証	×	WebSphere/WebLogic/JBoss/OC4J

テスト名	Oracle Identity Manager がインストールされていない場合の可用性	アプリケーション・サーバー
スケジューラ・サービスのステータス	×	WebSphere/WebLogic/JBoss/OC4J
Remote Manager のステータス	×	WebSphere/WebLogic/JBoss/OC4J
JMS メッセージ機能の検証	×	WebSphere/WebLogic/JBoss/OC4J
ターゲット・システムの SSL トラストの検証	×	WebSphere/WebLogic/JBoss/OC4J
Java VM システム・プロパティのレポート	○	WebSphere/WebLogic/JBoss/OC4J
WebSphere のバージョンのレポート	○	WebSphere
Oracle Identity Manager のライブラリと拡張機能のバージョンのレポート	×	WebSphere/WebLogic/JBoss/OC4J
Oracle Identity Manager のライブラリと拡張機能のマニフェストのレポート	×	WebSphere/WebLogic/JBoss/OC4J
SSO 診断情報	×	WebSphere/WebLogic/JBoss/OC4J

診断ダッシュボードの使用

診断ダッシュボードのメイン画面にあるセクションを、次の表に示します。

項目	説明
システム情報 アプリケーション・サーバー	アプリケーション・サーバーの名前が表示されます。
Oracle Identity Manager インストール	製品バージョン、ビルド番号、ホスト、製品の場所といったインストールの詳細が表示されます。
テストの詳細 テスト名	テスト名が表示されます。
説明	テストの説明が表示されます。
テスト・パラメータ	テストの検証に必要な場合、テスト・パラメータが表示されます。

結果を取得するには、次の手順を実行します。

1. 診断ダッシュボードのメイン画面で、目的のテストのチェック・ボックスを選択します。
2. 必要に応じて必須パラメータを入力します。
3. **「検証」**をクリックすると結果が表示されます。

   「診断ダッシュボード・テスト結果」画面に、次の表に示すステータス情報が表示されます。

テスト結果	説明
結果サマリー	結果サマリーには、選択されたすべてのテストが、結果を示すアイコン（合格 / 不合格）とともに表示されます。テスト名は Web リンクになっており、結果の詳細に直接ジャンプすることができます。
テスト名	テスト名が表示されます。
説明	検証するテストの説明が表示されます。
入力パラメータ	検証するテストのテスト・パラメータが表示されます。
結果	テストの合否が表示されます。
詳細	テストの合否詳細です。
先頭に戻る	ページのトップが表示されます。

4. 左メニュー・ペインの**「診断ダッシュボード」**リンクをクリックすると、前のテスト・ページに戻ります。

テストの詳細とパラメータ

次のテストは、様々なアプリケーション・サーバーで使用できます。

Microsoft SQL Server の JDBC ライブラリ可用性のチェック

前提条件 : なし

説明 : Oracle Identity Manager を Microsoft SQL Server とともに使用する場合、CLASSPATH に JDBC ドライバが必要です。このテストはドライバが CLASSPATH で使用できるかどうかを検証します。

結果 : 正常であれば、SQL Server Driver が見つかります。

Microsoft SQL Server の前提条件チェック

アプリケーション・サーバー : JBoss

前提条件 : このテストを検証するための前提条件は次のとおりです。

前提条件	説明
データベース・サーバー	データベース・サーバーの場所を入力します。
ポート	ポート番号を入力します。
データベース名	データベース名を入力します。
Oracle Identity Manager データベース・ユーザー名	Oracle Identity Manager データベースのユーザー名を入力します。
Oracle Identity Manager データベース・ユーザー・パスワード	Oracle Identity Manager データベースのユーザー・パスワードを入力します。

説明 : 指定された SQL Server のインスタンスが、Oracle Identity Manager のインストールに必要な前提条件を満たしているかどうかを確認します。

結果 : 次の情報が表示されます。

- ユーザーに必要な権限
- XA サポートが有効であること
- SQL Server のバージョン

Oracle の前提条件チェック

アプリケーション・サーバー : JBoss/ WebSphere/WebLogic/OC4J

前提条件 :

前提条件	説明
データベース・サーバー	データベース・サーバーの場所を入力します。
ポート	ポート番号を入力します。
データベース名（SID）	データベース名（SID）を入力します。
Oracle Identity Manager データベース・ユーザー名	Oracle Identity Manager データベースのユーザー名を入力します。
システム・ユーザー名	システムのユーザー名を入力します。
システム・ユーザー・パスワード	システムのユーザー・パスワードを入力します。

説明 : 指定された Oracle のインスタンスが、Oracle Identity Manager のインストールに必要な前提条件を満たしているかどうかを確認します。このテストには SYSTEM 権限が必要です。

結果 : 次の情報が表示されます。

- ユーザーに必要な権限
- XA サポートが有効であること
- JVM が有効であること
- Oracle のバージョン情報

WebSphere の埋込み JMS サーバーのステータス

アプリケーション・サーバー : WebSphere

前提条件 :

前提条件	説明
ホスト	ホスト名を入力します。
ポート	ポート番号を入力します。
ユーザー名	ユーザー名を入力します。
パスワード	パスワードを入力します。

説明 : JMS サーバーのステータスを確認します。このテストは WebSphere のみに有効で、Oracle Identity Manager がインストールされている必要があります。

結果 : JMS サーバーのステータスが表示されます。

データベース接続性のチェック

アプリケーション・サーバー : JBoss/ WebSphere/WebLogic/OC4J

前提条件 : なし

説明 : このテストは、Oracle Identity Manager がデータベースに接続可能かどうかを検証するために実行します。このテストは、データベース直接接続と、J2EE データ・ソース（XA および非 XA）を検証します。

結果 : 次の情報が表示されます。

- データベース直接接続性
- XA および非 XA での実行

アカウント・ロックのステータス

アプリケーション・サーバー : JBoss/ WebSphere/WebLogic/OC4J

前提条件 :

前提条件	説明
ユーザー名	ユーザー名を入力します。

説明 : Oracle Identity Manager は、無効なログイン試行が何回も繰り返される場合、アカウントをロックします。このテストは、指定アカウントがロックされているかどうかを確認します。

結果 : データベース内のロックされているアカウントとロックされていないアカウントを確認します。

データ暗号化キーの検証

アプリケーション・サーバー : JBoss/ WebSphere/WebLogic/OC4J

前提条件 : なし

説明 : Oracle Identity Manager インストールでのデータ暗号化キーは、Oracle Identity Manager データベースでデータを暗号化するために使用されたキーと同一である必要があります。ただし、Oracle Identity Manager のインストールが、別の Oracle Identity Manager インストールのために作成されたデータベース・スキーマを参照している場合はこのかぎりではありません。これは、1 つの Oracle Identity Manager インストールからのデータベース・ダンプが、対応するキーをコピーせずに、異なった Oracle Identity Manager インストールにインポートされる場合にも発生することがあります。

結果 : データベース・キーが Oracle Identity Manager 構成ディレクトリに存在するかどうかを確認します。

スケジューラ・サービスのステータス

アプリケーション・サーバー : JBoss/ WebSphere/WebLogic/OC4J

前提条件 : なし

説明 : このサーバーで実行されている Oracle Identity Manager スケジューラ・サービスのステータスを確認します。

結果 : スケジューラ・サービスのステータスが表示されます。

Remote Manager のステータス

アプリケーション・サーバー : JBoss/ WebSphere/WebLogic/OC4J

前提条件 : なし

説明 : この Oracle Identity Manager のインストールが機能するようにすべて設定済である Remote Manager のステータスをレポートします。

結果 : Remote Manager のステータスが表示されます。

JMS メッセージ機能の検証

アプリケーション・サーバー : JBoss/ WebSphere/WebLogic/OC4J

前提条件 : なし

説明 : このテストの目的は、Oracle Identity Manager が JMS メッセージを送信し処理できることを検証することです。

結果 : Oracle Identity Manager が JMS メッセージを送信および処理できるかどうかが表示されます。

ターゲット・システムの SSL トラストの検証

アプリケーション・サーバー : JBoss/ WebSphere/WebLogic/OC4J

前提条件 :

前提条件	説明
ホスト	ホスト名を入力します。
ポート	ポート番号を入力します。
トラスト・ストアの場所	ストレージの場所を入力します。
トラスト・ストアのパスワード	ストレージのパスワードを入力します。

説明 : Oracle Identity Manager は、SSL 経由での接続の場合にターゲット・システムの証明書を信頼するように設定する必要があります。ホスト名と、ターゲット・システムが SSL 接続をリスニングしているポートを入力します。

結果 : 次の情報が表示されます。

- 有効 / 無効なホストとポート・アドレス
- 信頼できる証明書

Java VM システム・プロパティのレポート

アプリケーション・サーバー : JBoss/ WebSphere/WebLogic/OC4J

前提条件 : なし

説明 : Java VM のシステム・プロパティすべてを印刷します。

結果 : Java VM のシステム・プロパティがすべて表示されます。

WebSphere のバージョンのレポート

アプリケーション・サーバー : WebSphere

前提条件 : なし

説明 : WebSphere Application Server のバージョン情報と、アプリケーション・サーバーにインストールされているすべての修正パックおよびコンポーネントのリストを取得します。

結果 : WebSphere バージョン情報が表示されます。

Oracle Identity Manager のライブラリと拡張機能のバージョンのレポート

アプリケーション・サーバー : JBoss/ WebSphere/WebLogic/OC4J

前提条件 : なし

説明 : Oracle Identity Manager ライブラリと拡張機能のバージョンをレポートします。

結果 : Oracle Identity Manager ライブラリと拡張機能のバージョンが表示されます。

Oracle Identity Manager のライブラリと拡張機能のマニフェストのレポート

アプリケーション・サーバー : JBoss/ WebSphere/WebLogic/OC4J

前提条件 : なし

説明 : Oracle Identity Manager ライブラリと拡張機能のマニフェスト情報をレポートします。

結果 : Oracle Identity Manager ライブラリと拡張機能のマニフェスト情報が表示されます。

SSO 診断情報

アプリケーション・サーバー : JBoss/ WebSphere/WebLogic/OC4J

前提条件 : なし

説明 : SSO の設定に関する情報が表示されます。また、SSO ログインに関連する実行時診断情報の取得が可能になるように Oracle Identity Manager を設定するための手順を示します。

結果 : 関連する Oracle Identity Manager インストールに対して SSO の設定が有効になっているかどうかが表示されます。

A

アテステーションの理解

アテステーションを使用すると、レビューアは、確認が必要なレポートについて通知を受けることができます。そのレポートは一部のユーザーが持つプロビジョニング済リソースについて記述したものです。レビューアは、レスポンスを入力することにより、権限の正確さをアテストすることができます。このアテステーション・アクションは、レビューアが入力したレスポンス、関連コメント、およびレビューアが参照してアテストしたデータの監査ビューとともにトラッキングと監査を受け、アカウンタビリティの完全な証跡を残します。Oracle Identity Manager では、このプロセスをアテステーション・タスクと呼びます。

Oracle Identity Manager では、アテステーションはスケジュール済アテステーション・プロセスの定義によってサポートされます。アテステーション・プロセスは Oracle Identity Manager ワークフローと同じではありません。Oracle Identity Manager ユーザー用のアテステーション・タスクを作成するのは、Oracle Identity Manager の構成パラメータでハードコードされたビジネス・プロセスです。ユーザーはレビューアとして作業し、このプロセスを完了して正しい監査情報を提供する必要があります。

プロビジョニング済リソース・インスタンスのアテステーション・アクティビティのトラッキングは、リソース・オブジェクトのプロビジョニング・プロセス内のタスクにより実行されます。アテステーション・アクションに基づいてワークフロー・アクティビティを開始することができます。開始される追加アクティビティと、プロセス定義フォームやワークフロー・デザイナでモデリング可能なワークフローは、初期アテステーション・アクションに基づいて開始できます。これは、Oracle Identity Manager で定義されているプロビジョニング・プロセス内のアテステーション・サブフローにより実現されています。

アテステーション・アクティビティは、定期的または非定型ベースで開始されます。

レビューアは、アテステーション・タスク内の特定の権限を他のユーザーに委任してレビューさせることができます。これは、別のアテステーション・タスクが作成され、委任されたユーザーに割り当てられることで行われます。

この付録では、次の内容について説明します。

- アテステーション・プロセスの定義
- アテステーション・タスクのコンポーネント
- アテステーション・リクエスト
- 財務的に意味を持つリソース
- 委任
- アテステーション・ライフサイクル・プロセス
- アテステーション・エンジン
- アテステーション・スケジュール済タスク
- アテステーション・ドリブンのワークフロー機能
- 電子メール

アテステーション・プロセスの定義

アテステーション・プロセスは、アテステーション・タスクを設定するメカニズムです。このため、アテステーション・タスクを構成するすべてのコンポーネントを定義して、適切なスケジュールに関連付ける方法を理解する必要があります。この定義も、同一のアテステーション・タスクを非定型に開始するための基盤です。このため、アテステーション・プロセスの定義には次のものが含まれます。

- **アテステーション・タイプ :** アテステーション・プロセスには次の 2 つのタイプがあります。
  - ユーザー権限のアテステーション : ユーザーベースのアテステーション・スコープと一致します。
  - リソース権限のアテステーション : リソースベースのアテステーション・スコープと一致します。
- **アテステーション・スコープ :** アテステーション・プロセスのターゲット・ユーザー権限を計算するアルゴリズムを定義します。タイプに基づきます。
- **レビューア設定 :** レビューアの条件。
- **アテステーション・スケジュールの定義 :** スケジュール・ベースでいつアテステーション・プロセスを開始するかを定義します。
- **プロセス所有者 :** プロセスに関連するあらゆるアクティビティの監視を割り当てられているユーザーのグループ。
  - このユーザーには、プロセス実行時に発生する問題がすべて通知されます。
  - プロセス定義を表示する権限はありますが、デフォルトでは admin 権限はありません。
  - 非定型の方式でプロセスを実行することはできます。
- **プロセス管理者 :** プロセス定義に対して管理権限を持つユーザーのグループです。基本的に、通常の委任を受けた管理者のモデルにマッピングされます。

プロセスが一連のレビューアを定義している場合、単一のアテステーション・プロセスから複数のアテステーション・タスクが発生することもあります。このような場合、プロセスから、各レビューアに対して 1 つずつアテステーション・タスクが発生することになります。

アテステーション・プロセスの制御

次の各項では、アテステーション・プロセスの制御方法について説明します。

プロセスの無効化

アテステーション・プロセスはすべて、無効化して事前設定のスケジュールどおりに実行されないようにできます。これにより、管理者は環境を制御しやすくなります。無効化されたアテステーション・プロセスは有効化できますが、次の実行予定時刻を過ぎると有効化できません。アテステーション・プロセスを有効化するユーザーは、次の実行予定時刻を未来に設定する必要があります。

プロセスの削除

アテステーション・プロセスはすべて、削除可能です。これはソフト削除と呼ばれます。実際にはレコードは削除されません。監査目的で維持する必要があります。そのかわりに、アテステーション・プロセスに削除済のマークが付けられます。

削除済のプロセスは管理インタフェースに表示されません。プロセス名とコードは一意なので、1 回使用した名前を 2 回使用することはできません。同じ名前で新しいアテステーション・プロセスを作成することはできません。

アテステーション・タスクのコンポーネント

アテステーション・プロセスの基本目的は、Oracle Identity Manager にアテステーション・タスクを設定することです。アテステーション・タスクはユーザーのアテステーション受信ボックスに表示されます。アテステーション・タスクの基本コンポーネントを次に示します。

- **レビューア :** アテステーションを実行するユーザー。
- **タスク・ソース :** アテステーション・タスクがプロセスの結果として発生したのか、別のレビューアの委任によって発生したのかを指定します。委任の場合は、タスクを委任したレビューアが誰で、どのタスクが権限のソースであるかをトラッキングする必要があります。
- **アテステーション・スコープ :** レビューアがアテストする必要がある対象を定義します。ユーザーがプロビジョニングしたリソース・インスタンスの一覧で、次のように定義されます。
  - **リソースベース :** ユーザーがプロビジョニングした、アテスト対象のすべてのリソース・インスタンスが、特定のリソースに関連します。スコープは、指定されたリソースの取り消されていないインスタンスであるすべてのユーザーです。
  - **ユーザーベース :** アテスト対象のユーザー権限が、特定のユーザー・セットに関連します。レビューアはセット内のユーザーに対するすべての適切な権限をアテストします。
- **アテステーション・データ :** アテステーション・スコープ内のユーザー権限の詳細データ。基本的に、プロビジョニングされたリソース・インスタンスのプロセス・フォームからのデータです。
- **アテステーション日 :** ユーザーがアテストする必要があるアテステーション・データに関してアテステーション・タスクが開始された日付および時点を定義します。レビューアがアテストするのが現在のユーザー権限でないことに注意してください。アテステーション・タスクで指定された日にユーザーが持っていた権限をアテストします。通常、2 つの日付は同一です。しかし、区別することで、アクティビティの遅延が引き起こす問題が排除されます。
- **アテステーション・アクション :** レビューアがアテステーション・スコープで行うアクションです。アクションはアテステーション・タスク全体レベルのものではなく、アテステーション・スコープ内の各権限に対して行われます。アテステーション・アクションには次のものがあります。
  - **認証 :** レビューアは、レビュー対象のユーザーが、データや詳細な権限が規定されたフォームのこの権限の保持を許されていることを認証します。
  - **却下 :** レビューアは、フォームのこの権限をユーザーが持つ必要がないと考えています。
  - **拒否 :** レビューアは権限のアテスト業務を引き受けられません。このアクションは通常、プロセスが適切に構成されていない場合に取られ、公開後の早い段階で有用です。
  - **委任 :** レビューアは別の有資格者にこの権限のアテステーションを再割当てすることを考えています。

重要 : アテステーション・タスクは、Oracle Identity Manager 定義におけるワークフロー・タスクではありません。ワークフローの一部としては作成されません。アテステーション・タスクは、ワークフロー・エンジンがサポートするすべてのタスク管理機能、たとえば動的割当て、エスカレーション、プロキシ管理などをサポートしません。

アテステーション受信ボックス

アテステーション受信ボックスを使用すると、割り当てられているアテステーション・タスクを管理できます。

この受信ボックスから、割り当てられているアテステーション・タスクを表示し、レスポンスとコメントを入力することができます。

アテステーション・リクエスト

アテステーション・プロセスが実行されると、アテステーション・リクエストが作成され、Oracle Identity Manager データ・ストアに記録されます。このリクエストは、アテステーション・プロセスが実行される際の監査レコードの役目を果します。アテステーション・リクエスト・レコードは、レポートで使用される、基本的な識別データと監査データ、および統計データから構成されています。データには次の項目が含まれています。

- リクエスト ID: リクエストの結果として作成される各アテステーション・タスクは、レコードの一部としてリクエスト ID を格納します。
- プロセス実行の日付と時刻
- プロセス完了の日付と時刻 : プロセス完了の日付と時刻は、そのリクエストの日付と時刻とみなされます。
- アテステーションで識別されている権限の総数

  権限の数は次のとおりです。

  権限の総数 = 認証された数 + 却下された数 + 拒否された数
- 認証された権限の数
- 却下された権限の数
- 拒否された権限の数

財務的に意味を持つリソース

管理者は、Oracle Identity Manager の各リソース・オブジェクト定義を、財務的に意味を持つかどうかという点からマークできます。

このプロパティの役割は、ある種のアテステーション適用範囲を持つリソースにフラグを立てることです。これは、次のことを判断するために使用されます。

1. アテステーション・プロセスが定義されていないリソースのうち、定義される必要があるリソースはどれか
2. アテストされていないリソース権限のうち、アテストされている必要がある権限はどれか

ユーザーベースのアテステーション・スコープを持つアテステーション・プロセスの一部としてアテステーションを必要とするユーザー権限を判断するとき、財務的に意味を持つものとしてマークを付けられたリソースに対するユーザー権限のみが考慮されます。

リソースの作成時、このフラグはデフォルトで**オフ**です（財務的に意味を持たない）。

委任

アテステーション・タスクに割り当てられているレビューアが、タスク内のすべての権限をアテストできない場合があります。これには複数の原因が考えられます。

- アテステーション・タスク内の、ユーザーと権限が多すぎます。
- レビューアに、権限が関係するユーザーに対する十分な可視性がありません。

こうした場合、レビューアが他のユーザーをレビューに参加させたいと考えることがあります。レビューアは、タスク内の一部の権限のアテステーションを委任できます。

アテステーションを委任するには、レビューアがタスク内で権限のセットを選択し、それを他のユーザーに委任します。これにより新しいアテステーション・タスクが作成され、選択されたレビューアに割り当てられます。新しいタスクは、元のレビューアが選択した権限のみを含んでいます。これ以降、元のレビューアは、それらの権限に対するアテステーション・レスポンスの入力を担当しません。委任先に割り当てられた新しいアテステーション・タスクは、委任元、タスクの発生元、およびその他の通常の情報、たとえばリクエスト ID などをトラッキングします。新しいアテステーション・タスクは、他のあらゆるアテステーション・タスクと同じように処理されます。委任することも可能です。

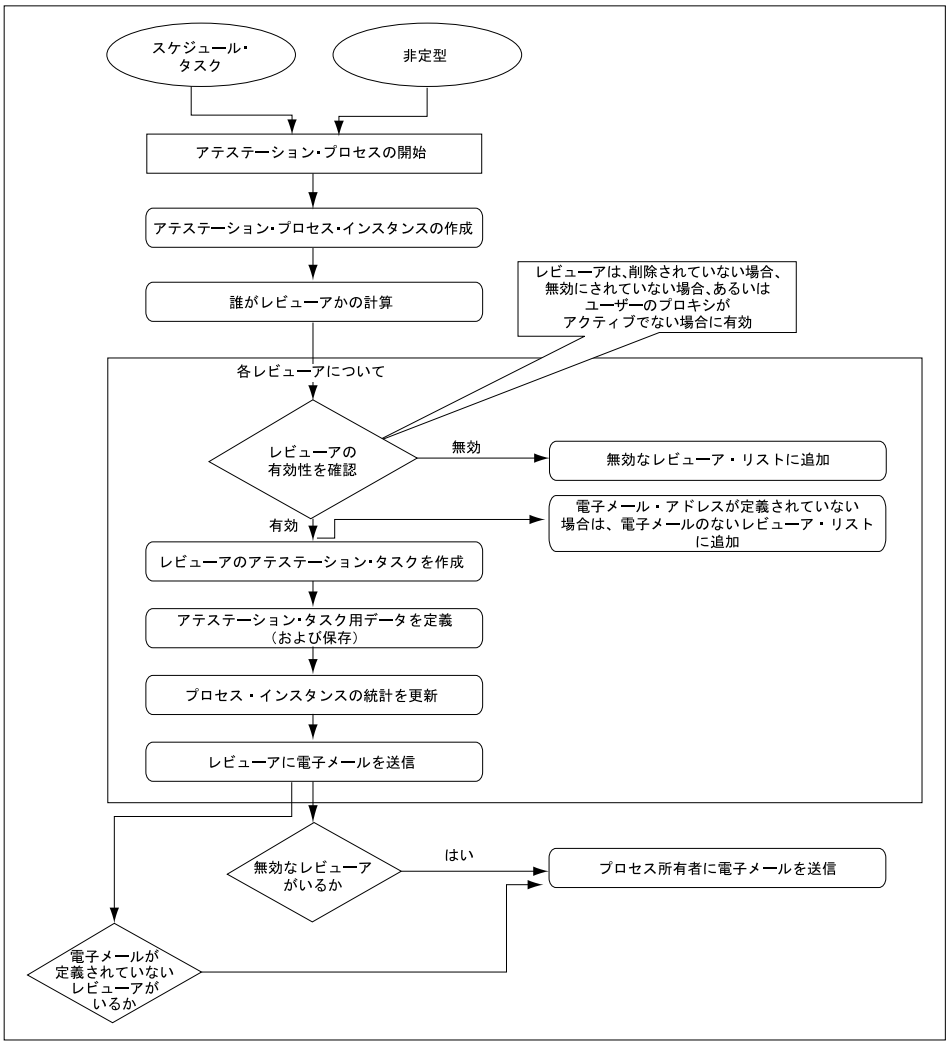
アテステーション・ライフサイクル・プロセス

Oracle Identity Manager におけるアテステーション・ライフサイクルについて、次に説明します。

第 1 段階 - アテステーション・タスクの作成

この段階は、アテステーション・プロセスの実行時に開始されます。図 A-1 のフローチャートにワークフローを示します。

図 A-1 アテステーション・タスクの作成 : ワークフロー



アテステーション・プロセスが実行されると、対応するアテステーション・プロセス・インスタンスが最初に作成されます。今回のプロセス実行に対するレビューアが識別されます。多くの場合、レビューアは 1 人だけですが、複数のレビューアがいることもあります。

プロセスは各レビューアに対してアテステーション・タスクを作成し、関連するアテステーション日を設定します。レビューアが無効の場合、プロセスによって、不適切レビューアのリストにレビューアの名前などの詳細情報が追加されます。レビューアが無効なのは、Oracle Identity Manager ユーザー・レコードが無効または削除済の場合、あるいはユーザーが代行者を指定していて、その代行者が現在アクティブである場合です。また、電子メール・アドレスが定義されていないレビューアのリストも計算されます。

プロセスは、有効な各レビューアに対して、プロセスで定義されたアテステーション・スコープによって決定されたとおりに、レビューアがアテストする必要があるすべてのユーザー権限を計算します。アテステーション・スコープがユーザーベースの場合、財務的に意味があるというマークが付けられたリソースのみが取得されます。プロセスは、タスクのアテステーション・データに、それらのユーザー権限に関する参照およびその他の関連情報を追加します。また、そのタスクが扱う権限の数を、プロセス・インスタンスの**アテステーションで識別されている権限の総数**に対応する統計フィールドに追加します。続いて、プロセスにより、レビューアに電子メール・メッセージが送信されます。

各レビューアを調査した後、プロセスは無効なレビューアをチェックし、いる場合は、無効なレビューアのリストをプロセス所有者に電子メールで送信します。また、電子メール・アドレスが定義されていないレビューアに関する電子メールも、プロセス所有者に送信します。

この段階の終了時、アテステーション・タスクはすべて、レビューアのアテステーション受信ボックスにあります。

第 2 段階 - アテステーション・タスクに関する作業

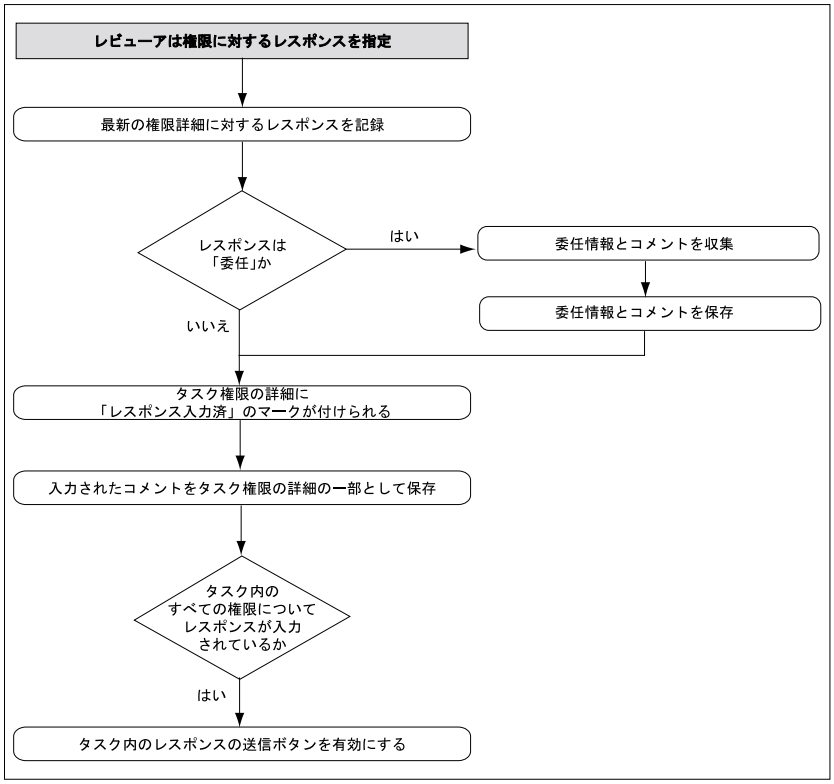
アテステーション・タスクがレビューアに割り当てられると、レビューアは電子メールを受信し、タスクは各レビューアのアテステーション受信ボックスに表示されます。レビューアは自分のアテステーション受信ボックスでタスクの詳細を参照します。

レビューアは、タスク詳細のページから各権限に対してレスポンスおよびオプションのコメントを入力します。これにより、タスク内のアテステーション権限の詳細に、「**レスポンス入力済**」のマークが付けられます。

レビューアのレスポンスに、特定の権限のアテステーション・アクティビティの委任が含まれている場合は、レビューアは委任するユーザーを入力する必要があります。レビューアはオプションとして、なぜそのユーザーにアテステーション・アクティビティを委任するか、コメントを入力することができます。

レビューアは、すべての権限にレスポンスを入力した後、すべてのレスポンスを送信することによって、アテステーション・タスクのアクションをコミットすることができます。

図 A-2 レビューアが権限に対するレスポンスを送信する場合のイベントのフロー



この時点で、次の段階であるアテステーション・ビジネス・プロセスが開始されます。

第 3 段階 - 送信されたアテステーション・タスクの処理

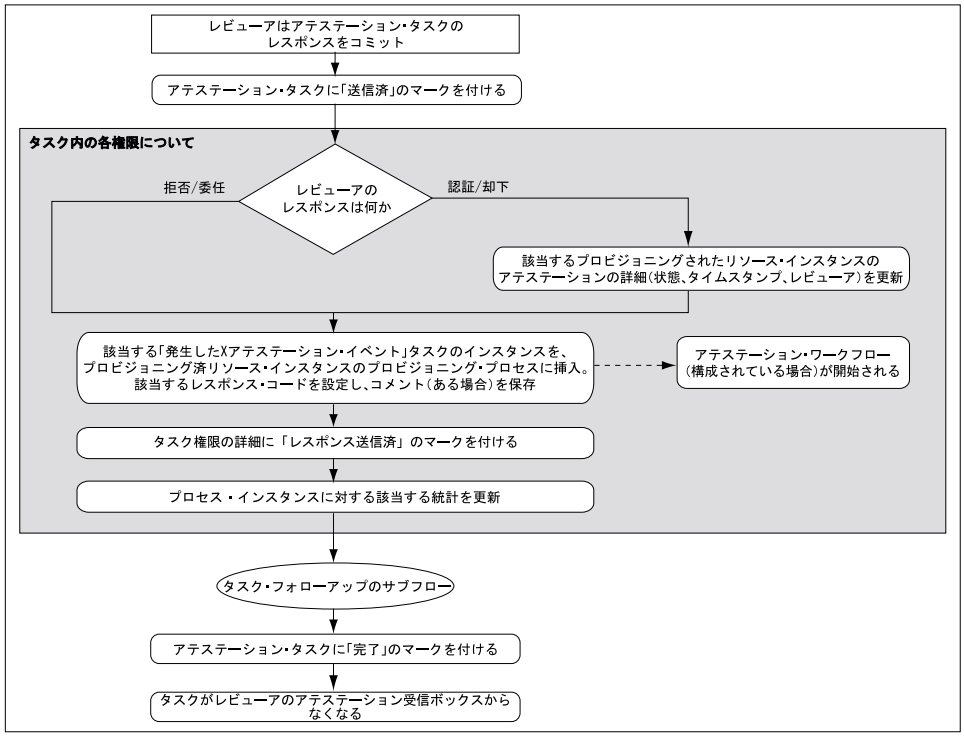
アテステーション・タスクは**「送信済」**とマークされています。この時点でアテステーション・タスクは凍結され、それ以上作業できません。アテステーション・タスクの各権限について、レスポンスが調査されます。

レスポンスが認証または却下の場合、その権限に対応するプロビジョニング済のリソース・インスタンスが、それに応じて更新されます。プロビジョニング済のリソース・インスタンスのレベルで、最後のアテステーション結果、最後のアテステーションの発生時刻、および誰がレビューアであったかが記録されます。レスポンスが拒否または委任だった場合、プロビジョニング済リソース・レベルでのアテステーション詳細は変更されません。

アテステーション・プロセスのタイプに応じて、**「ユーザー・アテステーション・イベントが発生しました」**タスクまたは**「リソース・アテステーション・イベントが発生しました」**タスクが、リソース・インスタンスのプロビジョニング・プロセスに挿入されます。アテステーション・ドリブンのワークフローが定義されている場合は、これにより開始されます。コメントはすべてタスクのメモ・フィールドに保存されます。

タスクのアテステーション権限の詳細には**「レスポンス送信済」**のマークが付けられます。

図 A-3 アテステーション・タスクのレスポンス送信後のイベント・フロー



次の統計情報が、プロセス・インスタンスに基づいて更新されます。

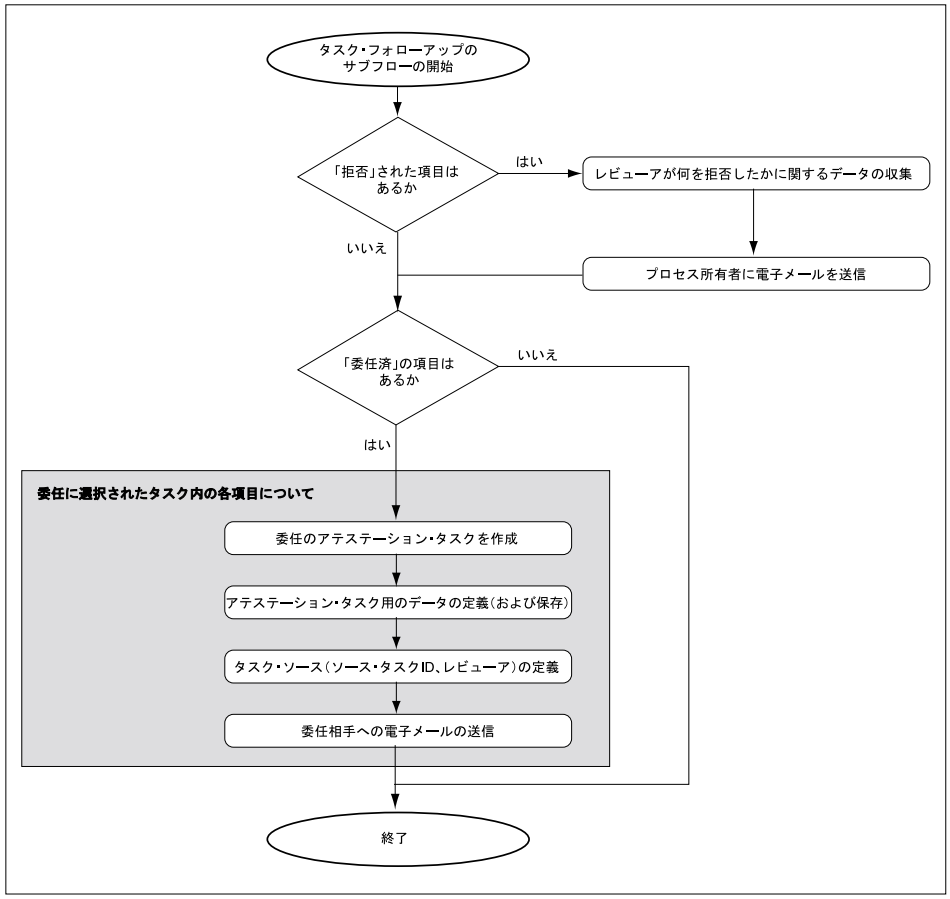
- 認証された権限の数
- 却下された権限の数
- 拒否された権限の数
- 委任された権限の数

すべての権限を処理した後で、フォローアップ・アクションのサブフローが開始されます。このフローでは、プロセスによって、タスクの権限のいずれかに対するレスポンスが拒否されたかどうかが調べられます。そのような権限があった場合、プロセスは拒否の詳細を概説しているプロセス所有者に電子メールを送信します。

次に、タスクの権限のいずれかに対するレスポンスが委任されたかどうかが調べられます。そのような権限があった場合、レビューアが委任先として選択したすべてのユーザーが識別され、それぞれのアテステーション・タスクが作成されます。各アテステーション・タスクは、レビューアがそのユーザーに委任した権限のみに関するものです。委任されたユーザーは、電子メールで委任を通知されます。

委任されたアテステーション・タスクがすべて作成されると、サブフローは終了し、メイン・フローに合流します。

図 A-4 フォロー・アップ・アクション・サブフロー



フォローアップ・フローが完了すると、アテステーション・タスクには**「完了」**のマークが付けられます。

アテステーション・エンジン

アテステーション・エンジンは、アテステーション・ライフサイクルを実装します。これは Oracle Identity Manager アーキテクチャ内のサービスで、特定のアテステーション・プロセスを開始する指示を受信するための API を公開しています。この API はアテステーション・スケジュール・タスクや、「アテステーション・プロセスの詳細」ページの**「即時実行」**ボタンから呼び出されて、非定型の実行をサポートします。アテステーション・プロセスを開始する、両方のドライバをサポートしています。

アテステーション・エンジンは、可能な場合はオフライン処理へのメッセージングを使用してトランザクションを分離し、エンドユーザーにパフォーマンスの問題が発生しないようにします。

アテステーション・スケジュール済タスク

Oracle Identity Manager で定義されているアテステーション・プロセスの調査と、システムで必要なアテステーション・タスクの作成を担当する、システムの新しいスケジュール済タスクです。

このスケジュール済タスクの主要な機能は次のとおりです。

- このスケジュール・タスクは、初期状態で、毎晩実行されるように設定されます。これは単にデフォルト値で、必要に応じて変更できます。
- すべてのアクティブな（無効でない）アテステーション・プロセスに対するアテステーション・プロセス定義表を調査します。
- 実行する必要があると考えられるすべてのプロセス（次のスケジュール済開始時刻が過去であるプロセス）について、アテステーション・エンジンへの呼出しを開始して、アテステーション・プロセスを開始します。

アテステーション・ドリブンのワークフロー機能

Oracle Identity Manager で定義されているプロビジョニング・プロセスが、アテステーション・アクティビティからのトリガーをリスニングするように拡張されます。これにより、顧客はプロビジョニング・ワークフローの一部として、アテステーションの発生（拒否の場合は発生しない）に対応し、したがってアテステーションの発生時に開始される、カスタムのワークフローを定義できます。

これは 2 つの目的に役立ちます。

- フローのデフォルトのアテステーション・タスク（「ユーザー・アテステーション・イベントが発生しました」または「リソース・アテステーション・イベントが発生しました」）は、特定のユーザー権限のアテステーション履歴の監査証跡を提供します。
  - リソース・インスタンスが適切なタイプのアテステーション・プロセスによってアテストされるたびに、このタスクのインスタンスが 1 つ発生します。
  - タスク上に設定されたレスポンス・コードは、レビューアが入力したレスポンスの種類を示しています。
  - タスク作成者のタグを付けられたユーザーは、レビューアが誰であったかを示しています。
  - ユーザーが入力したコメントはすべて、タスクのメモ・フィールドに入ります。
- レスポンスが生成したタスクを使用すると、デフォルト・タスクがワークフローを開始して、受け取った特定のアテステーション・レスポンスに対応することができます。このため顧客は、特定のリソースについて、「却下」のレスポンスによってプロビジョニング・プロセスの該当するワークフロー・タスクを開始して、たとえばそのアカウントを無効化するように設定することがあります。

電子メール

アテステーション・エンジンは、アテステーション・プロセスの一部として、各種の関係者に電子メールを送信します。顧客が電子メールの内容を設定できるようにするために、顧客に対して、Oracle Identity Manager の電子メール定義ストアの一般タイプの電子メール・テンプレートが使用可能に設定されます。コンテキストに依存するよう、電子メールでは、適切な値に置き換えられる各種の電子メール変数がサポートされます。

アテステーション・レビューアへの通知

このテンプレートは、アテステーション・タスクが割り当てられているレビューアに送信する電子メールを作成するために使用されます。

変数

「Notify Attestation Reviewer」テンプレートの変数を次に示します。

変数名	説明
<Attestation Definition.Process Name>	アテステーション・プロセスの名前
<Attestation Definition.Process Code>	アテステーション・プロセスのコード
<Attestation Task.Task Assigned Date>	アテステーション・タスクが割り当てられた日付

件名行

「Notify Attestation Reviewer」テンプレートにより定義された電子メール・メッセージの件名行を次に示します。

A new attestation task for attestation process *<Attestation Definition.Process Name>* has been added to your attestation inbox

本文

電子メール・メッセージの本文には次の情報が含まれます。

The attestation task details are as follows
Process Name: *<Attestation Definition.Process Name>*
Process Code: *<Attestation Definition.Process Code>*
Data Type: Access Rights
Assigned Date: *<Attestation Task.Task Assigned Date>*

委任されたレビューアへの通知

このテンプレートは、アテステーション・タスクを委任されたレビューアに送信する電子メールを作成するために使用されます。

変数

「Notify Delegated Reviewers」テンプレートの変数を次に示します。

変数	説明
<Attestation Definition.Process Name>	アテステーション・プロセスの名前
<Attestation Definition.Process Code>	アテステーション・プロセスのコード
<Attestation Task.Task Assigned Date>	アテステーション・タスクが割り当てられた日付
<Attestation Task.Delegated By First Name>	委任を行ったレビューアの名
<Attestation Task.Delegated By Last Name>	委任を行ったレビューアの姓
<Attestation Task.Delegated By User Id>	委任を行ったレビューアのユーザー ID

件名行

「Notify Delegated Reviewers」テンプレートにより定義された電子メール・メッセージの件名行を次に示します。

<Attestation Task.Delegated By User Id> has delegated to you an attestation task from attestation process *<Attestation Definition.Process Name>*

本文

メッセージの本文には次の情報が含まれます。

The attestation task details are as follows
Process Name: *<Attestation Definition.Process Name>*
Process Code: *<Attestation Definition.Process Code>*
Data Type: Access Rights
Assigned Date: *<Attestation Task.Task Assigned Date>*
Delegated By: *<Attestation Task.Delegated By First Name>* *<Attestation Task.Delegated By Last Name>* [*<Attestation Task.Delegated By User Id>*]

無効なアテステーション・レビューアに関するプロセス所有者への通知

「Invalid Attestation Reviewers」テンプレートは、プロセス内のアテステーション・タスクを生成する際に無効なレビューアが見つかったことをプロセス所有者に通知するために送信する電子メールを作成するために使用されます。

変数

「Notify Process Owner about Attestations Reviewers」テンプレートの変数を次に示します。

変数	定義
<Attestation Request.Request Id>	アテステーション・リクエストの ID
<Attestation Definition.Process Name>	アテステーション・プロセスの名前
<Attestation Request.Request Creation Date>	アテステーション・リクエストが作成された日付
<Attestation Task.Reviewer First Name>	無効なレビューアの名
<Attestation Task.Reviewer Last Name>	無効なレビューアの姓
<Attestation Task.Reviewer User Id>	無効なレビューアのユーザー ID
<Attestation Task.Reviewer Invalid Reason>	レビューアが無効である理由

件名行

「Notify Process Owner about Attestations Reviewers」テンプレートにより定義された電子メール・メッセージの件名行を次に示します。

Some of the reviewers are invalid for the attestation process *<Attestation Definition.Process Name>*, request *<Attestation Request.Request Id>*

本文

メッセージの本文には次の情報が含まれます。

The following attestation process generated some invalid reviewers.

Attestation process: *<Attestation Definition.Process Name>*
Attestation Request ID: request *<Attestation Request.Request Id>*
Request date: *<Attestation Request.Request Creation Date>*
Invalid Reviewers: *<Attestation Task.Reviewer First Name>* *<Attestation Task.Reviewer Last Name>* [*<Attestation Task.Reviewer User Id>*] - *<Attestation Task.Reviewer Invalid Reason>*

スペシャル・コメント

レビューアの詳細が複数ある場合は、1 行に 1 件ずつ表示されます。

拒否されたアテステーション権限についてのプロセス所有者への通知

「Notify Declined Attestation Entitlements」テンプレートは、拒否された権限アテステーション・タスクについてプロセス所有者に通知するために送信する電子メールを作成するために使用されます。

変数

「Notify Process Owner about Declined Attestation Entitlements」テンプレートの変数を次に示します。

変数	説明
<Attestation Request.Request Id>	アテステーション・リクエストの ID
<Attestation Definition.Process Name>	アテステーション・プロセスの名前
<Attestation Task.Reviewer First Name>	レビューアの名
<Attestation Task.Reviewer Last Name>	レビューアの姓
<Attestation Task.Reviewer User Id>	レビューアのユーザー ID
<Attestation Data.Provisioned User First Name>	アテストされるユーザーの名
<Attestation Data.Provisioned User Last Name>	アテストされるユーザーの姓
<Attestation Data.Provisioned User User Id>	証明されるユーザーのユーザー ID
<Attestation Data.Resource Name>	アテストされるリソースの名前
<Attestation Data.Entitlement Descriptive Data>	アテストされる権限の説明データ

件名行

「Notify Process Owner about Declined Attestation Entitlements」テンプレートにより定義された電子メール・メッセージの件名行を次に示します。

User access rights in attestation request *<Attestation Request.Request Id>* have been declined by *<Attestation Task.Reviewer User Id>*

本文

メッセージの本文に表示される内容は次のとおりです。

Attestation of the following user access rights were declined by the reviewer.
Reviewer: *<Attestation Task.Reviewer First Name>* *<Attestation Task.Reviewer Last Name>* [*<Attestation Task.Reviewer User Id>*]
Attestation Process: *<Attestation Definition.Process Name>*
Attestation Request ID: request *<Attestation Request.Request Id>*
Access Rights Data: *<Attestation Data.Provisioned User First Name>* *<Attestation Data.Provisioned User Last Name>* [*<Attestation Data.Provisioned User User Id>*] - *<Attestation Data.Resource Name>* - *<Attestation Data.Entitlement Descriptive Data>*

スペシャル・コメント

権限データは 1 行に 1 つずつ表示されます。

電子メールが定義されていないレビューアについてのプロセス所有者への通知

「Attestation Reviewers With No Email Defined」テンプレートは、電子メール・アドレスが定義されていないレビューアについて、プロセス所有者に通知するために送信する電子メールを作成するために使用されます。

変数

「Notify Process Owner About Reviewers with No Email Defined」テンプレートの変数は次のとおりです。

変数	説明
<Attestation Request.Request Id>	アテステーション・リクエストの ID
<Attestation Definition.Process Name>	アテステーション・プロセスの名前
<Attestation Request.Request Creation Date>	アテステーション・リクエストが作成された日付
<Attestation Task.Reviewer First Name>	無効なレビューアの名
<Attestation Task.Reviewer Last Name>	無効なレビューアの姓
<Attestation Task.Reviewer User Id>	無効なレビューアのユーザー ID

件名行

「Notify Process Owner About Reviewers with No Email Defined」テンプレートにより定義される電子メールの件名行を次に示します。

```
Email address is not defined for some of the reviewers in attestation process
<Attestation Definition.Process Name>, request <Attestation Request.Request Id>
```

本文

メッセージの本文は次のとおりです。

```
The following attestation reviewers do not have email addresses defined. Attestation
requests have been generated for these reviewers and can be accessed by logging into
Oracle Identity Manager. However, notification emails were not sent.
Attestation process: <Attestation Definition.Process Name>
Attestation Request ID: request <Attestation Request.Request Id>
Request date: <Attestation Request.Request Creation Date>
Reviewers Without Email: <Attestation Task.Reviewer First Name> <Attestation
Task.Reviewer Last Name> [<Attestation Task.Reviewer User Id>]
```

スペシャル・コメント

レビューアの詳細が複数ある場合は、1 行に 1 件ずつ表示されます。

B

管理者のためのシステム設定上の考慮事項

この付録では、管理およびユーザー・コンソールのどの機能を有効にするかに応じて、有効にする設定と、作成する必要があるレコードについて説明します。これには、Oracle Identity Manager の管理およびユーザー・コンソールの機能をサポートするための、Oracle Identity Manager Design Console でのプロビジョニングや関連する設定ファイルの編集に影響を与えるリソース定義、プロセス・フォーム、承認プロセス、およびその他のレコードの設定が含まれます。これらの設定がすべて、あらゆるユーザーに関係するわけではありません。

Oracle Identity Manager の管理およびユーザー・コンソールをデプロイする前にこの項をよく読み、意図するとおりに機能するよう正しく設定してください。

注意： Oracle Identity Manager の管理およびユーザー・コンソールのユーザー・インタフェースをカスタマイズするには、『Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソール・カスタマイズ・ガイド』を参照してください。

管理およびユーザー・コンソールの機能	説明
ユーザーの登録機能	
ユーザーが Oracle Identity Manager で自己登録できるようにするには	「System Configuration」フォームの「**Is Self-Registration Allowed**」プロパティを「**true**」に設定します。「System Configuration」フォームは、Oracle Identity Manager Design Console から使用できます。
ユーザーが検証用の質問を選択し、また登録時にその質問に対する正解を指定するようにするには	「System Configuration」フォームの「**Does user have to provide challenge information during registration**」プロパティを「**true**」に設定します。「System Configuration」フォームは Oracle Identity Manager Design Console から使用できます。
ユーザーに回答を求める検証用の質問の数を指定するには	「System Configuration」フォームの「**Number of Questions**」プロパティを、ユーザーに回答を求める質問の数に設定します。**Lookup.WebClient.Questions** 参照定義で入力した質問の数が、「**Number of Questions**」プロパティの値以上になるように注意してください。質問の追加作成が必要となる場合もあります。 「System Configuration」フォームは、Oracle Identity Manager Design Console から使用できます。

管理およびユーザー・コンソールの機能	説明
検証用の質問と回答を設定する際に、ユーザー選択用の質問リストを指定するには	**「Lookup Definition」**フォームの各質問に対して、**Lookup.WebClient.Questions** 参照定義に行を定義します。 「Lookup Definition」フォームは Oracle Identity Manager Design Console から使用できます。
自己登録で承認が必要となるようにするには	**「ユーザー登録」**承認プロセスに、承認タスクを定義します。
ユーザー・プロファイル情報に応じて、異なる自己登録承認ワークフローを設定するには	**「リクエスト」**リソース定義に対する追加の承認プロセスを定義し、リクエスト・オブジェクト・アクションが少なくとも**「エンティティの作成」**であることを必要とするルール要素を持つ**プロセス決定**タイプのルールを作成します。新しいルールを**「リクエスト」**リソース定義の承認プロセスに関連付けます。これにより、Oracle Identity Manager は、選択するプロセスを判断できます。
自己登録に基づいてユーザーがグループに自動的に追加されるようにするには	**「一般」**タイプのルールを定義し、登録時にユーザーが追加されるユーザー・グループの定義にアタッチします。これにより、Oracle Identity Manager は、登録時に入力された基準に基づいて、ユーザーをどのグループに追加するかを判断できます。ルールの基準がユーザーが入力した基準と一致する必要があります。
アクセス権限	
すべてのユーザーがアクセスを許可されるページを指定するには	**「すべてのユーザー」**ユーザー・グループの「メニュー項目」タブでページを指定します。
各種の管理グループがアクセスを許可されるページを指定するには	該当する管理ユーザー・グループ（たとえば System Administrators、AdminGroup1 など）の「メニュー項目」タブでページを指定します。
管理者用のアカウント作成機能	
他のユーザーのための Oracle Identity Manager アカウントの作成を管理者に許可するには	これらの管理者が所属するグループを、管理対象のユーザーを含む組織の「管理者」タブに必ず追加してください。
ユーザー・アカウントの作成時に管理者がデータを入力するようにフィールドを設定するには	フィールドを `FormMetaData.xml` ファイルに作成します。詳細は、『Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソール・カスタマイズ・ガイド』を参照してください。
ユーザー・アカウントの作成時に必須フィールドを指定するには	フィールドを `FormMetaData.xml` ファイルに作成します。詳細は、『Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソール・カスタマイズ・ガイド』を参照してください。
ユーザーが自動的にメンバーにされるグループを指定するには	**「一般」**タイプのルールを定義し、登録時にユーザーが自動的に追加されるユーザー・グループの定義にアタッチします。これにより、Oracle Identity Manager は、アカウント作成時に入力された基準に基づいて、ユーザーをどのグループに追加するかを判断できます。ルールの基準が、入力された基準と一致する必要があります。
管理者が管理下のユーザーを追加できるグループを指定するには	これらの管理者がメンバーであるグループが、ユーザーの追加を許可するグループの定義の「管理者」タブに追加されるようにします。

管理およびユーザー・コンソールの機能	説明
ユーザーのプロファイル編集機能	
ユーザーが開始した Oracle Identity Manager プロファイル更新で承認が必要となるようにするには	**「ユーザー・プロファイルの編集」**承認プロセスに、承認タスクを定義します。
ユーザーが開始するプロファイル更新で、異なるワークフロー承認を設定するには	**「リクエスト」**リソース定義に対する追加の承認プロセスを定義し、リクエスト・オブジェクト・アクションが少なくとも**「エンティティの変更」**であることを必要とするルール要素を持つ**プロセス決定**タイプのルールを作成します。ルールを**「リクエスト」**リソース定義の承認プロセスに関連付けます。これにより、Oracle Identity Manager は、選択するプロセスを判断できます。
ユーザーが自身のプロファイルで編集可能なフィールドを制御するには	`FormMetaData.xml` ファイルでフィールドを設定します。詳細は、『Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソール・カスタマイズ・ガイド』を参照してください。
管理者用のアカウント変更機能	
どのユーザーが他のユーザーのプロファイルを編集できるかを制御するには	各種の管理グループのメンバーがアクセスできるフォームを指定する必要があります。また、それらのグループを、管理下のユーザーを含む組織の**「管理者」**タブに追加する必要もあります。
管理者がどの Oracle Identity Manager システム・フィールド（たとえばユーザー ID、名など）を編集できるかを制御するには	他のユーザーのかわりに管理者が編集できるようにするフィールドを指定する必要があります。編集可能にするフィールドは、*FormMetaData.xml* ファイルで指定する必要があります。詳細は、『Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソール・カスタマイズ・ガイド』を参照してください。
管理者が編集できるユーザー定義フィールド（社会保障番号、ローカル ID など）を制御するには	他のユーザーのかわりに管理者が編集できるようにするフィールドを指定する必要があります。それらのフィールドが表示される管理およびユーザー・コンソールのページによっては、*FormMetaData.xml* ファイルを編集して、属性定義とそのフィールドの参照を追加することが必要になる場合があります。詳細は、『Oracle Identity Manager 管理およびユーザー・コンソール・カスタマイズ・ガイド』を参照してください。

索引

G

GUI，3-3

J

Java VM システム・プロパティのレポート，16-12
JMS メッセージ機能の検証，16-11

M

Microsoft SQL Server の JDBC ライブラリ可用性のチェック，16-8
Microsoft SQL Server の前提条件チェック，16-9

O

Oracle Identity Manager，1-1
　アテステーション，A-1
　検索，3-2
　使用，3-1
Oracle Identity Manager のライブラリと拡張機能のバージョンのレポート，16-12
Oracle Identity Manager のライブラリと拡張機能のマニフェストのレポート，16-13
Oracle Identity Manager パスワードの有効期限レポート，14-2
Oracle の前提条件チェック，16-9

R

Remote Manager のステータス，16-11

S

SSO 診断情報，16-13

T

To-Do リスト，7-1
　アテステーション・リクエスト，7-5
　オープン・タスク，7-3
　保留中の承認，7-2

W

WebSphere の埋込み JMS サーバーのステータス，16-10
WebSphere のバージョンのレポート，16-12

あ

アカウント
　作成，2-2
　パスワードの変更，2-3，4-2
　「マイ・アカウント」リンク，4-1
アカウント・ロックのステータス，16-10
アクセス・ポリシー，11-1
　管理，11-4
　作成，11-2
　「リソース管理者」オプション，12-3
アテステーション，A-1
　概要，A-1
アテステーション・タスク
　アクション，A-7
　アテステーション・ドリブンのワークフロー機能，A-11
　権限に対するレビューア・レスポンス，A-8
　作成，A-6
　送信したタスクの処理，A-8
　ワークフロー・ダイアグラム，A-6
アテステーション・タスクのコンポーネント
　アテステーション・アクション，A-3
　アテステーション・スコープ，A-3
　アテステーション・データ，A-3
　アテステーション日，A-3
　タスク・ソース，A-3
　レビューア，A-3
アテステーション・ダッシュボード，15-8
　アテステーション・リクエスト詳細の表示，15-9
　使用，15-8
　スケジュール済タスク，15-10
　電子メール通知，15-10
アテステーション・プロセス，15-2
　アテステーション・エンジン，A-10
　アテステーション受信ボックス，A-4
　アテステーション・ダッシュボード，15-8
　アテステーション・リクエスト，A-4
　委任，A-5
　委任されたレビューアへの通知，A-13
　管理，15-5
　管理者の管理，15-7
　拒否されたアテステーション権限，A-15
　財務的に意味を持つリソース，A-4
　削除，15-6，A-2
　作成，15-3
　実行，15-7
　実行履歴の表示，15-7

スケジュール済タスク，A-11
スケジュールの定義，A-2
スコープ，A-2
設定，15-2
タイプ，A-2
タスク・コンポーネント，A-3
定義，A-2
電子メール，A-12
電子メールが定義されていないレビューア，A-16
プロセス管理者，A-2
プロセス所有者，A-2
編集，15-6
無効化，15-6，A-2
無効なアテステーション・レビューア，A-14
有効化，15-6
ライフサイクル，A-6
レビューア設定，A-2
レビューアへの通知，A-12
アテステーション・プロセス・リスト・レポート，14-2
アテステーション・リクエスト，7-5
コメントと委任の更新，7-7
表示，7-5
保存，7-6
アテステーション・リクエストの詳細レポート，14-2

お

オープン・タスク，7-3
再割当て，7-4
表示，7-3
レスポンスの設定，7-4

か

管理およびユーザー・コンソール，1-1
エンドユーザー，1-2
管理者，1-2
承認者，1-2
ユーザー・ロール，1-2
ログアウト，2-4
ログイン，2-4
管理グループ，10-5
権限の更新，10-7
作成，10-6
割当て，10-5
管理者グループ
権限の更新，12-4
作成，12-3
割当て，12-3

く

グループ・メンバーシップ履歴レポート，14-3
グループ・メンバーシップ・レポート，14-2

け

権限のサマリー・レポート，14-2
検索
検索の動作，3-3
リクエスト，6-11
ワイルドカードの使用，3-2

し

自己登録，2-1
リクエストのトラッキング，2-3
システム設定上の考慮事項，B-1
承認の詳細，6-13
承認プロセス，1-3
診断ダッシュボード，16-1
JBoss へのデプロイ，16-4
WebLogic へのデプロイ，16-6
WebSphere へのデプロイ，16-5
インストール，16-3
インストール確認，16-2
インストール後チェック，16-3
起動，16-6
使用，16-7
テスト，16-8
診断ダッシュボードのテスト
Java VM システム・プロパティのレポート，16-12
JMS メッセージ機能の検証，16-11
Microsoft SQL Server の JDBC ライブラリ可用性のチェック，16-8
Microsoft SQL Server の前提条件チェック，16-9
Oracle Identity Manager のライブラリと拡張機能のバージョンのレポート，16-12
Oracle Identity Manager のライブラリと拡張機能のマニフェストのレポート，16-13
Oracle の前提条件チェック，16-9
Remote Manager のステータス，16-11
SSO 診断情報，16-13
WebSphere の埋込み JMS サーバーのステータス，16-10
WebSphere のバージョンのレポート，16-12
アカウント・ロックのステータス，16-10
スケジューラ・サービスのステータス，16-11
ターゲット・システムの SSL トラストの検証，16-12
データ暗号化キーの検証，16-11
データベース接続性のチェック，16-10

す

スケジューラ・サービスのステータス，16-11

そ

操作レポート，14-2
Oracle Identity Manager パスワードの有効期限，14-2
アテステーション・プロセス・リスト，14-2
アテステーション・リクエストの詳細，14-2
グループ・メンバーシップ，14-2
権限のサマリー，14-2
ポリシーの詳細，14-2
ポリシー・リスト，14-2
リソース・アクセス・リスト，14-2
レビューア別のアテステーション・リクエスト，14-2
組織，9-1
管理，9-2
検索と表示，9-2
作成，9-2
詳細の管理，9-3
組織詳細，9-3

た

ターゲット・システムの SSL トラストの検証，16-12
代行者
　指定，4-3

ち

チャレンジ質問と回答
　指定，4-3

て

データ暗号化キーの検証，16-11
データベース接続性のチェック，16-10
デプロイメント・マネージャ，13-1
　デプロイメントのインポート，13-4
　デプロイメントのエクスポート，13-2
　ベスト・プラクティス，13-6

と

トラッキング
　リソース・リクエスト，6-11

ひ

表示
　アテステーション・リクエスト，7-5
　承認の詳細，6-13
　「...」で表すテキスト・エントリ，3-3
　プロセス・フォームでの子表，3-4
　プロビジョニングの詳細，6-13
　リクエスト・ステータス履歴，6-15
　リクエストのコメント，6-15

ふ

プロビジョニングの詳細，6-13
　ユーザー / 組織ごとの表示，6-14
　リソースごとの表示，6-14
プロビジョニングプロセス，1-3

ほ

ポリシーの詳細レポート，14-2
ポリシー・リスト・レポート，14-2
保留中の承認
　確認，7-2

ま

マイ・アカウント，4-1
　パスワードの変更，4-2
　表示と変更，4-2

ゆ

ユーザー，8-1
　管理，8-4
　作成，8-2
ユーザー・プロファイル履歴レポート，14-3
ユーザー・メンバーシップ履歴レポート，14-3
ユーザー・リソース・アクセス履歴レポート，14-3
ユーザー・リソース・アクセス・レポート，14-2

り

リクエスト，6-1
　作成と管理，6-2
リクエストのコメント，6-15
リソース
　管理，12-2
　許可，6-3
　「このリソースに関連付けられた組織」オプション，12-2
　再有効化，6-7
　失効，6-9
　表示，5-2
　マイ・リソース，5-1
　無効化，6-5
　モデル , 概要，1-2
　リクエスト，5-3，5-4
　リクエストのトラッキング，6-11
　「リソース認可者」オプション，12-5
　「リソース・ワークフロー」オプション，12-5
　ワークフロー，12-5
　ワークフロー・ビジュアライザ，12-6
リソース・アクセス・リスト履歴レポート，14-3
リソース・アクセス・リスト・レポート，14-2
リソース管理，12-1
リソース管理者，12-3
リソース・パスワードの期限切れレポート，14-2
リソース・リクエスト
　表示，5-3
履歴レポート，14-3
　グループ・メンバーシップ履歴，14-3
　ユーザー・プロファイル履歴，14-3
　ユーザー・メンバーシップ履歴，14-3
　ユーザー・リソース・アクセス履歴，14-3
　リソース・アクセス・リスト履歴，14-3

れ

レビューア別のアテステーション・リクエスト・レポート，14-2
レポート，14-1
　Crystal Reports，14-5
　CSV エクスポート，14-5
　Oracle Identity Manager パスワードの有効期限，14-2
　アテステーション・プロセス・リスト，14-2
　アテステーション・リクエストの詳細，14-2
　グループ・メンバーシップ，14-2
　グループ・メンバーシップ履歴，14-3
　権限のサマリー，14-2
　サード・パーティ製ソフトウェア，14-5
　実行，14-3
　詳細の表示，14-5
　操作，14-2
　入力パラメータの変更，14-4
　表示，14-4
　フィルタ，14-4
　ポリシーの詳細，14-2
　ポリシー・リスト，14-2
　ユーザー・プロファイル履歴，14-3
　ユーザー・メンバーシップ履歴，14-3

ユーザー・リソース・アクセス，14-2
ユーザー・リソース・アクセス履歴，14-3
リソース・アクセス・リスト，14-2
リソース・アクセス・リスト履歴，14-3
リソース・パスワードの期限切れ，14-2
履歴，14-3
レビューア別のアテステーション・リクエスト，14-2

わ

ワークフロー定義のプロビジョニング，12-12
イベント・タブ，12-12
タブ，12-12
ワークフロー・ビジュアライザ，12-6
起動，12-6
使用，12-6
タスク詳細へのアクセス，12-13
タスク・ノード・メニュー，12-10
展開ノード，12-11
ドラッグ・アンド・ドロップの使用，12-9
「表示オプション」メニュー，12-9
ユーザー・インタフェース，12-8
ワークフロー定義のプロビジョニング，12-12